

325  
386



始







內村鑑三著

舊約十年

東京 聖書研究社

大正  
4. 12. 22  
內交





序文の代りに

多く書を作れば竟なし、多く學べば體疲る。(傳道之書第十二章十二節)  
イエスの爲し給ひし事は是等の外に尙ほ許多あり、若し之を一一記しなば其書この世に載盡すこと能はじと我は意ふ。(約翰傳  
第廿一章廿五節)

イエス彼等に答へて曰ひけるは……汝等〔舊約〕聖書に永生ありと意ひて之を探索ぶ、此〔舊約〕聖書は我に就て證する者なり。

(約翰傳第六章三十九節)

千九百十五年十二月九日

東京市外柏木に於て

内 村 鑑 三



附記

此書は主として明治三十三年（一九〇〇）年より同四十三年（一九一〇年）に到るまでの間に於て著者主幹の『聖書之研究』雜誌に掲げし舊約聖書研究に關する論文、改譯、註解等を集めて一書となせし者なり、外に創世記の註解は『洪水以前記』と稱して別冊となし既に發行せり、約百記の研究は近き將來に於て別に一冊として發行せんと欲す、其他『研究十年』の中に舊約聖書に關する研究論文二三あり、又舊著『興國史談』は世界歴史の立場よりする舊約聖書の側面觀として讀者に思料を供するのと尠少ならざるべし。

著者

舊約十年目次

號数は『聖書之研究』又は『新希望』のそれなり、數字は頁數なり。

人物研究

- アブラハム傳の研究……………一
- 第三百三號(明治四十一年十月)より第三百五號に涉り掲載。
- モーセ傳の研究……………三六
- 第三百八號(明治四十二年四月)より第三百十二號に涉り掲載。
- 預言者エリヤ……………七四
- 第九十五號(明治四十一年一月)より第九十八號に涉り掲載。
- 士師ギデオン……………一三三
- 第八十六號(明治四十年四月)より第八十八號に涉り掲載。
- エレミヤの聖召……………一八二
- 第七十四號(明治三十九年四月)第七十五號に「耶利米亞記感想」と題して掲載。



女王エステル……………101  
 第四十三號(明治三十六年八月)に「事實の福音」と題して掲載。  
 士師エフタ……………114  
 第四百十三號(明治四十五年六月)掲載、明治四十三年以後の作なりと雖も便宜のために此蒐集  
 に收む。

聖詩譯解

鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く……………117  
 第三十六號(明治三十六年三月)に掲載。  
 ダビデの弓の歌……………121  
 第三十七號(明治三十六年四月)に掲載。  
 我れ山に向ひて目を擧ぐ……………126  
 第三十八號(明治三十六年四月)に掲載。  
 エホバは我が光なり……………120

第三十九號(明治三十六年五月)に掲載。  
 諸の天は神の榮光を願はし……………124  
 第四十號(明治三十六年五月)に掲載。  
 善惡の差別……………125  
 第四十一號(明治三十六年六月)に掲載。  
 モーゼの祈禱……………125  
 第四十四號(明治三十六年九月)に掲載。  
 エホバを讚めまつれ……………126  
 第四十五號(明治三十六年十月)に掲載。  
 神は我儕の堅城……………127  
 第二十六號(明治三十五年十月)に掲載。  
 猶太人の愛國歌……………127  
 第十一號(明治三十四年七月)に掲載。  
 永遠の慈愛……………127



第百二十八號(明治四十四年二月)に掲載。 二九七

毒舌絶滅の祈禱……………三〇八

第百二十九號(明治四十四年三月)に掲載。

幸福なる家庭……………三二一

第百二十七號(明治四十四年一月)に掲載。

豊稔の歌……………三二六

第百三十六號(明治四十四年十一月)に掲載。

詩篇片々……………三三〇

第百二十七、百二十九、百三十五號に分載。

預言書の研究……………三三〇

以賽亞書私譯……………三三〇

第百二十八號(明治三十八年十月)六十九號、第七十二號、七十三號、第百十七號、百十八號、第百二十號、百二十一號に掲載。

死骨の復活……………四三〇

第七號(明治三十四年三月)に掲載。

預言者エゼキエルの偽預言者觀……………四三七

第八十九號(明治四十年七月)に掲載。

預言者哈巴谷の聲……………四四四

第百十六號(明治三十六年十一月)、四十七號、四十八號に掲載。

聖書其儘

アイの攻撃……………四七三

第九十四號(明治四十年十二月)に掲載。

眞の預言者……………四八〇

第五十五號(明治三十七年八月)に「預言者小傳」の一として掲載。

神をして代りて戦はしむ……………四八四

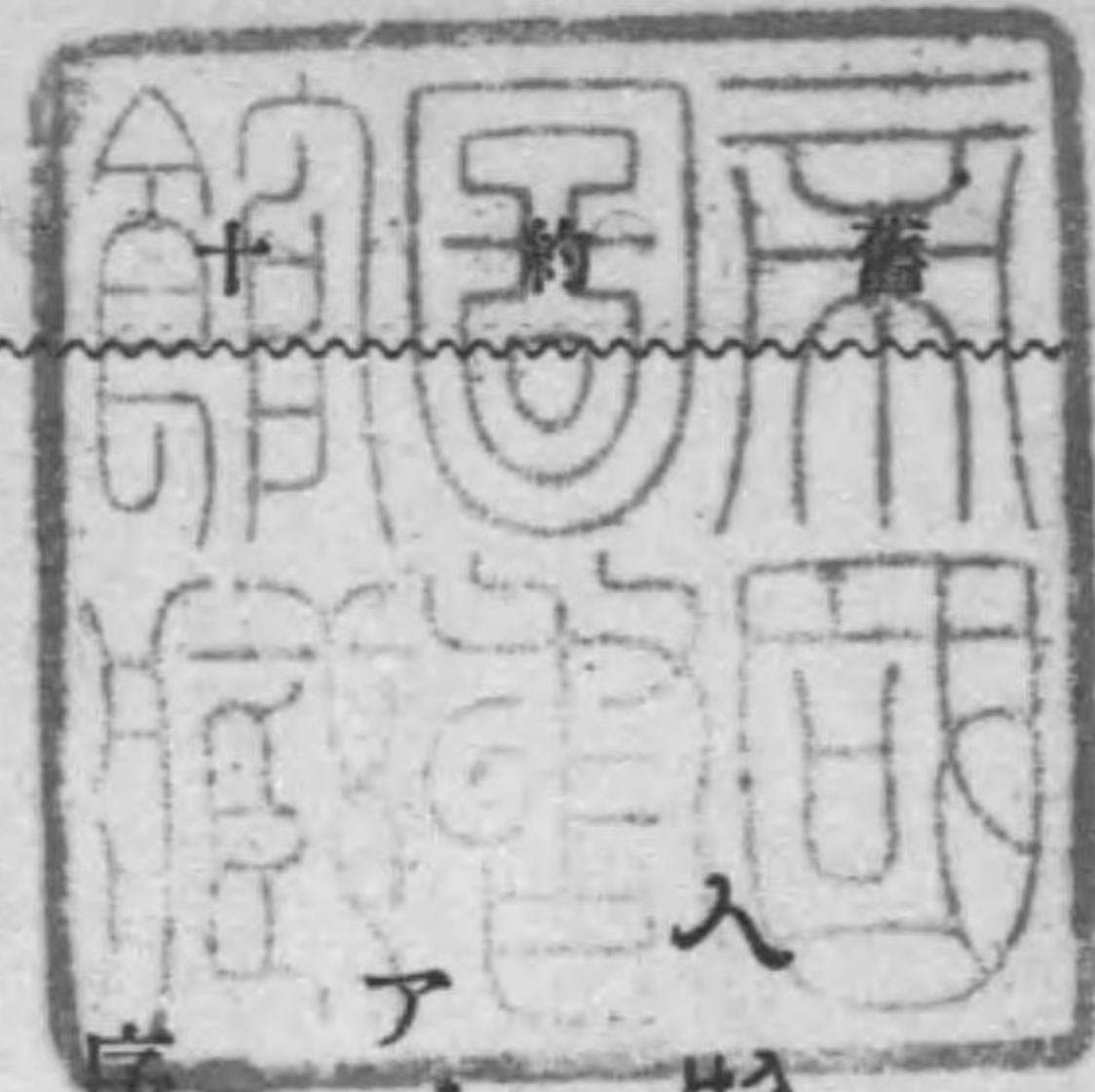
第六十八號(明治三十八年十月)に掲載。



目次終

舊約十年

内村鑑三著



人物研究

アブラハム傳の研究

序言

年

(1)

舊約聖書が解らないで新約聖書は解らない、舊約は新約の最も善き註解である。アブラハムは今日の我等に關係のない人物ではない、彼は今より四千年前の人であるが、然し信仰的には我等の極く近い友人である、我等と境遇を異にし時代を異にしたる彼は我等の信仰の父である、彼の傳記に解し難い事は尠くない、然し其の中心たる



信仰の一事は我等の善く解し得る所である、信仰的のアブラハムは實に今日現下の人物である。

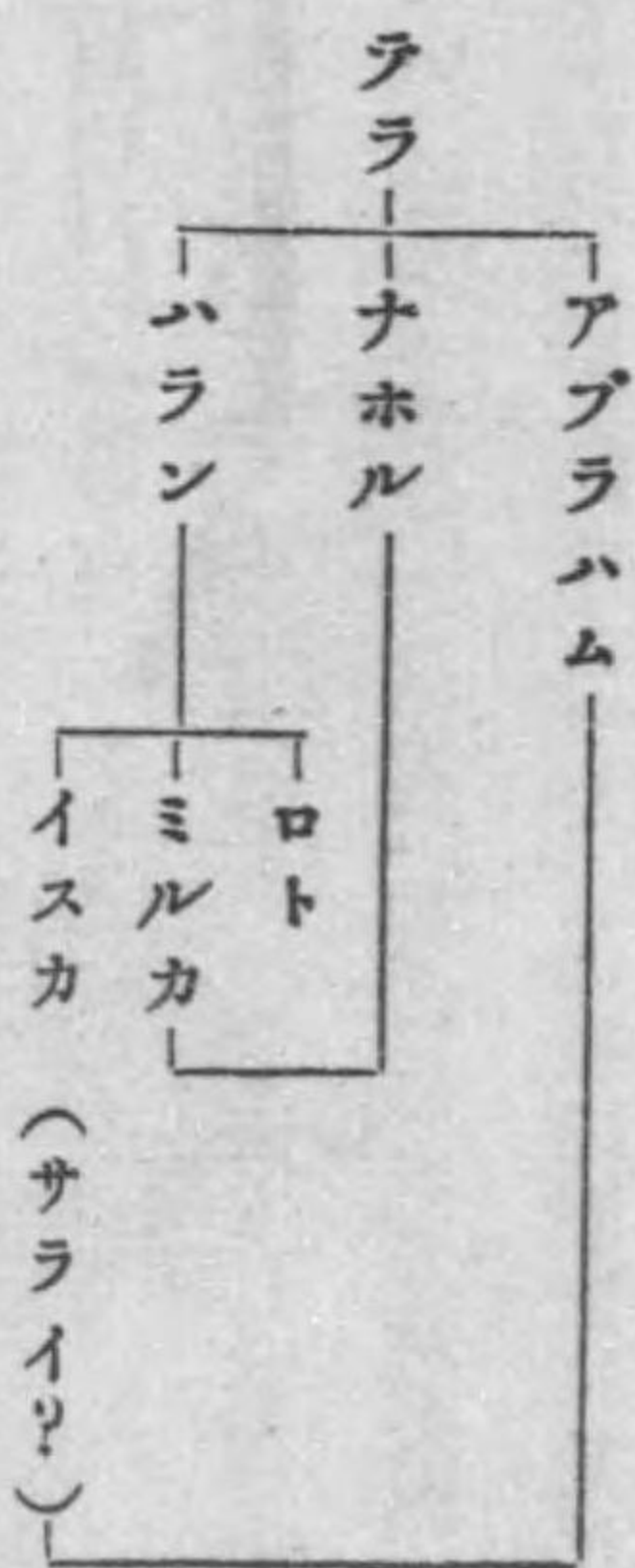
アブラハムの傳記を以てイスラエル人の歴史は始つた、隨て是はキリストの生涯と直接の関係がある、キリストの生涯は其多くの點に於てアブラハムのそれに像られたる者である。

新約聖書に列祖(羅馬書九章五節)とあるはアブラハム、イサク、ヤコブの三人を指して云ふたのである、基督教は神がアブラハムに誓はれし約束に従つて出たものである。

### テラの移住

(創世記十一章二十七節以下)

アブラハムの父をテラと云ふた、「テラの傳」と云ふは其系圖と云ふと同じである、但し祖先の系圖を云ふのではなくして、子孫のそれを云ふのである、之を表に作れば左の通りである、



テラに三人の子があつた、アブラハムは多分其の長子であつたのであらう、ハラは三人の子を遺して早世し、ナホルはハランの女即ち彼の姪を迎へて妻となした、アブラハムの妻をサライと云ふた、彼女はハランの女イスカと異名同人であつたらうとの説がある、或ひはさうであつたかも知れない、二十章十二節に彼女が彼の近親であつたことが記してある、何れにしろテラ家の一族は或る避け難き事情のために近親結婚を行つた事は確かである。

爾うして其事情とは何であつたらう乎、確かには解らないが、多分周圍の偶像信者と混合を避けんがためであつたらう、テラ家の故郷なるカルデアのウルは有名なるバビロンの市より遠からず、偶像崇拜の盛んなる地であつた、恰かも我國の名古屋市の



如き所であつて、繁華なる不道德なる所であつたらしい、此中に在て純潔なるエホバ崇拜を維持せんと欲す、近親結婚は止むを得ざる次第であつたのであらう、神の子等が人の女子を娶て妻となしたのが洪水以前に於ける聖民墮落の起因であつた(六章二節)、又後に至てアブラハムが其家宰に囑して其子イサクのためにカナン人の女を妻とし娶らざらしめたのも此ためである(二十四章二、三節)、結婚は私事であつて私事でない、信仰維持のためには近親結婚も時には止むを得ない、此事勿論今日の我國に於て基督教徒は佛教徒と結婚してはならないと云ふことではない、悪人の滔々として基督教會内に入來りし今日、信徒相互の結婚は不信者との結婚よりも危険である、テラの一家の場合に於ては信仰は道德であつた、異教信者との結婚を避けて、彼は罪惡の感染を避けたのである。

テラが終に其故郷カルデヤのウルを去りし其理由も亦其腐敗を避けんためであつたに相違ない、恰かも清黨の祖先が英國を去て新英洲に到りしと同然、移住の目的は經濟的ではなくして信仰的であつた、人類の歴史に於ける大事業は屢々斯かる移住に由て成

つた、若しテラが偶像崇拜の盛なるカルデヤのウルを去らなかつたならば如何であつたらう、若し彼が多く的情實に纏はれ、彼の將來を慮りて舊き腐つたるカルデヤの地に止て居つたならば如何であつたらう、モーセの一神教は無つたであらう、パウロの基督教は無つたであらう、隨てダンテの天主教も、ルーテルの新教も無つたであらう、隨て吾人今日の信仰も無つたであらう、テラの斷乎たる移住は實に今日より見れば世界的の事業であつた、此創世記の數節の中に人類四千年間の進歩歴史の源因が籠つて居る。

### アブラムの移住

(創世記十二章一—八節)

テラ、カルデヤを去てユウフラテス河の上流ハラン(カランと訓むべし)の地に到り、其目的地たるカナンに達する能はずして其地に死んだ、依て其子アブラム、父の志を繼いで更らに西の方カナンに向て出立した、  
爰にエホバ、アブラムに言ひ給ひけるは、汝の國を出で、汝の親族に別れ、汝の父



の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ  
 と(一節)、是れ奉ずるに随分辛い命令であつた、「アブラム乃ちエホバの己に言ひ給ひし言に従て出たり」と、目的のない移住である、何處へ行けと云ふのではない、「我が汝に示さん其地に到れ」との命令である、神に導かる、儘に行けとの事である、而かもアブラムは躊躇しなかつた、彼は萬事を神に委ねて親族と父の家とを後にして行先不明の旅程に就いた。

テラはウルウルのの市民の中より選抜され、アブラムはテラテラのの一族の中より選抜された、選抜(豫定)は神が人を救ふの順序である、精選又精選、斯くして信仰も淘汰されるのである。

シケム(七節) 後にテラテラのの市の建てられし所、イエスが其邊にてサマリヤサマリヤのの婦人と語り給ひしと云ふヤコブの井戸の在りし所より程遠からぬ所にある。「處」とあるは「聖處」の意であつて、「シケムの神聖なる所」即ちアブラムが後に祭壇を築きし所との意であらう、「及び」は「乃ち」と讀むべきである、祭壇は「モレの橡樹」と稱し、當時有

名なる大木の在りし所に築かれたのである。

斷然家郷を去りしアブラムの信仰に報むんがためにエホバは茲に己を彼に顯はし給ひて「我れ汝の苗裔ウサに此地を與へん」との約束を賜ふた。

テラとアブラムの二回の移住に由て、茲に選民發展の端緒は開かれた、神の命令に出で、人の信仰に成り、祝福されたる端緒であつた。

### 饑饉をエジプトに避く

(第十二章九節以下)

此記事の中に信仰上、別に注目を値ひすべき者はない、たゞアブラムが小なる虚言を吐いて無益の心配を己が身に招き、其妻を大なる危険に陥おとしいらしめし事、エホバの特別の干涉に由り、妻の節操を全うするを得し事が録してある、信者は虚言は小なるものと雖も語るべからずである、又不信者に取りては彼が信者を肉慾の器うつはと爲さんとするは大なる危険である、神はそれがために彼(不信者)を憐あはまし給はん、彼は速かに彼



(捕はれし信者)を放釋すべきである。

アブラム、ロトと別る

(第十三章)

アブラム、エジプトより歸り、ベテルとアイの間に暫時の居を定めた、時に彼の家財は増して甥のロトと共に同所に居住する能はざるに至つた、アブラムの牧者とロトの牧者との間に競争が始つた、二人は分離せざるを得ざるに至つた、然るに此時に方てアブラムは其甥ロトに向つて伯父たるの權威を振はなかつた、彼は甚だ謙遜で又深切であつた、彼がロトに曰へる言は實に平和を愛する人の言である、

我等は兄弟なれば、請ふ、我と汝の間、及び我が牧者と汝の牧者との間に競争あらしむる勿れ、地は皆な汝の前に有るにあらずや、請ふ我を離れよ、汝、若し左に往かば我れ右に往かん、又汝若し右に往かば我れ左に往かん

と(八、九節)、是れ普通、伯父が甥に向て發する言でない、誠にエホバの忠僕之言である、

アブラムの性格は此等の言に於て善く現はれて居る。

然しロトにはアブラムの謙遜がなかつた、彼は伯父に譲らんとは爲なかつた、彼は伯父の提言其の儘を受けて、己の欲する所を選んだ、彼れは東の方ヨルダン低地の善く潤澤<sup>うるは</sup>ひてエデンの園の如くなるを見て自から之れを選んで其處に移つた、然るに何んぞ計らん、潤澤の地は罪惡の地であつた、ソドム、ゴモラといひて古代惡徳を以つて有名なる市邑の在る所であつた、大慾は無慾に等しである、ロトは肥えたる土地を擇んで罪人の中に陥つた、彼の不幸は東方移住を以つて始つたのである、其の事は後に審かである。

之に反して其甥に先きを譲りしアブラムは其謙遜と讓退とに由て大なる祝福を得た、

ロトのアブラムに別れし後、エホバ、アブラムに言ひ給ひけるは、汝の目を擧げて汝の居る所より西東北南を瞻望<sup>のぞ</sup>め、凡そ汝が觀る所の地は我れ之を汝と汝の裔<sup>すえ</sup>に與ふべし、我れ汝の後裔を地の塵沙<sup>ちんさ</sup>の如くなさん、若し人、地の塵沙を數ふることを得ば汝の後裔も數へらるべし、汝、起て縦横に其地を行き巡るべし、我れ之を汝に



## 與へんと。(十四—十七節)

是れ實に大なる約束である、爾うして是れはアブラムの其甥ロトに對する寛大の措置の報賞として彼に與へられたのである、アブラムは善きものを他人に譲て、己れはそれよりも更らに善きものを神より賜はつた、謙遜の結果は常に此通りである、得んと欲する者は失ひ、失はんと欲する者は得る、無慾は大慾に等しである、アブラムの無慾はエホバの歡ぶ所となりて、彼に福祉を來すの基因となつた。

アブラムを信仰の人といふは、彼が斯かる人であつたからである、彼が何にも今日世に稱する宗教的熱心家であつたからではない、彼がエホバの聖名を喧しく唱へたからではない、彼の性格と行爲とが謙遜で、従順で、寡慾であつたからである、信仰の人とは斯かる人である、神の命とあれば斷乎として之に従ひ、人に對して寛大に、争つて利を己に收めんとしない人、是れが信仰の人の模範である、アブラムは平和主義の人、謙退の人であつた、故に萬世に繼續すべき國民の祖父となつた。

ロト、アブラムを離れて選民の淘汰は更らに一步を進めた、此時よりしてロト族の運

命はアブラム族の運命の正反對であつた、其事は創世記を研究するに循て益々明かに現はれて來る、祖先の決斷一つに由て子孫千代の運命は定まるのである、慎むべきは人生の岐路に立てる時の吾人の行爲である。

## ケダラオメルの侵入

(創世記十四章)

甥は慾に驅られて伯父の許を去て悪人の地に入つた、然し伯父は甥を忘れなかつた、其危急の場合に臨んでは危険を冒して其救済に赴いた、そうして危急の場合とはエラムの王ケダラオメルのソドム侵入であつた、彼は東方三人の王と結んで西方バレスチナの地に攻入つた、茲にソドムの王とゴモラの王とは他に三人の王と結んで之を防がんとした、東方四人の王は西方五人の王とシデムの谷に戦つた、而うして戦争は全く西軍の敗北に歸した、ソドムとゴモラの兩市は掠奪され、其人民と財産とは戦勝者の運び去る所となつた、而して被害者の中にアブラムの甥ロトがあつた、此事、アブラ



ムを知る所となるや、彼は蹶然として起つた、家人三百十八人を率ひ、大軍の跡を逐ひ、ダマスコの邊に於て之に追及し、ロトと其家族並に財産を奪回した、平和好きのアブラムは臆病者ではなかつた、危急の場合に臨んでは彼は勇者と化した、茲にアブラム劍を抜いて敵を屠つたとは書いてない、然し彼が腕力に訴へて彼の甥を救つたことは確かである、ケダラオメルの侵入に由て計らずもアブラムの勇敢性は發揮せられた、アブラムが戦争に類したることを爲したのは唯の一回、此時丈けである、此時を除いては彼の全生涯は平和なる家庭の生涯であつた、名を萬世に垂れたるアブラムは功を戰場に立てたる人ではなくして、純然たる家庭の人であつた、アブラム傳は主として彼の家庭談である。

アブラム、ケダラオメルと其聯合軍を撃破りて歸るや、途にサレムの王メルキゼデクがパンと酒とを携へて彼を迎ふるに會ふた、此人は至高き神の祭司なりしと云ふ、即ち一神教の信者であつて、アブラムと信仰を同らせし者、ソドムゴモラの王等とは全く主義信仰を異にしたる者であつた、彼れアブラムを祝して言ふた、

願くは天地の主なる至高き神アブラムを祝福し給へ

願くは汝の敵を汝の手に付し給ひし至高き神に稱譽あれ

と、實に立派なる祝福の言辭である、拜すべき者は至高き神、彼は天地の主なりと云ひ、而して功績は之をアブラムに歸せずして彼に勝利を賜ひし此至高き神に歸すべしと云ふ、此祝福の辭に接せしアブラムの歡喜は如何許りなりしぞ、彼は即座に彼の所有の十分の一を饋りて此人に對する彼の尊敬を表した、異郷カナンの地に在てアブラムと信仰を同らし、彼に深き同情を寄せし者は實に此メルキゼデク一人であつた、アブラムと其子孫とは永久に此人の恩を忘れなかつた、其事は詩篇第一百篇四節、希伯來書五章より七章までに照らして見て明かである。

メルキゼデク王去て後にアブラムを迎へし者はソドムの王であつた、彼は曰ふた、人を我に與へ、物を汝に取れ

と、是れ無禮の言であつた、己れは戦に敗れ、家人と家財とを敵に奪はれ、之を回復し能はざるに、今やアブラムの之を奪回し歸へるに及んで其處分を彼に要求したので



ある、アブラムは之を聞いて怒らざるを得なかつた、

我れ天地の主なる至高いとたかき神エホバを指して言ふ、一本ひとすぢの絲にても鞋くつひも帯にてもすべて汝の所屬もつは我れ之を取らざるべし、恐らくは汝「我れアブラムをして富ましめたり」と言はん

と、アブラムはソドムの王よりは一本の絲にても鞋くつひも帯にても受けじとの事であつた、至高いとたかき神の祭司なるサレムの王に接しては之に其所有の十分の一を獻ぜしアブラムは、神を識しらず、奢侈わいぜつに耽たふり、不法、猥褻わいせつを以て其民の上に立ちしソドムの王よりは絲一本をも受けじとのことであつた、柔和なるアブラムは又豪氣の人であつた、彼は聖者に物を饋くつて惜まなかつたと同時に又俗人よりは絲一本たりとも受けんとしなかつた、我れ天地の主なる至高いとたかき神エホバを指して言ふ、一本の絲にても鞋くつひも帯にても汝の所屬もつは我れ之を取らざるべし、

と、我等も亦、その貴族なると、商人なると、外國宣教師なるとに關はらず、卑俗の人が我等に物を與へんとする時に方てはアブラムの此言を以て斷然之を斥くべきであ

る。

註、ケダラオメル (Chedorlaomer) はバビロン語のクーツル・ラヒメル (Kudur Lugo-hor) 即ち「ラゴメル (神の名) の僕」の意であつて、之に類したる名のバビロン王の中にありしことは該地方に於ける近世の考古學的發見に由て明かになつた。

シナルの王アムラベルはバビロン語のハムムラビ (Hammurabi) であつて、彼が紀元前二千二百年頃西方亞細亞に於て覇權を振つたことは今や歴史上疑問を挿み難きこととなつた、所謂ハムムラビ律と稱し、羅馬法、摩西律よりも更らに古き法律は始めて此人に由て編成された、アブラムの時代は決して野蠻時代ではなかつた、今を去る四千年前の事ではあるが、其時既に法律も有り、文學もあつた、殊に天地の主なる至高いとたかき神の崇拜があつた、聖書の年代の計算に由てアブラムの時代は紀元前千九百年乃至二千年として知られて居つたが、今やエウフラテス河岸に於ける古代文明の遺物の發見に由て此計算に大なる違算のなかつた事が明白になつた、即ちアブラムの年代を紀元前二千年と見て大差のないことが判明つた。



## 嗣子の祈求

(創世記十五章)

自己に不實なりし甥の難に赴いて之を救ひ、聖者に會ふて之に多大の尊敬を表し、惡者に會ふて其有利なる提供を斥く、ケダラオメル侵入事件に際してアブラムは彼の勇敢と敬虔と寡慾の本性を彰はした、茲に於てかエホバは例に由りて復た彼に顯はれて曰ひ給ふた、

アブラムよ、懼るゝ勿れ、我は汝の干櫓なり、汝の甚だ大なる賚なり

と、アブラムは他に對して寛大であり、自己に對して寡慾であつた、故に神は彼を慰めて曰ひ給ふた、缺乏を懼るゝ勿れ、そは天地の主なる我は、我は汝の干櫓、汝の甚大の賚なれば也と、實に神に依る者の受くる賚は金でもなければ銀でもない、又其干櫓は政府でもなければ教會でもない、神御自身である、彼れ御自身が彼等の最高き櫓、最固き砦である、而して又彼れ御自身が我等の最貴き寶である、エホバは今此貴き教

理をアブラムに傳へ給ふた、然しアブラムはまた此事が能く解らなかつた、故に彼はエホバに答へて曰ふた、

主エホバよ、汝、我に何を與へんとし給ふや、我れは子なくして逝かん、此ダマス

コのエリエゼル我が家の相續人なり、視よ、汝、我に子を賜はず、我が家人、我が

嗣子とならんとす、

と、アブラムが今望んで歌まざる者は嗣子であつた、然るに彼に子なくして、彼の財産は家人ダマスコのエリエゼルの手に渡らんとす、神は彼に甚大の賚を約束し給ひしと雖も彼は之を受けて何かせん、世に子に勝ざるの寶なきに非ずや、神は彼に子を賜はず、彼は神が彼に下さんとす「賚」の何たる乎を解する能はずと。

「我れ子なくして逝かん」「子なくして居り」ではない、「嗣子なくして逝らん、憐むべき我ならずや」との意である。

然れども神は怨言がましきアブラムの此言を責め給はなかつた、却つて彼に嗣子をも賜はんと約束し給ふた、夜、彼を屋外に携出し、天空に輝く星を示し、「汝の子孫は是



の如くなるべし」と言ひ給ひて彼に力附け給ふた。

七節以下は古代に於ける誓約の式である、之に類したる式は希臘人の中にも行はれた、即ち馬の屍を二つに截つて盟約者は相携へて其間を通つたのである、神が人と盟約を結ぶに方て人の定めたる法式に循つたとは信じ難いことであるが、然し今に至て其眞偽を判断することは出来ない、或ひは神が幼稚の民を教ゆるに方て斯かる手段を執られたのである乎も知れない、或ひは七節以下を省いて直に十六章一節を讀めば前後の聯結が善く附くの見れば、第七節以下契約締結に關する記事は後世の人の想像挿入に係る者であつて、實際に有つた事でない乎も知れない、聖書の言は必しも是非其儘に解釋しなければならぬ者ではない、敬虔と常識とを以て之を究め、其解し難き者は解し難き者として存し置くべきである。

此章の中に於て最も肝要なる言は第六節である、

アブラム、エホバを信ず、エホバ之を彼の義とし給へり。

我等、キリストの福音を信ずる者に取りては此言葉の意味は明白である、パウロは幾

回か此言葉を引いて其解説を試みた(羅馬書四章三節、加拉太書三章六節)、此言葉は又雅各書二章二十三節、希伯來書九章八、十七節にも引かれてある意義深遠の言葉である、實にアブラムの全生涯が信仰の生涯であつたのである、彼が特に神に愛せられたのは之れが爲めである、彼を正義の人といふことは出来ない、彼は殊更らに信仰の人であつた、神の命としあれば疑はずして之れを信じ、其示すが儘を行つた、故に正義の人ならざりしアブラムは其信仰に由て正義の人として認められた、而して彼は實際に正義の人となつた、彼がソクラテスや孔子と異なる所は茲に在る、此世の義人は先づ義しからんとする、神の人は先づ神を信ぜんとする、神に信賴せんとする、二者の道義は其發足點に於て違つて居る、アブラムは此點に於てキリスト系の人である、故に我等の兄弟であつて又我等の祖先である。

### アブラムの失敗

(創世記第十六章)



神はアブラムに子を賜はんと約束し給ふた、然し其妻サライには子がなかつた、依てアブラムとサライとは思ふた、嗣子は多分正妻に由て與へられるのではあるまいと、彼等は如何にもしてアブラムの身より出たる嗣子を得んとした、茲に於て當時の習慣に従ひ、サライは其侍女をアブラムに與へ、彼女に由て嗣子を得んとした、誘惑はアダムとエバとの場合に於けるが如く、女より出で、男に由て行はれた、而して欲ふ通りに子を得て大波瀾は平和の家庭に臨んだ、サライは自己の供せしエジプト人ハガルを惡んだ、アブラムは彼女に抗言ふことが出来なかつた、ハガルは終に懐胎の身を以て家を逐はれた、アブラムは心に大なる悲痛を感じた、是れ彼の生涯に於ける大失敗である、彼は是れが爲めに終生苦んだ、聖書人物の中で失敗しない者はイエスキリストを除いて他に一人もない、モーゼも、ギデオンも、エリヤも、エレミヤも、パウロもベテロも皆な失敗した、而してアブラムも亦其數に漏れなかつた、人は其最も得意の點に於て失敗する者である、アブラムの得意とせし所は其の聖き平和なる家庭であつた、而して彼は家庭に於て失敗したのである、彼は神の定め給ひし時を待つ能はずして餘り

に嗣子を得たさに妾を蓄へて終生拭ふべからざるの苦痛を招いた、然し止むを得ない、彼も亦人である、神の攝理に於て是れ彼のために却て善き事であつたのであらう、此苦痛と失敗とに由て彼は深く神の恩恵を知つたのであらう、聖書はアブラムを完全の人として吾人に紹介しない、信仰の始祖なるアブラムも亦人である、故に失錯り易き者である、然り、實際に失錯つた者である、故に我等の兄弟である、我等の推察し得る、又我等の近づき得る者である。

ハガル、アブラムの男子を生めり、アブラム、ハガルの生める其子の名をイシマエルと名づけたり、ハガル、イシマエルをアブラムに生める時彼は八十六歳なりきとある(十五、十六節)。第二十一章參考。

### 割禮の制定

(創世記第十七章)

アブラム失敗の後十三年を経てエホバはまた彼に顯はれて曰ひ給ふた、



我はエルシャダイなり、汝、我前に歩みて完全まっかかれよ  
 と、エルシャダイ、之は譯ば「全能の神」である、莊嚴なる名であつて、エホバと云ふが如き親しみ易き名でない、アブラムは罪を犯して後久しき間、神より遠とほざかつて居つたと見える、故に神は復び彼に顯はれ給ふに方て此嚴めしき恐ろしき名を以てし給ふた、神は又前回の如く「アブラムよ、懼るゝ勿れ云々」とは言ひ給はなかつた（前章一節）、「汝、我前に歩みて完全まっかかれ」と、是れ確かに詰責の言葉である、「汝、何を爲したる乎、シツカリせよ」と言ふが如き詰責に警誡を加へたる言葉である、之を聞ききたるアブラムは「地に俯伏したり」とある、左もあるべきである、茲に於て神又彼に告げて曰ひ給ふた、

我れ汝と我が契約を立つ、汝は衆多の國民の父となるべし、汝の名を此後アブラムと稱ぶべからず、アブラハム（衆多の國民の父）と稱ぶべし、そは我れ汝を衆多の國民の父と爲せばなり云々

と、罪の増す所には恩恵めぐみもいや増せり（羅馬書五章二十節）、失敗の後のアブラムは却

て彼が會て受けし最大の契約に與つた、嗣子は必ず彼に與へられるのであらう、而して彼は大國民の祖先となるのみならず、衆多の國民の始祖となるであらう、故に彼は彼の名を改むべきである、彼は最早アブラムと稱すべきではない、アブラハムと改名すべきであると、アブラムは「高き父」の意であつて日本語の高祖に相當する、然し彼は單に一國民又は一宗派の高祖たるに止まるべきでない、故に其名をアブラハム、即ち「衆多の國民の父」と改むべきである、そは彼の子孫は全世界に擴がり國を異にし、政まつりごとを異にし乍ら、等しく彼を始祖として仰ぐべければなりとの事であつた。

アブラハムは斯かる契約に接して更らに驚いたであらう、然し信仰を以て其生命の根柢と定めし彼は亦此事をも信じ得たであらう、如何にして、又如何なる意味に於て彼が衆多の國民の父となるのである乎、其事はキリスト降世二千年後の我等ならでは能く解らない、然し、アブラハムは小兒の如き信仰を以て神の此契約を其言辭ことばなりに納けたであらう、聖書はすべて預言の書であつて、歴史はすべて其實現である、アブラハムは今日實に誠に衆多の國民の父であるではない乎。



茲に於て割禮の式が定められた、是れは男兒の陽の皮を割ることである、早くより埃及人、亞拉比亞人等の間に行はれし習慣である、其最初の目的は衛生にあつたのであらうとの事である、然し、茲には古き式が新しき意味を以てアブラハムに授けられたのである、イスラエル人に取ては割禮は病毒豫防のための習慣ではない、宗教的儀式である、然し實際に於ては豫防を兼ねたる儀式であつたことは言ふまでもない、聖書の中にある儀式は大抵は古き習慣に新らしき意味を加へたものである。

### ソドムとゴモラの滅亡

(創世記第十九章)

ソドムとゴモラは今の死海の在る所にあつた市であると言傳へられて居る、其事の眞偽は今後の地理學的探檢に依らなければ分らない、或ひは死海の底より古い市の遺跡が出て来るかも知れない、何れにしる二市共に今や地上に痕跡をだも留めない事は確かである、ソドムとゴモラとの滅亡は實に文字通りの全滅であつた。

二者の腐敗は其極度に達した(第十八章廿三節以下を見よ)、アブラハムは其中に五十人の義人はあらうと思つたが、善く數へて見ると五十人も無かつた、四十人と思ふたが四十人も無つた、三十人、二十人、十人と段々と數を減して算へて見たが十人も無つた、實に憐むべき状態である、茲に於てアブラハムは神に二市の救済を乞ふて見たが、既や乞ふの理由を發見し得なかつた、神は容易に社會や國家を滅し給はない、義人其跡を斷ち、腐敗其極に達して、全然人類の團體として存在するの理由を失ふまでは之を滅し給はない、然し存在の理由を失つた以上は之を滅さずには置き給はない、滅すは人類全體の幸福のために必要である、ソドムとゴモラとを其儘に存し置いて正義は正義で無くなるに至る、實に止むを得ない。

二市の如何程腐敗せし乎は第十九章一節より十節までを讀んで見て分かる、是れ二市の罪惡の一端である、斯かる暴戾は毎日のやうに行はれたのであらう、清潔の念もなければ慈悲の念もない、外來人を扱ふこと甚だ酷、唯利慾と淫縱にのみ耽けた、茲に至て全滅の命令は天使に由て降つた、二人の天使は先づロトに告げて曰ふた、



汝の婿、子、女、及びすべて市に居りて汝に屬する者を此所より携へ出づべし  
と、然るに憐むべし、ロトは財産の損失を恐れて出づることが出来なかつた、彼の婿  
の如きは曰ふた

之れ戯言なり

と、而して容易に市の滅亡を信じなかつた、茲に於てか天使は遅延ムロトと其妻と其  
二人の女の手を取り、無理に彼等を市の外に導き出した、然るにロトは尙も斷念し得  
ずして遠く山地に逃れんことを拒み、天使に乞ふて其附近の小村ゾアルの邑に至り其  
處に二市の滅亡を目撃して居つたらしい、ロトの妻の如きは今や燼滅せんとする己が  
家屋や財貨を惜んで止まず、生命を救はんとて逃げず、途中に彷徨き居りし間に終に  
天火の執らム所となり「鹽の柱となりたり」と言ふ。

ロト、ゾアルに至れる時、日、地の上に昇れり、エホバ硫黄と火を天よりソドムと  
ゴモラの上に降らしめ、其市と低地と其市の居民、及び地に生ふる所の物を盡く滅  
し給へり(二十三—二十五節)。

是れ火山作用に由る天然の現象であつたことは今の死海附近の地質状態より推して見  
て能く分かる、而して之に類したる現象は我國に於ては明治二十一年の岩代國盤梯山  
の破裂、又西洋に在ては紀元七十九年に於ける伊太利國ボムペー、ヘルクレイニムの  
二市の破滅である、特に後者の場合は其天然の井に道德的狀態に於て善くソドムとゴ  
モラのそれに似て居る、又ロトの妻が鹽の柱と成つたと云ふことは盤梯山の破裂の時  
に木や草が急に上より降り來る硫黄に蔽はれて硫黄の柱となつたと云ふことであるが、  
其事に能く似て居る、鹽と云ふは勿論化學的の鹽類ではない、鹽に似た物であつて、  
多分盤梯山と同じく硫黄であつたらう。

故にソドムとゴモラ滅亡の談は事實談ではないと云ふ説は立たない、之に類したる事  
は實際他にも有つた、唯問題は天然の現象は人類の道德的狀態に應じて來るものでは  
ある乎、それである、然し是れノアの大洪水其他の所謂刑罰的大災害に關して起る問題  
であつて、低地の二市の場合に於てのみ起る問題ではない、然し人も天然の一部分で  
あつて、其道德は天然と深い關係を有つたものであるから、今遽かに二者の間に關係



はないと速断することは出来ない、聖書の此記事は猶ほ此儘に存して置いて可う。  
 ソドムとゴモラの滅亡は世の最後の滅亡の前兆である、其事は彼得後書三章十節以下  
 其他を讀んで見て分る、而して其時に臨み注意すべきは之に對する世人多數の態度で  
 あらう、彼等も亦ロトと等しく容易に世の滅亡を信じまい、彼等はロトの婿と等しく  
 曰ふであらう「之れ戯言なり」と、而して神に救はるゝ者、即ち信者と稱する者まで  
 も、ロトと等しく強いて手を以て天使に引き出されるまでは滅ぶべき此世を去らない  
 であらう、而して彼等の或者はロトの妻と等しく回顧りて途に亡ぶるであらう、而し  
 て最後の滅亡の時ばかりで無い、今でも爾うである、今でも人は容易に惡魔の支配す  
 る此世を捨てない、彼等はナンとかカンとか理屈を附けて此世に縋り附かんとする、  
 憫はしきは實に人間である、大破滅の世に臨みつゝあるに關はらず、何時までも此世  
 の人として存らんとする、何にも四千年前のソドムとゴモラの事ではない、今日現下  
 の吾人の事である、ソドムとゴモラとに行はれしやうな罪惡は今吾人の中にも行はれ  
 て居らないか、吾人の中に義人は幾人あるか、果して滅亡を免かるるに足る丈けあるか、

是れ大に思考すべき問題である。

### イサクの献供

(創世記第二十二章)

アブラハムに取り何よりも大切な者はイサクであつた、彼は彼に取り、すべての財産  
 よりは勿論、自己の生命よりも大切であつた、アブラハムのすべての希望は彼の一子  
 イサクの中に籠つて居つた、之れなからん乎、彼の存在は無意味となるのである、彼の  
 神に對する信仰までも之に繋つて居つた、イサクを失ふはアブラハムに取りては神を  
 失ふに等しかつた。

然るに神はアブラハムに命じて

汝の子、汝の愛する一子、即ちイサクを携へてモリヤの地に到り、我が汝に示さん  
 とする彼所の山に於て彼を燔祭として献ぐべし

と曰ひ給ふた、是れアブラハムに取りては何よりも辛らい命令であつた、多分此命令



は此時始めて彼に下つたのではあるまい、イサクが生れしと同時に彼の心に臨んだる微かなる聲であつたらう、彼が彼の老年に於て設けし一子を愛する餘りに切なるより彼は輒もすれば之を己が屬と思ひ、神が特に彼に賜ひし者であつて、是れ亦神の屬であることを忘れんとしたであらう、彼は度々心に思ふたであらう、他の物はこれを神に献げてもイサク丈けは献げることが出来ない、縦し我は死んでも此子は存して置かなければならないと、然し神は彼に此不信を許し給はなかつた、故に益々聲を高くしてイサクの献供を迫り給ふたであらう、此時イサクは歳が二十五であつたらうとの事であれば、事の終に茲に至りしはアブラハムに取りては二十五年間に渉る試練の後であつたらう、實に辛らかつたであらう、若し薄信の人であつたならば速に試練に負け仕舞て、イサクを保存せんがためにエホバの神を棄て去つたであらう。

然かしアブラハムは終りまで神を信じた、神の命に従ひ故郷のカルデアを去り、神の命に従ひハラシに故舊親戚を残してカナンの地に彷徨ひ、神の命に従ひ千辛萬苦して今日まで來つた、彼は最後に信仰の戦に負けてイサク欲しさのために神を否むべきで

はない、彼は決心した、彼は彼が己が生命よりも貴しとするイサクをも献げんと決心した、彼は茲に於て己が生命を献ぐるよりも辛らい犠牲を爲したのである。

斯く決心してモリヤの山に向て出立した、途に二人の従者を留め、父子相携へて途に進んだ、イサクは父アブラハムに語りて曰ふた、

父よ

と、彼れ答へて曰ふた、

子よ、我れ此にあり

と、此時のアブラハムの心は何處であつたらう、口には言はねども心は張り裂くばかりであつたらう、誘惑の悪魔は此時復た彼の心に懷疑を起させたではあるまい乎、無情なる神よと、我れ神を信ぜざりしものと、仁慈の神が人の子の犠牲を要求し給ふ理あらんやと、萬感交々浮び、足も竦まんばかりであつたらう、然し、彼は又心を取直したであらう、故にイサクが再び彼に對ふて

火と柴薪は有り、然れど燔祭の羔は何處にあるや



と問ひし時に、アブラハムは曰ふた

子よ、神自から燔祭の羔を備へ給はん

と、是れ遁辭でもあり、亦希望でもあつた、「神、或ひは遁逃の途を開き給はん」と。

斯くて二人は偕に進み往きて遂に神の示し給へる處に到つた、其處にアブラハムは壇を築き、柴薪を列べ、其子イサクを縛りて之を壇の柴薪の上に置いた、斯くして手を舒べ、決心の臍を固ため、刀を取りて其子を宰らんとした、嗚呼一刹那、其刀がイサクを貫いたならば如何であつたらう、老ひたるアブラハムは其刀を採りて己で己が身を貫いて其處にイサクと共に燔祭の煙と共に消えて仕舞うたではあるまいか、然し

エホバエレ（エホバ備へ給はん）

エホバは憐憫の神である、其子を苦しめんと欲して苦しめ給ふのではない、其罪の本源たる利己の心を殺ががために苦しめ給ふのである、既に犠牲の決心と行爲とが現はれて、エホバは其餘を要求し給はない、天より聲あり、アブラハムに告げて曰ふた  
汝の手を童子に按くる勿れ、亦何をも彼に爲すべからず

と、嗚呼救ひ！然り恩恵！愛子を一たび神に獻げて彼は再び神より之を與へられた、

イサクは今や前より強き意味に於てアブラハムの子となつた、アブラハムは茲に復た犠牲の何たる乎を覺つた、犠牲は棄てるのではない、更らに得るのである、燔祭の供物は神御自身別に之を備へ給ふた、牡羊は林叢の中に繋がれて在つた、

アブラハム即ち往きて其の牡羊を執らへ、之を其代りに燔祭として獻げたり、

是れで萬事は濟んだ、此後は又々恩恵の契約である、エホバの使者再び天よりアブラハムを呼びて曰ふた、

エホバ諭し給ふ、我れ己を指して誓ふ、汝、是事を爲し、汝の子、即ち獨子を惜まざりしに因りて我れ大に汝を恵み又大に汝の子孫を増して天の星の如く濱の砂の如くあらしむべし、汝の子孫は其敵の門を獲ん、又汝の子孫によりて世界の民皆な祝福を得べし、汝、我が言に遵ひたるに因りてなり

と、斯くてアブラハムは信仰の戦争に勝ち、凱旋の讚美を揚げながらイサクと共にモリヤの山を降り、其妻サラの天幕へと還つたであらう、然り、我等も亦すべて神より



我等の有する最も善き物を要求せられるのである、或ひは子である乎、或ひは妻である乎、或ひは財貨である乎、或ひは位階である乎、或ひは此世の名望である乎、或ひは時には技藝學問である乎、何れにしる我等各自が己が生命よりも大切なりと思ふ者を要求せられるのである、其時が信仰の大試験である、此試験に及第して我等は始めて完全に神の屬となるのである、然し此試験に落第して我等は其時まで得しものまでをも悉く失ふに至るのである、人生の大事とは實に此時である、我等各自の永遠の運命の定まるのは實に此時である。

然るに嗚呼、此試験に及第した者、又は及第し得る者は幾人ある乎、神を信ずる十年又は二十年、而して此試験に際會す、献ぐべき物は財産又は名譽、然るに之を献げ得ずして此世の人と化し去つた人は實に多いではない乎、此世は實に信仰の試験の落第者を以て充ち盈ちて居るではない乎、我等は茲にアブラハム傳を研究して信仰維持の決して容易でない事を知るのである、凡てを献ぐるにあらざれば神の屬となることは出来ない、イサクをさへ献げてアブラハムは始めて完全に神に納けられた、嗚呼、我

等も亦神の恩恵に由り我等のイサクをも献げんかな。

因に曰ふ、人を犠牲として献ぐることはイスラエル人に取ては大なる罪惡として信ぜられて居た、然るに茲にアブラハムの最大の信仰的行爲としてイサクを献げし事が記されてある、是れ或人に取りては解するに甚だ難いことである。

然し多分神はアブラハムよりイサクを燔祭の供物として献げんことを要求し給ふたのではあるまいと思ふ、之を單に神に献げよと告げ給ひしにアブラハムは壇の上に燔祭として献ぐるより他に犠牲の何たる乎を知らざりしに由り、彼の思想に應ふ方法を以て献げんとしたのであると思ふ、アブラハムは誠に犠牲の精神を解した、然れども其方法を誤つた、献ぐるとは刀を以て宰ると云ふことではない、自己の所有權を放棄することである、故に神はアブラハムの精神を受け給ひて其方法を斥け給ふたのであると思ふ。



## モ ー セ 傳 の 研 究

## モ ー セ の 五 書

## 舊約聖書研究の必要

今の信者は、殊に日本の基督教信者は、舊約聖書を読むことが至て尠ない、彼等に取りては聖書と云へば新約聖書のことである、彼等は舊約の如きは彼等の信仰に何の關係も無い者であるかのやうに思ふて居る。

然しながら是れ大なる誤謬である、聖書は舊約と新約とより成る者であつて、其一を缺いて聖書は完全なる者でない、新約は花であり果であるが故に見るに美はしく食ふに善くあると雖も、然し之を結んだる者は舊約の根と幹とである、樹は其果を以て知らると云ふが、樹を知らずして其の果の如何を知ることが出来ない、舊約を知らざる新約の智識は頼るに足りない者である、新約のみを以て養成されたる信者が往々にし

て憐むべき信仰の最後を遂ぐるのは、彼等が深く彼等の信仰の根を舊約の磐根に突入れないからである。

## 愛國心養成のために必要なり

今の信者が新約に重きを置いて舊約を顧みない主なる理由の一は彼等の信仰が餘りに個人的であるからである、彼等は唯單へに彼等各自の靈魂を救はれんと欲する、彼等に取りては救済とは彼等が一人一人にキリストに由て神に救はるゝことである、國家的救済と云ふことの如きは彼等は措いて之を省みない、彼等は國家は之を政府に任かし、政黨に委ねる、之を神に任かし神に由て之を救はんとするが如き思考は今全く彼等の念頭を去つた、故に主としてイスラエル國の救済に就て記せる舊約聖書は自づと彼等の注意を惹かないやうになつた、是れ彼等に取り國家に取り最も歎すべきことである、我等の愛國心も亦神の我等に賜ひし者であれば、我等は之を神より離して此世の政府と政治家に献すべきではない、我等の靈魂が神に由て聖めらるゝの必要がある如く、我等の國家も亦神に由て救はるゝの必要がある、而して舊約は主として「如



何にして神が國民を救ひ給ふ乎」其事を記したる書である、故に是れ何人も深く研究すべき書であつて、此書を等閑に附するが如きは信仰の大缺點であると云はなければならぬ。

何れの國にも愛國者は無いではない、我國にも多くの愛國者があつた、然しながら人類の歴史に顯はれたる最も高い最も聖い愛國者はイスラエルの愛國者であつた、何れの國にも未だ曾てモーセの如き、エレミヤの如き崇高にして莊嚴なる愛國者の出たこととは無い、若し理想の愛國者を見んと欲するならば我等は之れをイスラエルの歴史即ち舊約聖書に於て見なければならぬ、而してイスラエルの愛國者に學びて國に眞正の愛國者が出るのである、英國に於てもアルフレッド大王の如き、コロムウエルの如き、ジョン・ブライト、グラッドストンの如き愛國者はすべてイスラエルの愛國者であつた、歐洲大陸に於ても爾うである、米國に於ても爾うである、余輩の知る所によれば未だ曾てイスラエルに學ばずして愛國者と稱すべき愛國者の出た例は無いと思ふ、余輩の此言を疑ふ者は舊約聖書に於てモーセ、イザヤ、エレミヤ等の傳を究むべ

きである、茲に此世を全く離れたる愛國心が働いて居る、自己以上なるは勿論、國家以上、人間以上の愛國心が働いて居る、愛國心は如何に聖く、如何に尊い者であるかはイスラエルの歴史を讀まなければ分らない、哲學者スペンサーの所謂

愛國心とは利慾の心を國家の上に表はしたるものなり

とか、或ひは博士ジョンソンの有名の言として傳へらるゝ

愛國心は佞人最後の隠場なり

と云ふが如きはイスラエルの愛國者に於てはその痕跡をだも見ることは出来ない、此に余輩は眞正の愛國心養成のために舊約聖書の研究を我國人に勧むる者である。

信仰確證のために必要なり

舊約聖書研究の必要は猶ほ他にも有る、其れは神が人を導き給ふ其方法を擴大して見ることである、神の法則はすべて一つである、大木が生長するも幼芽が発生するも其法則は一つである、大河が海の如くに大洋に注ぐも、細流が糸の如くに溝に入るも其法則は一つである、大は小に由て見るを得べく、小は大に由て見る事が出来る、宇



宙の美は茲に在る、大なるもの大ならず、小なるもの小ならず、大も小も皆な同一の法則に由て支配さるゝからである。

其如く神が個人を導き給ふも國家を導き給ふも其取り給ふ道は同じである、神に個人道徳と異なりたる國家道徳はない、同一の大陽が大陸をも照らし庭園をも照らすやうに、同一の父なる神が國家をも導き<sup>おぼへ</sup>嬰兒をも護り給ふのである、我は我心を護り給ふ神を歴史の神に於て認め、又イスラエルを護り給ふ神を我が凡ての<sup>むづか</sup>艱難よりの<sup>かくれは</sup>隠場として仰ぐのである、神はイスラエルを救ひしと同じ方法を以て我が靈魂を救ひ給ふのである、選民の歴史はすべて召されたる者の實驗である、新約は個人的で舊約は國家的であるとの區別は信仰的には決して立たない、同じく神が人を救ひ給ふ方法である、舊約は新約を擴大したる者である、舊約を緊縮したる者、其れが新約である、新約の微妙は之を擴大して舊約に於て見るを得べく、又舊約を昇華したる者が新約である、而して多くの場合に於て小は之を大に於て見るの利益がある如く、我等の信仰の場合に於ても、之を狭き胸の中の實驗としてのみ感ずることなく、時には之を廣き國

民の歴史として見るの大なる利益があるのである。

而して舊約聖書は斯かる歴史である、國民を一個人として見ての歴史である、

エシユルンは肥えて<sup>や</sup>踢ることを爲す、汝は肥太りて<sup>こえふと</sup>大きくなり、己を造りし神を棄て、己が救拯<sup>すく</sup>の磬を輕んず(申命記三十二章十五節)

とあるはイスラエルの民を一個人と見做して云ふたのである、神のイスラエルとはイスラエル國であつて、又イスラエル人である、イスラエルの歴史なる舊約聖書は國の歴史でもあり、又信者各自の實驗でもある、信者は之に由て其信仰を確<sup>たし</sup>かむることが出来る、内なる者果して外なる事に合<sup>あ</sup>ふか、微妙なる事果して顯明なる事である乎、信者は己れの實驗をイスラエルの歴史に較<sup>くら</sup>べて見て、己に就て此問題を解決することが出来る。

#### 五書の略解

舊約聖書は所謂モーセの五書を以て始まつて居る、即ち創世記、出埃及記、利未記、民數紀略、申命記、是れである、五書等しくモーセに由て書かれたりとの古代よりの



傳説に由て「モセーの五書」と稱せられるのである、其、誠に然るや否やは學者間に大なる議論のある問題であつて、今茲に之に就て余輩の判決を下すことは出来ない、然し五書を通してモセーが中心的人物であることは之を一讀して見て明かに分かる。五書は舊約の一部分であつて、別に一階級を爲して居る、否な、少く注意して讀で見ると五書は五書でなくして一書であることが分る、今、出埃及記一章一節を讀で見ると、英譯に於ては *Exodus* を以て始まつて居る、日本譯には此字が譯してないが、是は是非保存して置くべき文字である、即ち「而して」とか「さて」とか譯すべき片詞であつて前後の連續を示す文字である、即ち出埃及記一章一節は新たに卷を始むる者ではなくして、前の章節、即ち創世記の末章末節に續いて居る者である事を示して居る、同じ文字が次ぎの利未記の始めに於ても顯はれて居る、英譯聖書は *Leviticus* を以て始めてゐるが日本譯には茲にも之が除いて在る、是れ亦尠からざる手落であると思ふ、*Leviticus* は接續詞であつて是れ亦利未記を前の出埃及記に繋ぐ者である、其次ぎの民數紀略に於ても同じである、申命記は此片詞を以て始めて居ないが、然し其全體の内容より推して見

て是れ又前四書に續いて讀むべき書であることが分かる、斯くて五書は一書として見るべきである、其一人の作であるか、數人の編纂である乎は別問題として、其連續せる一の歴史的記録であることは疑ふことは出来ない。

倍、五書は一書であるとして、その五分されたる理由も亦之を探ぐるに難くない、五書は宇宙萬物が創造られてより選民が國民として存在するに至りしまでの歴史である、即ち其第一期が出生并に生長期であつて之を記せる部分が創世記である、其第二期は聖別期であつて之を記せるが出埃及記である、其第三期が規則制定期であつて、其記事が利未記である、其第四期が沙漠漂流期であつて、其記録が民數紀略である、其第五期が建設期であつて、之を記述するのが申命記である、イスラエル民族發達の順序が此の五書に於て善く顯はれて居る。

然れども五期は判然と區劃されたる時期ではない、個人の生涯に於けるが如く國民の發達に於ても一期は他の時期と相聯結して居ることは言ふまでもない、故に創世記を以て悉く宇宙創造の記事とのみ見てはならない、其、爾うでない事は之を一讀して見



れば明かに分かる、宇宙創造の記事は始めの三章を以て盡きて居る、次ぎに来るのが人類の草味時代に關する記事であつて、其次ぎに来るのがイスラエル民族選擇の記事である、創世紀の名は初めの數章より出た者であつて、全書に涉りて適用せらるべき者でない、出埃及記も爾うである、埃及エジプトを出るの記は是れ又始めの數章にて盡きて居る、其大部分は埃及を出てより後の記である、即ちシナイ山滯留記とも稱すべき者であつて、埃及には何の關係も無い者である。

利未記は主としてイスラエルの祭事に關する法令を掲げたる書である、之を利未記といへるは祭事はすべて利未レヴィの族なるアロンと其子孫とに委ねられたからである、又民數紀略と云へば何やら乾燥無味なる人口統計表のやうにも聞こえるが、民の統計を掲げたのは僅かに始めの二章であつて其他は主に民族の沙漠漂浪記である、終りの申命記はモーセの回顧録とも稱すべき者であつて、神が選民に下し給ひし恩恵の數々を述べて之を一輯して後世に傳へた者である、即ち五書を約めて言へば、選民の生長を記せる者其れが創世記である、其の救拯すくひを記せる者、其れが出埃及記である、其の祭事

儀令を蒐めたるもの、それが利未記である、其懷疑漂浪の狀を示せる者、それが民數紀略である、而して以上を回想し一括して後世を誡めし者、又之に由て自から約束の地に入りし記事が申命記である、生長、救拯、祭事、漂浪、平安、イスラエル民族も亦人生の此旅程を経て約束の地に入つたのである、而して之を順次に記したる者が所謂「モーセの五書」である。

五書は宛然長篇の抒情詩

モーセの五書が斯かる書であるとすれば、其、我等各自に深い關係のある書であることは一目瞭然である、我等も亦以上の旅程を経て我等の約束の國に入るのである、我等も先づ始めに肉の生長を爲し、次ぎに我等の埃及なる此世より救出され、其次ぎに嚴格なる祭事の下に聖き神に近かんとし、之に次いで長き間の懷疑の生涯を送り、終に全生涯に涉る神の恩恵を回想し、己に耻ぢ神の前に懺悔して後世を誡めながら自らも亦天のカナンに入るのである、其中に小兒時代の無邪氣なる歡喜がある、青年時代の冒險がある、潔清きよめと犠牲ひげんとを以て神に事へんとする苦るしき經驗がある、涙の谷



に彷徨ひし長き間の漂浪がある、而して漂浪息んで最後の歡喜が來る、五書は斯く解して長篇の抒情詩である、我等は古き過去に於ける異國の民の記録と見做して之を看過すべきではなからう。

### イスラエルの出生

(出埃及記第一章)

我れ我子をエジプトより召出せりと(馬太傳二章十五節)、イスラエルは國としてはエジプトより生れたものである、今を去ること凡そ三千二百年、アブラハム、カルデヤに生れてより凡そ七百年、彼の子孫はエジプトに降りてより愈増しに繁殖し、茲に一國民と成りて生れ出たのである、時にエジプトは既に世界の老大國であつて、太古の文明は此地に於て其發達の極に達した、而してイスラエルの民は此國に留まること既に四百餘年、太古文明の供する利益は悉く之を享受し、今より新たに其天職たる靈性發展の途に就かんとしてあつた、而して機會は外より又内より供せられた、外よりの

機會は爲政家の壓制であつた、内よりの機會は偉人モーセの聖召であつた、外なる壓制は内なる自由と相伴ひ、茲に世界歴史の大事事件なるイスラエル民族の出埃及は演ぜられたのである。

精神なき文明は國を榮えしめずして反て之を衰へしむ、エジプト國は其物質的文明の毒する所となりて今や茲に衰退の狀を現はした、然るに其中に客たりしイスラエルの民は生氣益々熾んにして

イスラエルの子孫饒く子を生子彌増殖え甚だしく大に強くなりて國に滿つるに至れり

とのことであつた(七節)、茲に於てか彼等はエジプト人の嫉み懼るゝ所となり、大なる壓制を彼等の上に招いた、然れども彼等の生氣は少しも衰ふべくもない、彼等は苦しむに隨ひて愈々増殖えたれば(十二節)、エジプト人は更らに彼等の撲滅策を講ずるに至つた、即ち彼等は古代に於て屢々行はれし嬰兒の殺戮を實行して此外來の民を根絶せんとした(馬太傳二章十六節以下參照)、エジプト王は產婆を召して之に命じてイ



スラエル人の中に生れし男子は悉く之を殺さしめんとした、然れども文明の情氣に觸れざりしヘブルの婦はエジプトの婦の如くではなかつた、彼等は強健にして産婆の彼等に至らざる前に産了れり

とのことであつた(十九節)、精神のみにあらず、肉體的にもイスラエルは遙にエジプト人に勝るの民であつた、此の生殖力を有する強健の民は到底、衰弱せる文明の民の壓潰すことの出来る者ではなかつた、彼等の體質に由て見るも自由は終に彼等の間に起らざるを得なかつた。

バロとヘロデ、彼等は東洋流の二大壓制家であつて同じ方法を以て光明を民の中より絶たんとした、然れども彼等と雖も攝理の大なる聖手に抗することは出来なかつた、神の人モーセはバロの壓制の手下より生れ、神の子イエスはヘロデの殘虐の劍を免かれた、而して前者はイスラエルの國を創立し、後者は神の國を建設した。

モーセの誕生

(出埃及記第二章上半)

神の途は人の途に非ず、

エホバを懼る者、エホバの賜ふ其憐恤は大にして天の地よりも高きが如し(詩篇

百三篇十一節)。

實に人の悲怒は汝を讀むべし(同七十六篇十節)。

神の民を絶たんとせしバロの計畫は終に己を滅すの基となつた、モーセはレビの婦に由て生れた、彼れ美はしき男子なりしかば彼の母は彼を殺すに忍びず、一時は彼を匿した、而して終に匿し得ざるに至て、バピラス草(萑)の舟を作りて彼を其中に入れ之をナイル河の水に委ねた、流や之を洗ひ去るべき、鱷魚や之を食ひ去るべき、然れども神は嬰兒と共に在り給ふた、バロの王女は身を洗はんとて河に下り來つた、是蓋し當時の習慣に循ひ、ナイルの水神を祭らんとためであつたらう、而して彼女の眼に止まりしはバピラス草の小さき箱舟であつた、彼女之を開いて見れば嬰兒は彼女を見て啼いた、バロは暴虐の君であつた、然し彼の女は仁慈の婦人であつた、彼女は嬰兒を水



の中より援出した、而して之にモーセ（援出）の名を與へて彼女の子として彼を養つた、子は親の罪を償ふと云ふ、此父にして此女があつた、バロの女はエジプト國將來の敵を養ふて不忠不孝の罪を犯したりと云ふべきであらう乎、然り、若しエジプト國のための人類であつて人類のためのエジプト國でないならば此詰責は適當であらう、然し世界に偉人モーセを供せし此王女は此詰責に當るべきであらう乎、池の尼は頼朝を援けしが故に不義不忠の婦であつたらう乎、日本國は平家を犠牲に供しても頼朝を要したではあるまい乎。

若し世界歴史の舞臺にモーセが現はれざりしならば如何？人類が有せし最初の自由は無つたであらう、所謂モーセの十誡は無つたであらう、隨て摩西律なる者は無つたであらう、それが故に四大預言者も十二小預言者も出なかつたであらう、隨てナザレのイエスも出ず、タルツのパウロも出なかつたであらう、隨て基督教世界千九百年の歴史は無かつたであらう、今の英國も無かつたであらう、米國も無かつたであらう、獨逸國も無かつたであらう、而して余輩が若しモーセ微りせば憲法的日本も無かつたであらうと言ふならば余輩の國人は余輩に向つて憤怒を發するであらう乎、モーセは實に世界文明の泉源である、猶太教も基督教も回々教も、亦之に伴ひしすべての美術も文學も哲學も一時は弱き一人の嬰兒と共に萑の箱舟の中に在てナイル河の流れに浮いて居つたのである、而して之を援出した者がバロの女である、纖弱き婦人の手の中に全世界の文明は嬰兒と共に託されたのである。

モーセはバロの女の下に在て老大國の王子として其授け得る最善良の教育を受けた、時に太古の文明の華は鐘つてエジプト國に有つた、政治、法律、宗教、文學、理學、藥學、之に加ふるに幻術と卜筮、……諸學に涉るモーセの造詣の如何に深かりしかは彼が後に彼の國人の爲めに作りし法律制度に由て知ることが出来る、彼は是等を直にエホバより授かりたりと言ふと雖も、エホバは物を人に授くるに彼が豫め有せざるものを以てし給はない、法律家には法律を授け、政治家には政治の智恵を授け給ふ、モーセの授かりし默示の大なりしに由て彼の素養の如何に大なりし乎を察する事が出来る。



## モーセの遁逃

(出埃及記二章下半)

モーセの教育は終つた、彼の智識的準備は成つた、彼は今より世に出て何にか大なる事を爲さんとした、彼は既に彼の埃及國の王子にあらざるを知つた、彼は彼のイスラエルの血統を認めた、彼は今より苦しめる彼の國人のために彼の力を揮はんとした、彼の愛國心は燃えた、彼の衷に義務の念は動いた、後に希伯來書の記者が曰ひし如く彼は

暫らく罪の樂を享けんよりは寧ろ神の民と共に苦難を受けんことを善とし

た(希伯來書十一章廿五節)、彼は一日野に出てそこに彼の同胞なるイスラエルの民がエジプト國の官吏の虐待する所となるを見た、彼は憤慨に堪えなかつた、四方を視まはし人の居らざるを見て其エジプト人を撃て殺し、之を砂の中に埋め匿くした、而して此事の終に發覺せんとしたれば、人を殺せし彼は己れも亦殺されんとを懼れ、終に獨

りエジプトの地を去て東の方、紅海の彼方なるミデアンの地に逃れた、憐むべし「エジプト人の學術を盡く教へられ、言と行とに才能ありし」モーセは未だ民を救ふの途を知らなかつた(使徒行傳七章廿二節)、彼は人の怒を以て神の義を遂げんとした、彼の志は嘉すべしとするも彼の取りし方法は全く誤つて居た、彼は多くの青年愛國者の取る途に由て彼の國人に自由を與へんとした、己れの暴力に訴へて暴虐者の暴を挫かんとした、彼は未だ國民救済の大任を委ねらるゝに足りなかつた、彼は今はエジプト人の學校ならで神の學校に行て學ぶの必要があつた。

而して其學校はシナイ半島ミデアンの地であつた、彼は茲に尙ほ四十年間の彼の修養を繼けた、今は教師と文字とを以てせずして、勞働と寂寞と山嶽と家畜とを以て彼は此所に神の事に就て教へられた、彼は血氣の頼るに足らずして頼るべきは神の靈なることを教へられた、彼は又人の怒は神の義を行す者でないことを教へられた、劍を以て人を殺すも民の自由は獲られないことを教へられた、四十年間に涉る曠野に於ける神との接觸に由て怒り易きモーセは柔和なるモーセと化した。



モーセは其人成、溫柔なること世の中のすべての人に勝れり  
 とある(民數紀略十二章三節)、是れ神の學校を卒へし後のモーセである、エジプトの  
 學者は彼に法律、理學、哲學を傳へ得た、然れども神のみ能く彼を溫柔の人となすこ  
 とが出来た。

モーセはミデアンの地に至りて計らずも其地の祭司リウエル(一名エテロ)の女に邂逅  
 した、而して彼女の導く所となりて祭司の家に至り茲に彼の客となり又終に其婿とな  
 つた、チボラ、之を譯せば「小鳥」である、鳥子は今はモーセ夫人となつた、モーセの  
 竄流にも亦小説的の所がある、彼は泉の傍に於て彼の未來の妻に會ふた、彼の新生涯  
 は茲に始つた、王女の宮殿に養はれし彼は牧羊者の女を娶つた、彼は茲に下つて平民  
 となつた、而して彼の向上は此時に始つた。

モーセの聖召

(出埃及記二章二十三節以下、三章、四章)

モーセは其死たる時百二十歳(申命記三十四章七節)、そのバロと談論ける時は八十  
 歳であつた(出埃及記七章七節)、故に彼は修養に全生涯の三分の二を費したのであ  
 る、埃及に於ける人の學校に於て四十年、シナイの曠野に於ける神の學校に於て四十  
 年、實に長い間の修養であつた、大器晩成の理に洩れず、偉人モーセも亦晩成の人で  
 あつた、實に彼は一時は此世に於ける活動を斷念したであらう、彼は曠野に於て羊を  
 牧ひながら神と偕に歩む生涯に慣れて、是れ以上の幸福を求めざるに至つたであらう、  
 世に事を爲さんと欲する者が事を爲すのではない、世の事業を斷念せし人、其人が大  
 事を爲すのである、時勢は終にモーセの出勤を促した、

斯くて時を経る程にエジプトの王死ねり、イスラエルの子孫其勞役の故によりて歎  
 き號ぶに、其勞役の故によりて號ぶ所の聲神に達しければ、神その長呻を聞き、神  
 そのアブラハム、イサク、ヤコブになしたる契約を憶へ、神、イスラエルの子孫を  
 眷み、神、知しめし給へり

と(二章廿三―廿五節)、以上三節の中に神と云ふ文字が五つある、期は已に熟して神



が人事に携らざるを得ざるに至つたこのことであらう、苛政は其極に達し、民の叫號の聲神に達したれば、神は其臂の力を發し、彼等を救ひ給へりとのことであらう。神、神、神と、イスラエルの歴史は實に神の歴史である、神を以て始まり、神を以て終て居る、イスラエルの爲したる事ではない、神が彼等を以て爲し給へる事である、此出埃及記も亦神の歴史である、特に神の歴史である。

モーセは其妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧ひ居りしが、其群を曠野の奥に導きて神の山ホレブに至るに、エホバの使者棘の裏の火焰の中にて彼に現はると(三章一、二節)、モーセは斯かる境遇に在て斯かる場所に於て神の聖召に接した、身は今は彼の舅の牧者と化し、羊と共にホレブの山奥に入りし時、神は彼に現はれ給ふた、禮服を着けて會堂に出た時ではない、勞働の粗服に天然と交はりし時である、其時神は彼に現はれ給ふた、

神曰ひ給ひけるは、汝の足より履を脱ぐべし、汝が立つ所は聖き地なればなりと(五節)、此所に人なる證人は一人もなく、只、山と羊との彼の證人として立つあり

て彼は彼の聖職に就いたのである、神の聖召は常に斯の如くにして行はれる、或ひは靜かなる河邊に於て、或ひは無人の山奥に於て、或ひは鋤取る時に、或ひは斧を揮ふ時に、神の聲は彼の僕に臨むのである。

然れども謙遜なるモーセは直に神の聖召に應じなかつた、彼は今は前日とは異なり、能く自己の弱さを識つた、前には自から進んで民を救はんとせし彼は今は其事の到底彼の力に及ばざることを覺つた、

モーセ神に曰ひけるは、我は如何なる者ぞや、我れ豈バロの許に往きイスラエルの人々をエジプトより導き出すべき者ならんや

と(三章十一節)、バロは大王である、我れ微小さき牧者である、我れ如何で此大任に當り得る者ならんやと、是れは臆病の聲ではない、謙遜の言葉である、斯く謙遜りてこそ、救民の大業は就げられるのである。

モーセに尙ほ一つの引目があつた、それは彼が訥辯であることであつた、彼は美しき言葉の人でなかつた、彼に能辯の術がなかつた、故に彼は彼の授けられし職を辭退せ



んとした、

モーセ、エホバに曰ひけるは、我主よ、我は素と言辭に敏き人に非ず、……我は口重く舌重き者なり

と(四章十節)、力なし、又辯舌なし、故に我を免し給へと、然れども神は彼を免し給はなかつた、彼は己の力を以て行ふのではない、神が彼を以て行ひ給ふのである、訥辯は敢て憂ふるに足りない、

我、汝の口にありて汝の言ふべきことを教へん

と(十二節)エホバは彼に告げ給ふた、而して彼れ尙ほ辭退して止まざるが故に、神は彼の兄アロンを彼の代言人として任命し給ふた、モーセは斯くして止むを得ずして彼の聖職に就いた、自己の之に耐ふるを信じたからではない、神の能力を信じたからである、容易く聖職に就く者は容易く殞る、辭退に辭退を重ね、止むを得ずして神に引出さるゝ者、其者が能く神のために大事を爲すのである。

### パロとの應對

(出埃及記五章)

モーセとアロンとは相携へて埃及王パロの前に立つた、彼等は曠野より來りし野人、彼は大國の王であつた、兩者相對して勿論、大王は直ちに野人の言に耳を傾くべくもなし、

其後モーセとアロン入てパロに曰ふ、イスラエルの神エホバ斯く曰ひ給ふ、我民を去らしめ、彼等をして曠野に於て我を祭ることを得せしめよと、パロ曰ひけるはエホバは誰なれば、我れ其聲に循ひてイスラエルを去らしむべきか、我れエホバを識らず亦イスラエルを去らしめじ

と(一、二節)、モーセとパロとの對抗は斯くの如くにして始まつた、彼はエホバの名に由りて語りしに、是はエホバの存在をさへ認めなかつた、二者の間に調和のありやう筈はない、神の外、何の頼る所なきモーセと、強國の大權を獨り己に握りしパロと、



蝗螂斧に當るとは此事であらう。

モーセの言を聞いてバロは益々怒つた、彼は更らにイスラエルの重荷を増した、虐待の上に更らに虐待を加へた、彼れは民の有司に命じて曰ふた、「人々の仕事を重くして之に勞かしめよ、然らば偽はりの言を聽くことあらじ」と(九節)

自由を欲するが如きは彼等に閑暇があるからである、更らに勞働を重くして他を思ふの閑暇なからしめよ、然らば彼等は煽動者の言に耳を傾けざるに至るであらうと、是れ暴虐の君主の常に言ふ所である、民が自由を要求するは彼等に餘裕があるからである、若し税を重くし、勞を増さば、彼等は沈黙するであらうと、

バロ曰ふ、汝等は懶惰なり、懶惰なり、故に汝等は我等をして往てエホバに犠牲を捧げしめよと言ふなり

と(十七節)、民が自由を要求すれば、是れ懶惰の故なりと云ふ、解し難きは實に王者の心である。

歴史家は曰ふ、昔時のエジプトにすべての文物は具つて居つた、唯一つ無い者があつ

た、それは個人の自由であつたと、實に爾うであつた、エジプトのみならず、バビロンに於て、アッシリヤに於て、印度に於て、支那に於て、然り東洋全體に於て、すべての文物は具はつて在つたが、個人の自由のみはなかつた、東洋諸國に於ては人らしき者は帝か王かの一人であつて、他は皆な所謂民草であつた、人間ではなくして器械であつた、王命維れ従ふ所の意志なき自由なき牛馬の如き者であつた、而して自由はエジプトに於てイスラエルを以て始つたのである、茲に始めて神政は創まり、神政と同時に律法は定められ、律法に由て民の自由は確證されたのである、誠にモーセは世界的立憲的政治家である、彼に由てイスラエルの子孫のみならず、人類は始めて自由の首途に就いたのである、モーセが其兄弟アロンと共に埃及王バロの前に立て民の釋放を要求せしまでは、人類は未だ曾て王者に向て此要求を爲したる事はない、而かもモーセの此要求を始めとして、彼より三千五百年後の今日に至るまで人類の歴史に於て此要求の絶えたる時はない。



## パロの剛復

(出埃及記六一十三章)

神はモーセを以てパロに命じ、彼をしてイスラエルの民を釋放たしめんとした、然れどもパロは頑として神の命に應じなかつた、神は言辭を以て命じ給ふた、然れどもパロは斷じて之に従はなかつた、茲に於てか神は其能力を顯はし給はざるを得ざるに至つた、神は容易に奇蹟を行ひ給はない、道理と言辭とを以て論ず能はざるに至り止むを得ず之を行ひ給ふ、神はパロの如き剛復なる者と雖も始めより奇蹟を以て之を壓し給はない、又奇蹟を以て之に臨み給ふと雖も先づ輕きを以て試み、其信ぜざるを見て徐々と重きを加へ給ふ、始めにモーセをして杖を執り之をパロの前に擲ちて蛇となし、以て彼れモーセに異能の存するを示さしめ給ひしと雖も、パロと其臣下とは此事を覺り得ず、更らに彼等の心を剛復にしてモーセとアロンの言を斥けた、其後ナイル河の水を血に化して彼等を覺醒せんとし給ひたれども、是れ又効を奏しなかつた、次

ぎに蛙を呼出し、次ぎに蚤を發生し、次ぎに蚋を送り、次ぎに獸疫を下し、次ぎに雹を降らし、次ぎに蝗を送りてパロの剛復を挫かんとし給ひたれども、彼は尙ほ其心を變へなかつた、茲に於てか最後の大災難はパロと埃及國とに臨んだ、エジプトの國の中の長子たる者は位に坐するパロの長子より磨の後に居る婢の長子まで悉く死ぬべし

との命が下つた(十一章五節)、而して此災難が全國に臨んでパロは終にエホバの命に従はざるを得ざるに至つた、

パロ即ち夜の中にモーセとアロンを召して曰ひけるは汝等とイスラエルの子孫起て我が民の中より出去り、汝等が言へる如くに往てエホバに事へよ

と(十二章卅一節)、パロは又二人に乞ふて曰ふた、

汝等又我を祝せよ

と(同二十二節)、國に幾回か災難臨みしも其心を改めざりしパロは己が長子を奪はれんとするを見て終に神の命に従はんとした、強國の大王も矢張り人である、己が子を



助けんがためには民に自由を供しもし、亦人に祈禱を依頼もする、  
汝等又我を祝せよ

と、憐むべし、今や乞ふ者はモーセとアロンとではない、大王である、大王は今や我子を助け呉れよと神の人モーセに乞ふたのである。

此所は奇蹟論を語る所でない、神がモーセを以てバロの前に奇蹟を行ひ給ひたりとの事は聖書の茲に明かに録す所である、之を信ずると疑ふとは人々の自由に在る、然れども一二我等の茲に注意すべきことがある、其一ツは此所に録されたる奇蹟の埃及的たることである、即ち埃及國に有り得る事である、杖を蛇となしたりと云ふ當時有觸れの秘術を外にして、ナイル河の水が血の如く赤くなりしこと、蛙が全國に跋扈せしこと、蚤、蚋、蝗の發生せし事等は埃及國に有勝ちなる天然の現象であつて、其、相續いで斯くも激烈に之に臨みしは神の奇蹟と云はざるを得ずとするも、其の、埃及に何の關係もない現象でない事は確かである、神は即ち此時埃及國特有の災害を以て其王と民とに臨み給ふたのである、若し天災に道德的の意味があるとするならば、すべ

ての國に臨む天災は又其治者と被治者との覺醒を促すための神の警戒である、伊國の震災も印度の饑饉も亦此意味に於て解釋することが出来る、特に埃及に限り此時此災害が臨んだのではない、之に類したる災害は幾回となく、他の國にも臨み、且今尙ほ臨みつゝあるのである。

我等の注意すべき第二の點は自由獲得の困難なることである、民の自由は容易に獲らるゝ者ではない、治者は被治者に容易に自由を與へない、彼等は餘義なくせられざれば民に自由を與へない、志士の勸告に遭ふて聽かず、識者の明示を見て信ぜず、終に災害踵を接して己に臨んで止むを得ず民を釋放する、而して爲政家然りである、惡魔更らに然りである、彼は容易に罪の繯を解かない、彼は容易に靈魂に自由を與へない、彼の束縛より脱するは至難の業である、而してバロは惡魔を代表し、イスラエルは神の民を代表する、出埃及記は歴史的事實を以てする心靈釋放、自由獲得の記事である、神の忍耐に對する惡魔の剛愎を示す記録である。

奇蹟を奇蹟丈けに見て之を解することは甚だ難くある、然れども奇蹟を人を救ふ手段



と見て、其解釋は左程に難くない、奇蹟は科學的に解釋さるべきものではない、道德的に解釋さるべきものである、而して道德的に解釋せんとして其科學的解釋は容易なるのである、宇宙萬物は素々人を縛るための者ではない、人に事ふたためのものである、彼を養ひ、彼を教へ、彼を自由と榮光とに導くための機械又手段である、而して今や茲にイスラエルを以て自由は始めて人類に供せられんとしたのである、事は甚だ小なるが如くに見えて實は非常に大である、自由は今やイスラエルの民を以て埃及の壓制國に於て人類の中に生れんとしつゝあつたのである、此人類的理由の此事件に存するを知て、神が其聖手を以て特別に此事に携はり給ひしことを解するとが出来る、一少数民族の救濟ではない、全人類の救濟である、神は所謂「ゴシエンの穢多村」の民を救はんために茲に奇蹟を以て人事に携はり給ふたのではない、茲に自由の源を開いて、世の終りに至るまで全人類に自由の恩恵を垂れんがために茲に此奇蹟を行ひ給ふたのである、目的の遠大なるを知て手段の異常なりし理由が解かる、出埃及記はユダヤ歴史の一部分ではない、人類歴史の要部である、之に奇蹟の伴ひしは當然である、

人類は斯くの如くにして其最初の自由を獲たのである。

### 紅海の横斷

(出埃及記第十四章)

イスラエルの民はモーセに率ゐられてエジプトを出た、其數は子女の外に徒にて歩める男子のみにて六十萬人(十二章三十七節)、往く先きはシナイ半島のホレブの山、人は多く途は遠く、困難なる旅途であつた、進んで紅海の邊に至れば、右は巖山、左は沼、前は海、而して後を回顧ればバロの馬、車及び其騎兵と軍勢との彼等の後を追ひ來るを見た、進退茲に谷りて民はモーセに訴へて曰ふた、

汝、我等を携出して曠野にて死しむるや、何故に汝、我等をエジプトより導き出して斯く我等に爲すや、我等がエジプトにて汝に告げて我等を棄置き、我等をしてエジプト人に事へしめよと曰ひしは是れならずや、そは曠野にて死るよりもエジプト人に事ふるは善ければなり



と(十四章十一節以下)、是れエジプトを出てより民がモーセに語りし怨言の第一である、彼等は此時より幾回となく、彼等が困難に遭遇する毎に之に類したる怨言を彼に述べた、彼等は幾回となく奴隸の生涯の自由獨立の生涯に較べて安全にして幸福なるを述立た、

そは曠野にて死るよりもエジプト人に事ふるは善ければなり

と、イスラエルの民に限らない、すべて神の人に導かれて奴隸の國を脱して自由の郷土に向ひし者は其途中にて幾回か之に類したる怨言を發するのである、

獨立の曠野にて餓死するよりも政府に事へ、教會に屬するは善し

と、斯かる時に方て神の人モーセの聲は我等の耳に響き渡るのである、

エホバ我等のために戦ひ給はん、汝等は静まり居るべし

と(十四章十四節)、而して思ひがけなき援助は我等に臨み、我等の前に途は開かれ、我等は難を免かれ、敵は我等の後を追ひ來つて神の手にて滅ぼさるのである。

### モーセの歌

(出埃及記第十五章)

イスラエルの民は紅海を横斷し、茲に不思議にも強敵の爪牙を免かれた、彼等は安全に陸に上るを得て、彼等の敵は海底の藻屑と化した、茲に於てか彼等の口より讚美の歌が揚つたのである、是れ黙示録十五章三節に謂ふ所の「神の僕モーセの歌」である、基督者に由て今日唱へらるる所の讚美歌の濫觴である、勿論不完全なる翻譯文を以てして原文の言辭の優と思想の美とを現はすことは出来ないが、然し少しく文字の配列を變へて見て其莊嚴なる歌であることが解かる。

我はエホバを歌ひ頌めん、彼は美事に勝ち給へり

馬と其乗者をば彼は海に投ち給へり。

エホバは我力なり、我歌なり



彼は我救となり給へり

彼は我神なり、我れ彼を頌めまつらん

彼は我父の神なり、我れ彼を崇めまつらん。

エホバは軍人なり、エホバは其名なり

バロの戎車と軍勢とを彼は海に投ち給へり

バロの選抜の軍士等は紅海に沈みたり

深淵彼等を淹ひて彼等は石の如く海の底に沈みたり。

全篇を以上の如くに讀んで其實に模範的の讚美歌であることが判明る、其中に下品な

る所は寸毫もない、感情に走り、狎々しく神に近づかんとするが如き今日の讚美歌に

有り勝なる點は一ツもない、

誰か汝の如く聖くして榮えあり

讀むべくして威ある者あらんや

と、讚美の精神は茲にある、エホバは榮えあると同時に亦聖い者である、故に讀むべき者であると同時に亦威あるが故に狎るべからざる者である、此最大最初の讚美歌に倣ふてすべての讚美歌は作らるべきである。

マナと鶉

(出埃及記第十六章)

イスラエルの民は自由を獲んがためにエジプトの地を出た、彼等は奇跡的に紅海を過ぎて茲に全然獨立の民と成つた、然し束縛の地を去て彼等は樂園に來らずして曠野に入つた、自由は靈の自由であつて、肉の不自由である、美衣飽食は自由に伴はない、饑餓は自由の附隨物である、

斯くてエリムを出立ちてイスラエルの子孫の會衆そのエジプトの地を出しより二箇月の十五日に皆なエリムとシナイの間なるシンの曠野に至りけるが、其曠野に於てイスラエルの全會衆モーセとアロンに咥けり、即ちイスラエルの子孫彼等に言ひけ



るは「我等エジプトの地に於て肉の鍋の側に坐り飽くまでパンを食ひし時エホバの手にて死にたらば善かりし者を、汝等は此曠野に我等を導き出して此會衆を飢に死なしめんとするなり」と(一—三節)。

自由は之を獲しも束縛の地に於ける「肉の鍋」を想出して彼等はモーセに呟いたのである、然り人は同時に二兎を獲ることは出来ない、自由を得れば「肉の鍋」を失ひ、永久に「肉の鍋」に有附かんとすれば永久に束縛に甘んじなければならぬ、而かもイスラエルの民は此事を忘れ、自由の特権を得ながら食の足らざるの故を以てモーセに呟いた、彼等の愚や憐むべしである、然し憐むべきは彼等イスラエルの民に限らぬ、多くの自由の獲得者は彼等と同じ愚を演ずるのである、彼等は自由を望んで止まず、終に善き教導者を得て束縛の所を出るや、其エジプトなると政府なると教會なるとの別はない、彼等は之を去て後に其曾て供せし「肉の鍋」の味を忘るゝ能はず、之を想出して彼等の教導者を恨んで止まない、彼等は言ふ、

我れ自由を得て此曠野に來れり、我と我が妻子とは將さに餓死せんとす、嗚呼、我

は教會を去らざりしものを、其時我に豊かなる衣食ありたり、其時我は月毎に俸給を得たり、餓死の恐怖は其時我になかりき、我は其時實に幸福なる者なりきと、而して斯く言ひて彼等の或者は再び踵を轉してエジプトの地に向ひ、再び紅海を横斷し、再びバロの配下に歸して「肉の鍋」の恩恵に與かるのである、意地無し極とは實に此事である。

乍然、曠野には曠野の食物がある、束縛の「肉の鍋」は無いが自由の神より降り來る自由の食物がある、

時にエホバ、モーセに言ひ給ひけるは、視よ、我れパンを汝等のために天より降らさん、民、出て日用の分を毎日歛むべし、……即ち夕に及びて鶉來りて營を覆ふ、又朝に及びて露、營の四圍に置きしが、其置ける露乾くに方りて曠野の表に露の如き小さき圓き者地にあり、……モーセ彼等に言ひけるは是はエホバが汝等の食に與へ給ふパンなり。

茲所に肉も與へられ亦パンも與へられた、然かも人の手よりにあらず直に神より與へ



られた、神の自由を求むる者が餓死するの虞は決してない、肉とパンとを獲んとして我等は再び政府又は教會のエジプトに還るの必要はない、吾等は斷然獨立の曠野に止まりて神より降り來る聖き食物を待ち望むべきである。

預言者エリヤ

(一)

アハブの即位 (列王紀略上第十六章二十九—三十三節)

ユダの王アサの治世第三十八年にオムリの子アハブ、イスラエルの王となれり、彼れサマリヤに於て二十二年間イスラエルに王たりき、アハブ其先にありしすべての王よりも多くエホバの目の前に惡を爲せり、彼はネバテの子ヤラベアムの罪を行ふ事を輕

き事と做せしにや、シドン人の王エテバルの女イゼベルを娶りて妻となし、往きてバアルに事へ之を拜めり、彼れ其サマリヤに建たるバアルの殿の中にバアルのため祭壇を築けり、アハブ アシラ像を作れり、斯くてアハブは其先きにありしイスラエルのすべての王よりも甚しくイスラエルの神エホバの怒を激す事を爲せり。

墮落の一斑 (同三十四節)

彼の代にベテル人ヒエル エリコを再建せり、彼れ其基を置えし時に其長子アピラムを喪ひ、其門を立てし時に季子セグブを喪へり、ヌンの子ヨシユアに由りてエホバの言ひ給へるが如し。

エリヤの現出 (第十七章一—七節)

ギレアデに寄寓せるテシベ人エリヤ アハブに言ひけるは

我が事ふるエホバは活く、我が言に由るにあらざれば數年間雨も露もあらざるべしと、時にエホバの言彼に臨みて曰へり

汝 此處を去り、東に向ひ、ヨルダンの前なるケリテの溪谷に身を匿せ、其溪の水



を飲むべし、我れ鴉カラスに命じて彼處かしこにて汝を養はしむ  
と、彼れ往きてエホバの言の如く爲せり、即ち往きてヨルダンの前なるケリテの溪谷に住めり、鴉は朝にパンと肉と、夕にパンと肉とを彼に持來れり、彼は又溪たにに飲めり、然るに國に雨なかりしが故に暫らくして其溪水涸かわれぬ。

異邦に逃る(同八一十六節)

エホバの言 彼に臨みて曰く  
起ちてシドンに屬するザレバテに往きて其處に住むべし、我れ彼處かしこに婆婦おやめに命じて汝を養はしむ

と、斯くて彼起ちてザレバテに往けり、彼れ市の門に至りし時一人の婆婦の其處たきに薪きを採とらふを見たり、乃ち之を呼びて曰ひけるは「請うふ、器うつはに少許すこの水を我に持來りて我に飲ませよ」と、彼女之を持來らんとて往ける時、エリヤ彼女を呼びて曰ひけるは「請うふ、汝の手に一片ひとかけのパンを我に持來れ」と、彼女曰ひけるは「汝の神エホバは活いく、我にパン有るなし、唯桶ひとつかに一握ひとつかの粉と瓶かめに少許すこの油とあるのみ、視よ、我は二本の薪

を採とらへり、我は今家に往て我と我子のために調理し、之を食ひて死なんとす」と、エリヤ 彼女に曰ひけるは

懼るゝ勿れ、往きて汝が言ひし如くせよ、但し先づそれを以て小さきパン一つを作り、之を我に持來れ、然る後に汝と汝の子のために作るべし、そは「エホバが地の面に雨を降らし給ふまでは其桶の粉は竭あきず、其瓶の油は絶あえず」とイスラエルの神エホバ言ひ給へばなり

と、彼女往きてエリヤの言へる如く爲せり、而して彼女と彼と彼女の家族は久しく食へり、桶の粉は竭あきざりき、瓶の油は絶あえざりき、エホバがエリヤに由て語り給ひしが如し。

貧女を救ふ(同十七—二十四節)

是等の事のありし後に、其家の主婦おんななる婦の子病やまひに罹れり、其病劇はげくして氣息其中に絶えたり、婦 エリヤに曰ひけるは「神の人よ、我れ汝と何の干與かまひあらんや、汝は我が罪を憶おもひ出さしめて我が子を死なしめんために我に來りし乎」と、彼れ彼女に言ひ



けるは「汝の子を我に附せ」と、彼れ之を彼女の懐より取り之を己が居る高部屋に抱  
來り、己が牀の上に置けり、斯くて彼れエホバに叫びて曰ひけるは

我が神エホバよ、汝は我が偕に宿る此嫠婦の上にも亦災を下して其子を死なしめ給  
ふ乎

と、斯くて彼れ三度身を伸して小兒の上に伏しエホバに叫びて曰ひけるは「我神エホ  
バよ、我れ汝に願ふ、此小兒の生命を再び其中に還らしめ給へ」と、エホバ エリヤ  
の聲を聽きいれ給へり、小兒の生命は再び彼に還れり、彼は復活せり、エリヤ即ち小  
兒を抱き之を高部屋より家に連れ下り、其母に附して言ひけるは「視よ汝の子は活く」  
と、婦 エリヤに言ひけるは「今我は汝が神の人にして汝の口にあるエホバの言の眞  
なるを知る」と。

字 解

(第十六章二十九—三十二節)

29 此時猶太國は南北二國に分れたり、南なるをユダと稱し、エルサレムに都し、北な  
るをイスラエルと稱してサマリヤに都せり、ユダに王ありしと同時にイスラエルにも  
亦王ありたり、アサの治世第三十八年は紀元前八百七十年頃に當る○30 「エホバの目  
の前に惡を爲せり」多くの不義を行ひしに止まらず、凡ての不義の源なる背信を行へ  
り、即ち聖きエホバの神を棄て異邦の神に事へたり、殊に「惡」と云ふは此事なり○31  
「ネバテの子ヤラベアム」イスラエル王國の建設者なり、ダビデ王統に叛きて別に王  
統を立てし者、彼は始めてエホバを拜するに偶像を以てせり、故に偶像崇拜を稱して  
殊に「ヤラベアムの罪」と云へり(十二章二十六節以下を見よ)○「シドン人の王エ  
テバルの女イエゼベル」ツロ、シドンに就ては『興國史談』を見るべし、ペニケ國の貿易  
市場にして殷富を以て聞えし者、アハブ王は婚を異邦の王と結んで其淫猥なる宗教を  
採用せり、淫婦イエゼベルに就ては黙示録二章二十節を見るべし○32 首府に偶像殿を  
建て、其中に偶像を安置して之に事へたり○32 バアルは男神にしてアシラは女神なり、  
淫猥放縱は常に男神、女神の崇拜に伴ふ。



同三十四節

エリコを再築すべからずとはエホバがヌンの子ヨシヤに由りて選民に命じ給ひし所なり、

ヨシヤ其時人々に誓ひて命じ言ひけるは、凡そ起てこのエリコの邑を建る者はエホバの前に詛はるべし、其石礎を置えなば長子を失ひ、其門を建てなば季子を失はんと(約書亞記六章二十六節)、  
ベテル人ヒエルは此禁を犯して此呪詛に觸れたり。

第十七章一—七節

1「ギレアデ」ヨルダン河の東にあり、アラビヤ沙漠に接し、イスラエル王の権力範圍以外に在りたり○「テシベ」ガリラヤのナザレより程遠からざる所に在りたり○「エホバは活く」誓の言なり、語氣を強め、其誠實を確かめんために用ひられたり○「我が言に由るにあらざれば」エホバが我が言を以て其禁を解き給ふまでは○2「ケリテの溪谷」其置位を確定する能はず、蓋しヨルダンより遠く東に方りて沙漠に瀕せし邊

に在りしならん乎、早魃數旬にして溪水涸れたりとあるを見て、其ヨルダン本流に近からざりしを知るに足らん乎○4「鴉」日本産の鴉と異ならず、鳥類が如何にして人を養ふを得し耶、之を奇跡と見るより他なからん、或る言語學者は云ふ「鴉」と譯せられし希伯來語は「商人」とも亦「亞拉比亞人」とも解するを得べしと、若し然りとすれば亞拉比亞の隊商にして其邊を通過せし者が朝夕孤獨の預言者に食物を供給せしと解するを得べけん、奇跡は強ひて之を信ずべき者にあらざれば、此見解或ひは我等の採用すべき者ならん。

同八—十五節

8シドンはビニケに在り、イスラエル國より西北に方り、レバノン山に沿ひ地中海に面し、古來より貿易の繁盛を以て名あり、ザレバテは其南に位ひし、同じく古代よりの名市なり○12「一握の粉と少許の油」貧の極なり、粉は勿論麥粉なり、油はオレイブ油なり、混じて茲に所謂パンを作りたり、我國の煎餅の如き者なりしならん○14「其桶の粉は竭す、其瓶の油は絶えず」汝の飲食物に不足なかるべしと、必ずしも奇跡的



に供給せらるべしとの意にあらず〇15 「彼女と彼と彼女の家族と」貧しき嫠婦と孤獨の預言者と貧女の一人の子息となり、聖き樂しき一團樂。

同十七—二十四節

18 「我れ汝と何の干與あらんや」我を去れよと言ふに同じ、路加傳五章八節を見るべし〇「我が罪を憶ひ出さしめて」神をして我が罪を憶ひ出さしめて云々、預言者の同宿は神の注意を其家に呼ぶの機會となれりとの意なるべし、聖淨の臨む時に汚穢の暴露さるゝの懼れあり〇19 「彼女の懷より取出し云々」死兒を懷にせし貧女の境遇想ひやらる〇20 「嫠婦にも亦災を下し云々」災は之を富める人と權ある者の上に下すべし、嫠婦の上に下すべからずと、神に對する預言者の懇求は下民に對する同情を以て充滿す〇21 「彼れ三度身を伸して小兒の上に伏し云々」猛き預言者も貧兒の死體に對しては慈父の如し。

意 解

○惡王位に即き、異教の女を迎へて妻となし、國政弛み、淫猥行はれ、聖淨は失せ、壓制は臨めり、民は權者に媚びて自由の聲を潜め、其預言者すらもたゞ單らに淫婦の微笑を買はんと努めたり、イスラエルに光明絶えて、世は阿諛盲從の暗夜となれり(二十九—三十三節)。

○上の爲す所、下之に従ふ、宮中にエホバの禮拜は廢れ、バアルのために祭壇は築かれ、アシラの像の祠られし時に、ベテル人ヒエルはエホバの禁を犯してエリコの舊市を再興せり、エリコの地たる異邦モアブの國境に接し、氣候溫暖にして民に惰氣を促し、腐敗の巢窟たるに最も適したり、神が呪詛を以て其再興を嚴禁せしは深き道德的理由に因れり、然れども今や道德を省みる時に非ず、國民は舉て快樂を追求せり、彼等は言へり、人生是れ快樂の享有に外ならず、エホバの禁制の如き、之を迷信と見て可なりと、茲に於てかベテル人ヒエル、衆に先じ、其未だ目を之に注がざるに乗じ、エリコの舊市を復興して利益と快樂とを獨占せんとせり、彼れ是れがために長子を喪ひ又季子を喪ひたり、然れども彼は深く彼に臨みし大なる災害を歎かざりしならん、



彼の目的は利益と快樂の獲得に有り、神を棄てしと同時に彼の情は鈍りたり、エホバの命に背き、彼の愛子二人を喪ひて、彼は尙ほ彼の事業の成功を見て得々たりしならん、ベテル人ヒエルは當時の模範的實業家なり、民衆は彼の不虔を咎むることなく、返て深く彼の成功を羨みしならん(三十四節)。

○此時に方りギレアデの曠野より一人の野人現はれたり、其名をエリヤと云へり、彼はイスラエル國の北方に當り、ナフタリの地なるテシベの人なり、然れども彼の生國の腐敗に堪えざりけん、之を避けてヨルダンの彼方なるギレアデの地に寄寓せり、我等は彼の系圖を知らず、彼の父は誰ぞ、彼の教師は誰ぞ、是れ問ふて益なき問題なり、彼は忽焉として歴史の舞臺に現はれ、又忽焉として之を去れり、彼は蓋し自成の人なりしなるべし、彼は預言學校(當時の神學校)に學ばず、故に彼は預言者ならざる預言者なりき、彼は獨り曠野に在りて神より直に其細き聲を聞けり、彼は斯世の交際を避けたり、故に彼は粗野の人たるを免かれざりき、然れども此人に聖き優しき心ありたり、彼に王者の暴を挫くの勇ありたり、嫠婦の涙を拭ふの情ありたり、單純にして

高潔、エリヤは聖書人物中最も愛すべき者の一人なり(十七章一節)。

○國人舉て權威に媚び、其預言者すらも悉く口を噤ぎて語らざりし時に、ギレアデより來りしテシベの野人は獨り聲を揚げて叫んで曰く

我は誓て曰ふ、我が言は眞なり、國民は上より下まで悉く罪を犯し、エホバの怒に觸れたれば、其蒙るべき適當の刑罰として今より後、エホバが我が口を以て言ひ給ふまでは地は早魃を以て困むべし

と、而して野人の聲は全國に響き渉りて終にアハブとイエゼベルとの耳に達せり、彼等は震動せり、此野人何を語る乎と、此不敬漢と、國民の罪惡を唱ふる此國賊と、殊に買收預言者等は口を揃へて曰へり、汝異端の徒よ、何故に國王を辱むるぞと、エリヤは國民に警告して其忌嫌ふ所となりたり、彼は故國に歸り來りてギレアデの曠野に在りしと同じく孤獨の人なりき、彼は終に又身を匿さざるを得ざるに至れり(一―六節)。

○民のために正義を唱へて、民の中一人もエリヤを庇護はんとする者無かりき、彼は



逃れてケリテの溪谷に至り、茲に溪流に飲み、「鴉」に養はれたりと云ふ、「鴉」若し鳥ならん乎、禽獸は彼の國人に優まさりて彼に厚かりき、若し亞拉比亞人ならんか、異邦の人は故國の民に優まさりて彼に深かりき、預言者は其故郷其家の外に於て尊まれざることなしと（馬太傳十三章五十七節）、預言者を憎む者にして其國人、其家人の如く甚しきはあらざるなり（一一六節）。

○溪流に水竭きて、眞の預言者は還るに家なく、再び隱場かくれはを異邦に求むるに至れり、ヨルダンの河邊より上り、彼の故國を横斷し、西の方、海に沿ひたるザレプタの邑に至り、其處に貧しき婆婦の欺待を受けたり、禽ちにあらざれば婆婦、此世に於ける神の人の友は是れのみ、權者と富者とは彼を憎み、國民は舉て彼を避く、彼が枕する所は潺々たる聲を發する溪流の邊ほとりにあり、一握の粉、一壺の油、僅かに生命を繋ぐ婆婦の家あり（八一十五節）。

○偉人は情人なり、彼は王者の權を恐れず、然れども婆婦の懇求に抗する能はず、アハブ王とイェゼベル女王と四百のバアルの預言者の前に立ては巖いはよりも堅きエリヤは

婆婦と其一子の前に立ては老嫗おきなよりも柔なかりき、「彼れ三度び身を伸のして小兒の上に伏し、エホバに叫びて曰ひけるは、神エホバよ、我れ汝に願ふ、此小兒を復たび活かし給へ」と、預言者自身が大なる小兒なりき、小兒の心に大人の實驗を加へし者、是を偉人と云ふ、エリヤに於て我等は模範的偉人を見るなり、力の人にして情の人、彼が「神の人」と稱なへられしは彼が神の特性たる此兩性を具へたればなり（十七—二十四節）。

## (二)

預言者故國に歸る（列王紀略上第十八章一、二節）

多くの時日を経たる後、第三年にエホバの言 エリヤに臨みて曰く「往きて汝の身をアハブに示せ、我れ雨を地の上に降さん」と、エリヤ其身をアハブに示さんとて往けり、時に饑饉サマリヤに甚だしかりき。

途に朝臣に會ふ（同三十五節）

時にアハブ其家宰いんつかなるオバデヤを召したり（オバデヤは大にエホバを畏れし者にて、



イエゼベルがエホバの預言者を断たるとき、オバヂヤ百人の預言者を取り、之を五十人づゝ洞穴に匿し、バンと水とをもて之を養へり、アハブ オバヂヤに曰ひけるは、「今遍く國中を巡行き、諸の水の源と諸の川とに至り見よ、或ひは馬と騾とを活かしむるに足る草を得ることあらん、然らば我等家畜を盡く失ふに至らじ」と、彼等巡るべき地を二人の間に分ち、アハブ此途を取り、オバヂヤは彼途を取れり、而してオバヂヤ途に在りし時、視よ、エリヤ 彼に遭へり、彼れそのエリヤなるを識りければ、地に伏して言へり、

我主エリヤよ、汝は此に居たまふや

と、エリヤ彼に曰ひけるは、

然り、往きて汝の主人に告げよ、視よ、エリヤは此にあり

と、彼れ曰ひけるは

我れ何の罪を犯したれば、汝、此僕をアハブの手に付して彼をして我を殺さしめんとするや、汝の神エホバは活く、我が主人の人を遣はして汝を尋ねざる民あるなく、

又國あるなし、而して若し「エリヤは在らず」といふ時は其國其民をして汝を見ずといふ誓を爲さしめたり、汝は今言ふ「往きて汝の主人に告げよ、視よ、エリヤは此にあり」と、然れども我れ汝を離れて行かん時、エホバの靈は我が知らざる處に汝を携へ往かん、斯くて我れアハブの許に至りて彼に告ぐるも、彼れ汝を尋ね得ざる時は彼れ我を殺すべし、然れども汝の僕なる我は幼少の時よりエホバを畏れたり、イエゼベルがエホバの預言者を殺したる時に我が爲したる事は我主に聞えざりしや、即ち我れエホバの預言者百人を五十人づゝ洞穴に匿し、バンと水とを以て之を養ひし事は我が主に聞えざりしや、然るに今汝は曰ふ、「往きて汝の主人に告げよ、視よ、エリヤは此にあり」と、然らば彼れ我を殺すならんと、エリヤ曰ひけるは、

我が事ふる萬軍のエホバは活く、我は必ず今日我が身を彼に示すべし。

終に王と會見す(同十六—十九節)

オバヂヤ即ち往きてアハブに會ひ之に告げれば、アハブ エリヤに會はんとて往けり、



アハブ エリヤを見し時、アハブ エリヤに曰ひけるは、  
イスラエルを亂す者は汝なるか  
と、彼れ答へけるは、

我はイスラエルを亂さず、汝と汝の父の家と之を亂したり、汝等はエホバの命を拒みたり、而して汝はバアルに事へたり、故に今 人を遣し、すべてのイスラエルを我が許にカルメル山に集めよ、亦バアルの預言者四百五十人、竝にイエゼベルの席に食ふアシラの預言者四百人をも集めよ。

## カルメル山上の祈禱(二十一—四十節)

是に於てアハブ 人をイスラエルのすべての子孫の中に遣し、預言者等をカルメル山に集めたり、時にエリヤ すべての民に近づき曰ひけるは、  
汝等何時まで二者の間に躊躇ふや、エホバ若し神ならば之に従へ、然れどバアル若し神ならば彼に従ふべし。

と、民は一言も彼に答へざりき、エリヤ 民に言ひけるは、

我れ……唯我一人のみエホバの預言者たり、然れどバアルの預言者は四百五十人なり、然れば彼等をして二の積を我等に供へしめよ、而して彼等をして自己のために其一を選び、之を截り剖き、之を薪の上に載せしめよ、而して火を其下に置かざらしめよ、我は残りの積を調理へ之を薪の上に載せん、而して火を其の下に置かざるべし、斯くして汝等は汝等の神の名を頌ふべし、我はエホバの名を頌ばん、而して火を以て應ふる神を神と爲すべし

と、民皆な答へて曰く、「此言は善し」と。

茲に於てエリヤ バアルの預言者等に言ひけるは、

汝等多數なれば先づ汝等のために一の積を選び、之を調理へ、而して汝等の神の名を頌ふべし、然れども火を其下に置く勿れ。

彼等乃ち其與へられたる積を取り、之を調理へ、而して朝より午時に至るまでバアルの名を頌びて言へり「バアルよ、我等に聽き給へ」と、然れども何の聲もなく、何の應ふる者もなかりき、斯くして彼等は其造りし壇の周圍に踊れり、午時に及びてエリ



ヤ彼等を嘲けりて言ひけるは、

大聲を揚げて叫べよ、彼は神なればなり、彼は黙想へ居る乎、又は他處に行し乎、又は旅にある乎、或ひは假寐りて醒さるべき乎。

是に於て彼等は大聲に呼はり、其例に循ひて刀劍と槍をもて其身を傷つけ、血は進るに至れり、斯くして午時過ぎて、彼等は醜事を爲して晩の祭物を獻ぐる時にまで及べり、然れど何の聲もなく、又何の應ふる者もなく、又何の顧る者もなかりき。

時にエリヤ すべてに民に向ひて言ひけるは「我に近よれ」と、民皆な彼れに近よれり、彼れ先づ敗壞れたるエホバの祭壇を修理へり、エリヤ 十二の石を取れり、ヤコブの子の支派の數に循ひてなり、エホバの言會てヤコブに臨みて言へり、イスラエルを汝の名とすべしと、彼れ石を以てエホバの名に由りて、祭壇を築き、祭壇の周圍に種子二セヤを容るべき溝を作れり、彼れ又薪を陳列べ櫃を截割きて薪の上に載せたり、斯くて彼れ言ひけるは、

四ツの桶に水を満たし、之を燔祭 薪の上に沃ぐべし

と、又言ひけるは、

再び之を爲せ

と、再び之を爲せしかば、又言へり、

三たび之を爲せ

と、乃ち三たび之を爲せり、水は祭壇の周圍に流れたり、彼れ又溝にも水を満たしたり、斯くて晩の祭物を獻ぐる時に及びければ預言者エリヤ近く寄來りて言ひけるは、アブラハムの神、イサクの神、イスラエルの神なるエホバよ、汝のイスラエルに於て神なること、我が汝の僕にして汝の言に循ひて是等のすべての事々爲せしことを今日知らしめ給へ、エホバよ我に聽き給へ、我に聽き給へ、是れ此民が汝エホバは神にて在しますること、汝は彼等の心を 翻さんと欲し給ふことを知らんが爲めなり。

時にエホバの火降り、燔祭と薪と石と塵とを焚盡し、亦溝の水をも舐め盡せり、民皆な之を見て地に伏して言へり、



エホバ：…彼は神なり、エホバ：…彼は神なり  
 と、エリヤ彼等に言ひけるは「バアルの預言者等を執らへよ、彼等の一人をも逃遁れしむること勿れ」と、即ち彼等を執らへければ、エリヤ彼等をキシヨン川に曳下りて彼處に彼等を殺せり。

大雨沛然として到る(同四十一—四十六節)

茲に於てエリヤ アハブに言ひけるは、

汝上りて食ひ且つ飲むべし、既に大雨の聲聞ゆ

と、アハブ即ち食飲せんとて上れり、斯くてエリヤ カルメルカルメルの嶺に上り往き、地に伏し、其面を膝ひざの間にに入れて祈れり、彼れ其僕に言ひけるは「請ふ、上り往きて海の方を見よ」と、彼れ上り往き、見て言ひけるは「何もなし」と、エリヤ言ひけるは「再び往け、七次往け」と、第七次に及びて彼れ言ひけるは、

視よ、微少すこしの雲、人の手ほどのもの、海より起る

と、エリヤ言ひけるは「起てアハブに言へ、汝の車を備へよ、雨に沮しぼめられざるやう

直に下れ」と、暫時しばらくありて空天雲と雨とによりて黒くなり、大雨下れり、アハブは乗りてエズレルに到れり、エホバの能力エリヤに臨み、彼れ其腰を絡束かちげ、エズレルの入い口までアハブの前に趨むかり往けり。

### 字 解

1 「多くの時日を経たる後」ザレブタなる嫠婦あはれの一子を復生せしめて後。エリヤは少くとも二年以上彼女の客たりしが如し○「第三年」早魃の第三年、早魃は三年と六ヶ月ついで続けりと云ふ(路加傳四章二十五節を見よ)○「往きて汝の身をアハブに示せ」彼の汝を尋ねるを待たずして、汝より進んで彼の前に出でよ○「サマリヤ」イスラエル王國の首都なり、饑饉は首都附近の地に甚だしかりしと云ふ。

3 「家宰」王室の財産管理人、小朝廷の内藏頭くらひなり○「イェゼベル」淫祠を祭りしイェゼベル、故にエホバを憎みて其預言者を殺したり○「騾」驢と牝馬との雜種なり、主として馱馬として用ゐられたり。



17「イスラエルを亂す者」民の攪亂者、惡人の眼に映ずる預言者は是れ也○18「汝等はエホバの命を拒み云々」汝と汝の父祖等とはエホバの命を拒み、汝は特に之に加へてバアルに事へたりと、アハブの罪は彼の父祖等の罪の上に出たりとなり○19「すべてのイスラエル」全國民の代表者○「カルメル山」地中海に突出する海角なり、海面よりの高さ五百五十六尺、キシヨン川其北麓に於てアィクル灣に注ぐ、石灰岩より成り、洞穴多し、渺茫たる地中海の水、其麓を洗ひ、眺望極めて美なり○23「火を其下に置かざらしめよ」詐欺を避けんがためなり、バアルの祭司等は密かに火を燔祭の下に置いて其燃上るを見て、天火なりと稱して民を欺きしが如し○26「壇の周圍に踊れり」  
28「刀劍と槍とを以て其の身を傷け」今も尚ほ回々教の僧侶の爲す所なり、彼等は斯くなして神の憐愍を喚起せんと欲す○31「イスラエルを汝の名とすべし」創世記三十二章二十八節を見よ○32「種子ニセヤを容るべき溝」一セヤはエバの三分の一にして我邦の七舛弱に當る、一斗舛を容るべき溝とは小に過るが如し、今に至り其詳細を知る能はず○37「汝は彼等の心を翻さんと欲し給ふ云々」エホバ曰ひ給はく背ける子

等よ我に歸れ、我れ汝等の違背を癒さんと(耶利米亞記三章二十二節)○40「彼處に彼等を殺せり」民をして彼等を殺さしめたり。

41「上りて食ひ云々」アハブはキシヨン川の岸に下り、バアルの預言者の殺さるゝを目撃せしが如し、「上り」は再びカルメル山に上りて云々なるべし○42「其面を膝に入れ」屈伏の状をいふ、神に祈るの熱心、預言者の姿勢に現はる○43「七次往け」雨の降るまで幾回も往け○45「エズレル」カルメル山より東南、キシヨン川の南岸に在る城市なり、イスラエル王の居住の地の一として知らる。

意 解

列王紀略上第十八章一、二節

○隠るべき時あり、顯はるべき時あり、隠るべき時は世が榮華に耽る時なり、顯はるべき時は世が援助を求むる時なり、世の晝は預言者の夜なり、世の夜は預言者の晝なり、靈界の明星なる預言者は夜に入て始めて世の認むる所となる。



○顯はるべき時に顯はる、虐王の憤恚も恐るゝに足らず、彼は既に神の懲罰に苦みて恩恵の下賜を待ちつゝあり、エホバの言エリヤに臨みて曰く「往きて汝の身をアハブに示せ、我れ雨を地の上に降さん」と、預言者は今や膏雨の恩恵を齎して渴ける地に臨まんとす、誰か彼を歓迎せざるものあらんや、虐王アハブと姪婦イェゼベルとは今やエリヤに手を觸れんとするも能はざるなり、三年に涉りし早魃は神の預言者が世に顯はるべき機會を供せり。

同三節より十五節まで

○地に雨降らざること三年と六ヶ月、餓殍途に横たはり、黎民飢餓に泣く、而かも虐王は民を恩はずして馬と騾とを思ふ、侍臣オバデヤを召し、自身と共に國中を遍歴し、青草を求めて所有の家畜を保存せんとす、悪政の極は終に茲に至る、人は禽獸よりも尊からざるに至る。

○憐むべきは朝臣オバデヤなり、彼れ心にエホバを畏れたれども身に暗主に事へざるべからず、故にエリヤを主と呼び、又アハブを主と呼べり、二人の主に事ふとは實に

彼の事なり、エホバの懲罰を恐れ、又虐主の忿怒を懼る、然れども憐むべきは彼れ一人に止まらざるなり、朝臣オバデヤの地位に在る者は古今東西絶ゆることなし。

○青草を尋ねて神の預言者に遭ふ、預言者は青草に優さるの恩賜なり、而かも朝臣と俗吏とは爾か信ぜず、預言者に遭ふて戰慄し、青草を得ざればとて歎息す。

○「往てアハブに告げよ、視よ、エリヤは茲に在り」と、神の使命を帯びて故國に歸りし預言者は猛きこと獅子の如し。

同十六節より十九節まで

○「アハブ エリヤに會はんとて往けり」と、會見を求めし者はエリヤに非ずしてアハブなり、身に一物を持たざる預言者は今や王の王たるなり、此權威を有せざる者は眞の預言者にあらざるなり。

○アハブはエリヤを呼び掛けて「イスラエルを亂す者よ」と云へり、悪人の眼には神の人は常に此の如くに映ずるなり、悪人の罪を看過せざるが故に、遠慮なく社會の罪を摘指するが故に、預言者は常に平和の攪亂者として世に目せらる、彼等は「攪亂



者」こそ彼等の傷を癒す者なることを知らざる也。

○民の攪亂者は預言者に非ず、悪人なり、悪しき政治家なり、偽の預言者なり、平和なきに平和平和と叫ぶ者なり、イスラエルを亂せしものはエリヤに非ず、アハブ王なり、其父なり、其祖父なり、事實は明白に語らざるべからず、エリヤは王者の面を恐れて、馬を見て鹿なりと言はず、鴉を見て鷲なりと言はざりしなり。

○然れども事實はカルメル山上に於て決せらるべし、エリヤの言、或ひは暴言なるやも計られず、預言者は言ふ者なるよりも寧ろ爲す者なり、民の代表者をカルメル山上に集めよ、バアルの預言者四百五十人、女王の寵に誇るアシラの預言者四百人、彼等も同時にカルメル山上に來れよ、而して王も亦其朝廷を率ひて之に臨めよ、活ける神は在し給ふ乎、彼は其預言者を以て語り給ふ乎、萬事はカルメル山上に於て決せらるべしと。

同二十節より四十節まで

○エリヤは先づ民に其決心を促せり、彼等は今二者の間に彷徨ふ、半ばエホバを信じ

て半ばバアルを信ず、是れ誠實の士の憎んで止まざる所なり、バアルに従ふも可なり、然らば判然とバアルに歸依せよ、エホバを信ずるが如くに見せてバアルに事ふる勿れと、然り、余輩も亦信者を愛し、純然たる不信者を愛す、余輩の堪ゆる能ざる所の者は半ばキリストを信じて半ば此世に従ふ者なり、名は基督信者にして實は此世に従屬する者なり、エリヤ若し今人の中に臨まば同一の言を以て彼等の二心を責むるべし。

○民は一言も彼に答へざりき、時に彼れ歎息の餘り獨り叫んで曰く、

嗚呼、然らばエホバの預言者は今は我れ一人のみなる乎、他は皆な頼るに足らざる乎、民の中一人の信者なき乎、然れどもバアルの預言者は四百五十人なるに非ずや、嗚呼、單獨の我れなるかな

と、エリヤの此言を倨傲の言として見るは誤れり、是れ失望に瀕する歎息の聲たりしなり。

○今は誰に訴へて誰に裁判かれん、直に神に訴へて事物の眞偽を別たんのみ、火を以



て應ふる神を神とすべきのみと、國民學て非を理とする時に方て黑白を別つに唯此方法あるのみ、火を天より仰ぐのみ、靈火を受くる者を眞人とし、靈火を受けざる者を偽善者となすのみ、エリヤは彼の時代に在りて彼の取るべき最終唯一の方法を取りしのみ。

○バアルの預言者四百五十人、之に加ふにアシラの預言者四百人、國民の後援と國王の庇保とを以て祭壇に臨み、その周圍に坐して「バアルよ、我等に聽き給へ、我等は國民の聲を代表す」と叫んで朝より午時に至る、然かも何者も彼等の聲に應ずるなし、彼等は狂へり、踊れり、身を傷けたり、然れども何者も彼等に應へざりき、彼等は多數を頼んで聲を高うして上より天火を招かんとせり、然れども天は寂として聲なく、日光鋭く彼等の頭上を輝らせり、熱誠の預言者も今は笑を禁ずる能はざるに至れり、熱誠の解けて外に溢るゝもの、之を諧謔といふ、エリヤも亦偉人の例に倣ひて此の性を具へたり、彼は破顔一笑、戯れて曰く、

叫べよ、更らに叫べよ、バアルは眞に神なり、彼は終に汝等の祈禱を聽くべし、彼

は今哲學者の如くに默想に耽けり居るならん、又は商人の如くに用事を帯びて他處に行きしならん、或ひは旅行中にて不在ならん、或ひは寐り居るならん、是れ他人の誠實を嘲ける非紳士的の言なりと稱するを得ん、我等はすべての事に於てエリヤを我等の模範として仰がず、我等の模範は他に在り、然れども人なるエリヤとして、我等は彼に此善罵を許さんと欲す。

○然れども今よりが眞面目の時なり、他人の失敗は必しも我が成功の證にあらざるなり、諧謔止んで預言者は肅然たり、彼は今より天より火と水とを招かざるべからず、彼は民の代表者に向ひて曰く「我に近かよれ」と、恰かも嚴父が大事に臨んで其子を膝下に招くが如し。

○エリヤは先づ敗壞れたるエホバの祭壇を改築せり、彼はレビの族にあらざりしが故に祭司たるの教權を有せざりしと雖も、自から神の預言者なるを知りしが故に、憚からずして祭司の職を執れり、彼れ先づヤコブの子の支派の數に循ひ、十二の石を取りエホバの名に由りて祭壇を築けり、是れ蓋しイスラエルの民の其當時に於けるが如



く南北兩邦に分るべき者に非ざることを暗示してなるべし、祭壇の周圍に廣溝を築きしは、之に水を満たせて、火氣の皆無を證明せんためなり、斯くて民に命じて犠牲と祭壇の上とに桶十二杯の水を注がしめ、然る後に祈禱に取掛かれり、而して其祈禱たるや簡にして單、自己の名譽を求むるにあらずしてエホバの榮光の顯はれんことを願ふ、若し祈禱にして聽かるゝ者ならば、斯かる祈禱ならざるべからず、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なるエホバよと、約束の神、自顯の神、矜恤の神よと、而して「汝は彼等の心を翻さんと欲し給ふ慈愛の神なるを彼等に知らしめ給へ」と祈るや、エホバの火降りて、燔祭のみに止まらず、祭壇の石と其の邊の塵までを焚き盡し、亦溝の水までを舐め盡したりと云ふ、大なる奇跡、科學の法則に反すと近世の讀者は云ふならん、然れども、近世に至てエリヤの如き預言者の出しことなし、其宗教家なる者は多くはバアルの預言者の類なり、エリヤの信仰ありてエリヤの奇跡は行はるゝなり、今やエリヤの信仰なし、エリヤの奇跡なきは敢て怪むに足らざる也。

○エホバは火を以てエリヤの祈禱に應へて彼れエホバの神なるを證し給へり、然れど

も人なるエリヤは、憐むべし其成功の驅る所となりて、大なる罪を犯したり、彼は憤怒に乗じて、バアルの預言者等を執らへ、磔に曳行きて民をして之を殺さしめたり、彼れ或ひは心に想ひしならん、是れ前に女王イゼベルがエホバの預言者を屠りし其罪に報むんが爲めなりと、然れども彼は未だ愛の奧義を知らざりしなり、若しナザレ人イエスにして彼の地位に立たん乎、彼は此殘忍を行ひ給はざりしや明かなり、エリヤは偉大なり、然れども神の子に非ず、彼は他神の預言者を殺さしめてエホバの憤怒に觸れ、終に彼の心より其聖靈を奪はるゝに至れり、事、後篇に至つて明らかなり。

## 四十一節より四十六節まで

○然れども熱心は未だエリヤの心を去らざりき、彼に尙ほ雨を招くの信仰存したり、火を祈て之を得し彼は雨を祈て又之を得るの確信を有せり、エリヤは今や火を招きし熱心を以て雨を招きて地を潤さんとす。

○エリヤはアハブに降雨の必然を約して、再びカルメル山に上て雨を祈りたり、彼れ



祈禱の聽かるゝを確信したれば幾回か人を海角に遣て海を望んで天候を報せしむ、終に人手大の雲の西方、沖遙かに起るあり、雲は祈禱と共に其嵩を増し、終に満天を蔽ふて沛然雨を降せり、アハブは車に乗りて雨を冒してエズレルの離宮に到れり、而してエホハの能力は益々エリヤに加はり、彼は結束して趨りてアハブの馬車に先じてエズレルの入口に到れり。

○大事は成れり、エホバが神なるの實證は擧れり、然れども同時にエリヤが人なるの證跡も亦擧れり、彼は人を殺したり、故にエホバは彼より一時其聖靈を奪ひ給へり、悲痛、落膽は次で彼れに臨めり、彼れは終にホルブの曠野に逃れざるを得ざるに至れり。

## (三)

## エリヤの走逃 (列王紀略上第十九章一—八節)

アハブ イエゼベルにエリヤの爲したる渾の事及び其如何に渾の預言者等を刀劍にて

殺したる乎を渾て語りしかば、イエゼベル使者をエリヤに遣して言ひけるは「神等斯くなし復た重ねて斯く爲し給ふべし、我れ必ず明日今頃汝の生命をかの人々の一人の生命の如くせん」と、彼れ此事を觀しかば起て彼の生命のために往きてユダに屬するベエルシバに至り、彼處に彼の從者を遣し、自身は一日路ほど進みて曠野に入り、來りて一本の金雀花の下に坐したり、彼れ其身の死なんことを求めて言ひけるは

足れり、エホバよ、今我が生命を取り給へ、そは我は我が父祖等に勝さらざればなり

と、斯くて彼れ金雀花の下に伏して寐れり、時に人あり彼に捫りて言ひけるは「興きて食へ」と、彼れ見しに、視よ、頭の側に炭にて燒きたるパンと一瓶の水ありき、彼れ乃ち食ひ且つ飲みて復た臥したり、エホバの使者二次來りて彼に捫りて言ひけるは「興きて食へ、そは途尙ほ遠ければなり」と、彼れ興き、飲み且つ食ひ、其食の力に依りて四十日四十夜往きて神の山ホルブに到れり。

山上の示顯 (同九—十八節)



斯くて彼れ彼處の洞穴に至り其處に宿れり、時にエホバの言彼に臨みて言ひけるは  
 エリヤよ、汝、此處に何を爲すや  
 と、彼れ言ひけるは

我は萬軍の神エホバのために甚だ熱心なりき、そはイスラエルの子孫汝の契約を棄て、汝の祭壇を毀ち、刀劍を以て汝の預言者等を殺したればなり、而して我れ、我れ一人のみ存る、而して彼等我生命を求め、之を奪はんとす  
 と、エホバ言ひ給ひけるは、

出てエホバの前に山の上に立つべし、視よ、エホバは通過き給ふべし

と、時に大なる強風起り、山を裂き岩を碎きたり、然れどもエホバは風の中に在さざりき、風の後に地震ありたり、然れどもエホバは地震の中に在さざりき、地震の後に火ありたり、然れどもエホバは火の中に在さざりき、而して火の後に靜かなる微細き聲ありき、エリヤ之を聞き、面を外套に蒙み、出て洞穴の入口に立てり、聲あり、彼に臨みて言く、

エリヤよ、汝、此處に何を爲すや

と、彼言ひけるは、

我は萬軍の神エホバのために甚だ熱心なりき、そはイスラエルの子孫汝の契約を棄て、汝の祭壇を毀ち、刀劍を以て汝の預言者等を殺したればなり、而して我れ、我れ一人のみ存る、而して彼等我生命を求め、之を奪はんとす

と、エホバ彼に言ひ給ひけるは

往け、曠野を経てダマスコに還るべし、往きてハザエルに膏を沃ぎてスリヤの王となすべし、又ニムシの子エヒウに膏を沃ぎてイスラエルの王となすべし、又アベルメホラのシヤバテの子エリシヤに膏を沃ぎて汝に代りて預言者たらしむべし、斯くてハザエルの劍を遁るゝ者はエヒウ之を殺すべし、エヒウの劍を遁るゝ者はエリシヤ之を殺すべし、我れ猶ほ七千人をイスラエルの中に遺さん、彼等は皆な其膝をバアルに闕めず、其口を之に接げざる者なり。

エリシヤの聖召(同十九—二十一節)



エリヤ彼處を去り、シヤパテの子エリシヤに遭ふ、彼は十二耦くまの牛を其前に歩ましめ、己は其第十二の牛と偕にありて耕し居たり、エリヤ彼の所に涉りゆきて外套まんとを其上に投懸けたり、彼れ牛を棄てエリヤの後に趨たすり行きて言ひけるは、  
 請ふ、我をして我が父と母とを接吻せしめよ、然る後、我れ汝に従はん  
 と、エリヤ彼に言ひけるは、  
 往け、還れ、我れ汝に何を爲したりしや  
 と、彼れ彼を離れて家に還り、一耦の牛を取りて之を殺し、牛の器具うつぐを焚きて其肉を煮、之を民に與へて食はしめ、而して起てエリヤに従ひ之に事へたり。

字 解

1 「渾：渾云々」一五「一」什を語りしかば○2 「神等斯く爲し云々」手相似を以て爲したる誓ひの言なり○3 「彼れ此事を觀しかば」此事に勘かん付つきしかば。エリヤはイエゼベルの使者の到りし前に危険の彼の身に迫りしを覺りしが如し○「ユダに屬する

ベエルシバ」ユダ王國に屬するシメオンの地に在るベエルシバ、猶太亞國の南に盡きてバランの砂漠に連なる邊にあり○「從者」傳へ言ふ、ザレバテなる嫠婦やうめの一子にしてエリヤが死より救ひし者なりと○4 「金雀花」れだま樹、本誌第二十三號を見よ、茫漠たる砂原の中に立てる一本のれだま樹の下に坐せりと云ふ○「父祖等に勝らず」父祖等と何の異なる所なし、即ち我は父祖等と運命を共にす、善を以て惡に勝つ能はずとの意なり○5 「人あり、彼に捫りて云々」『愛吟』中「エンディミオン」の一篇を參照すべし、知らぬ情こぼけの人ありて、此身の憂うれひに應ふらんとは斯かる人なり、エリヤ後に其人の天使なりしを發見せりと云ふ、然れども渾まて援くる人は天使にあらざる乎○7 「途尙ほ遠ければ也」ベエルシバよりホレブまで直徑六十哩 旅程尙ほ遠し、エリヤは未だ死すべからず、彼に尙ほ爲すべきの事業存す、前途尙ほ遠遠なり○8 「四十四夜」或る長時日を経て。必しも四十晝夜の意に非ず○「神の山ホレブ」モーセが神より十誡を授けられし山、故に此稱あり、事、出埃及記第十九章に審かなり○9 「彼處の洞穴」ホレブの洞穴として有名なりし者、曾てモーセが神の示顯に接せし所、



出埃及記卅三章廿一、廿二節を見るべし○「宿れり」一夜を過せり○「汝何を爲す乎」英語のHow do you doと云ふに同じ、「何を爲す乎」は「如何に爲すや」、即ち「如何にあるか」、又は單に「如何に」と云ふに同じ○11「エホバ通過<sup>すば</sup>給ふべし」エホバの榮光汝の前を過ぐべし、汝モーセの如く其示顯に與かるべし○12「静かなる微細<sup>ほそ</sup>き聲ありき」静肅の中に微細<sup>ほそ</sup>き聲ありきとも譯するを得べし、後者蓋し正譯なるべし○13「外套<sup>ま</sup>」所謂「預言者の外套」なり、一種の制服なりしならん、第十九節を見よ○15「膏を沃ぐ」單に任命<sup>たんめい</sup>の意なり、三人受膏の記事聖書に見當らず、馬太傳末章十九節「萬國の民にバプテスマを施し」の辭も斯く解すべき者なるべし、即ち單に「弟子と爲すべし」の意にして必しも水の洗禮式を施すべしとの意にあらざるべし○17「エリヤ殺すへし」劍を以てに非ず、エホバの言を以て殺すべし○18「七千人」我が簡<sup>たもと</sup>みたる多數を遣さんとの意なり、數字を字義なりに解すべからず○「其口を之に接せざる者」パアルの像を接吻せざる者。接吻は屬從の表彰なり。

19「エリヤ彼處を去り」ホレブを去り、曠野を経て再び故國に歸り、ヨルダン河の東、

スコテより程遠からぬアベルメホラの地に到りて○「十二耦の牛」二十四頭の牛を以て耕耘に従事せりと云ふ、以てエリヤの家の豪農なりしを知るべし○「外套を其上に投懸く」預言職授任の式なるべし、而かも其式場は教會堂に非ずして田野なり、授くる者は野人、受くる者は農夫なり、最も嚴肅なる儀式は斯かる場合に於て行はる○20「我父と母とを接吻せしめよ」我が父母に離別を告げしめよ○「行け、還れ」行け、然れども直に我が許<sup>もと</sup>に歸り來れ○「我れ汝に何を爲したりし乎」我れ汝にエホバの名に由りて預言の職を授けたりしに非ずや、汝は今や家を顧るべきに非ず、神のため、國のため、汝の公職に就くべきにあらずや云々、エリヤの此言に確かに不滿の調<sup>しらべ</sup>あり○21「エリヤに従ひ之に事へたり」エリヤの弟子となり、之に師事せり、後に「エリヤの手に水を注ぎたるシヤバテの子エリヤ」と稱はれたり(列王紀略下三章十一節)。

意解

列王紀略上第十九章一節より八節まで



○イニゼベル 神の預言者を屠り、エリヤ バアルの預言者を屠り、暴に報ゆるに暴を以てせり、是れ常人にありては許すべしとせん、然れども神の人にありては許すべからず、暴行に對して刑罰なかるべからず、而して神の人に在りては暴行の刑罰は聖靈の褫奪なり、而してエリヤたりと雖も此刑罰より免かる能はざりき。

○妖婦の威嚇に會ふて、エリヤは之に耐ふる能はず、死を恐れて遁逃す、全國民の反抗に會ふて鐵壁の如くなりしエリヤも、神の聖靈を奪はれては荏弱きこと斯の如し、**惡者は逐ふ者なけれども逃ぐと云ふ**(箴言廿八章一節)、神の人エリヤも殺人の罪を犯して此憐むべき状態に陥れり。

○イスラエルを去てユダに走り、ユダに留まる事能はずしてシナイに走る、バアルの預言者四百人と相對して猛きこと獅子の如くなりしエリヤは今は自己の影の逐ふ所となり、彷徨四十日、身をホレブの洞穴に隠すに至りて初めて平安を得たり、想ひ見る、**れだむ樹の下、偉漢長旅に疲れて寐るの状を、彼れ今や真に孤獨なり、人を離れ、神を離れ、宇宙の孤客となりて獨り曠野に彷徨ふ。**

○彼れ今やヨブの如く生を願はずして死を求めたり、曰ふ、最早足れり、我は苦痛を嘗め盡せり、我が事業は渾て失敗なりき、我が誠實は人の認むる所とならず、神も亦我を去り給ふ、我は我が父祖と何の異なる所なし、我が前にありしすべての預言者の如く、我が生涯も亦失敗のそれなりきと。

○然れども失望其極に達して希望の曙光現はる、エリヤは新たに神意を曉らざるべからず、彼に尙ほ爲すべき事業在り、彼はホレブに行て神の教訓に與からざるべからず、復た故國に歸りて、正義公道を唱へざるべからず、彼は熱心に驅られて犯せし罪のため砂漠の露として消ゆべきにあらざるなり。

○茲に於てか天使彼に來りて彼を慰めたり、曰く「エリヤよ、興きて飲み且つ食へ、汝の前途尙ほ遼遠なり」と、神は其子の荏弱を知り給ふ、彼は其失錯の故を以て之を追窮し給はず、其荏弱を自認するに至るや、天使を遣りて之を慰め給ふ。

同九節より十八節まで

○天使の慰藉に力を得て徒歩數日にしてシナイ半島ホレブ山に至る、茲に會て神の人



モーゼが籠りしと傳へらるゝ洞穴あり、エリヤ之に宿り、過去を追想し、モーゼの神の示顯を待てり、聲あり彼に問ふ、彼れ思ふが儘を答ふ、彼は尙ほ自己の潔白を辯じて止まず、曰ふ、我れ熱誠を以て民の罪惡を責めたり、然るに民我を殺さんとすと、彼は未だ自己の罪を曉らず、彼は死を恐れて此茲に逃來りし理由を解せず、故にエホバは今茲に彼を教へ給はんとす。

○聲あり曰く、洞穴の入口に立つべし、汝はモーゼの例に倣ひ神の示顯に接すべしと、時に大風の山を裂き岩を碎くあり、然れどエホバの影を見る能はず、風息みて後に地震ふ、然れどエホバの聲を聞く能はず、地震止みて後に噴火あり、然れどもエホバの跡を認むる能はず、噴火止みて後に萬籟肅然たり、而して視よ、微細き聲あり、エリヤの心に耳語きて曰ふ、エリヤよ、如何にと、然れどもエリヤは此時未だ此現象を以てする大教訓を曉る能はざりしが如し、故に彼の答ふる所前と異ならず、彼はヨブの如く依然として彼の潔白を維持せり、彼れ終に之を曉りしや否や、吾人は知らず、唯識る、其眞に神の大なる示顯なりしことを。

○即ち識る神は大風を使ひ給ふも大風の如き者にあらざることを、裂きて碎くは彼の喜び給ふ所にあらず、彼は又地震の如き者にあらず、震ひて恐れしむるは彼の欲み給ふ所にあらず、エホバは又火の如き者にあらず、燬きて盡すは彼の求め給ふ所にあらず、彼は靜肅を愛し給ふ、彼の寶座は萬有淵靜の中にあり、彼の聲は洪波の如くならず、潺湲の如し、彼は咆哮たまはず、耳語き給ふ、靜肅の中に細き聲を聞きて我等は其洵に神の聲なるを知るなり。

○然れどもエリヤは此示顯に接して其深き意味を曉る能はざりしが如し、彼は義罰の神としてより他にエホバの神を知る能はざりしが如し、故に彼の再度の自辯に接して神は更らに彼を責め給はず、彼の解し得る範圍に於て彼を慰め、彼を故國に還し給へり、エホバは彼に言ひ給しが如し、

我れ汝に教ゆるも汝は曉らず、尙ほ我より惡人の責罰を望んで止まず、然らば我れ暫らく汝の意に任かせん、往て我名に由りてスリヤの王としてハザエルを定むべし、イスラエルの王としてエヒウを定むべし、而して汝の後繼者としてエリヤを定む



べし、彼等三人相援けてアハブと其家とを罰すべし、憐むべし、汝は未だ愛の勢力を  
曉る能はず、唯義罰の悪人の上に加はらんことを求む、我れ今深く汝を責めず、責  
むるも詮なければなり、ホレブに於ける示顯の意味は後世之を曉る者あるべし、汝  
は舊約の預言者として汝の生涯を終るべし、我れ後日に至り、汝に勝る預言者を  
起し、靜かなる微細き聲の福音を唱へしむべし。

○アハブの家は亡ぶべし、然れども信仰はイスラエルの中より絶えざるべし、エホバ  
は更らに許多の義人を彼等の中より起し給ふべし、アハブに詣ひてバアルの膝を屈せ  
ざる者、イエゼベルに媚びてアシラの像を接吻せざる者を起し給ふべし、エリヤは單  
獨を歎つべからず、そは彼は神と偕に在りて單獨ならざるのみならず、神は又彼のた  
めに多くの同志を起し給ふべければなりと。

同十九節より二十一節まで

○ホレブに於ける隱退は終れり、彼は其處に神の大なる示顯に與かりしも其深意を曉  
らざりしが如し、然れども他に大なる任命を帯びて故國に歸れり、アベルメホラに於

てシヤバテの子エリシヤに會し、之に預言の職を授けたり、エリシヤは富家の子弟な  
りしも何の躊躇する所なく、斷然起て野人の迹に従へり、彼は自己の決心を固うせん  
ために、先づ牛二頭を屠り、耕具を焼て其肉を煮、之を村民に施して去れり、聖職に  
就く者に此決心なかるべからず、河を渡り舟を焼て去るとはエリシヤの謂なり、彼は  
エリヤの後繼者として能く其任に耐ふるなるべし。

## (四)

暴主の貪望(列王紀略上第二十一章一、二節)

エズレル人 ナボテ エズレルに葡萄園を有ちたり、サマリヤ王アハブの宮殿の側に  
在りたり、アハブ ナボテに言ひけるは、

汝の葡萄園を我に與へよ、我れ之を我が蔬菜園となさんとす、我家に近かければな  
り、我れ之に代へて其れよりも善き葡萄園を汝に與へん、或ひは若し汝の心に適は  
ば我れ其價を銀にて汝に與へん、と。



ナボテ アハブに言ひけるは、

硬漢の拒絶(同三、四節)

是れエホバの禁じ給ふ所なり、我は我父祖の産業を汝に與ふる能はず、と。

アハブ憂ひ且つ怒りて其家に歸れり、エズレル人ナボテの言に由てなり、アハブ其床に臥し、其面を背け、食をなさざりき、其妻イエゼベル彼の所に來り、彼に言ひけるは、

汝、何故に憂ふるや、汝、何故に食せざるや、と。

彼れ彼女に言ひけるは、

我れエズレル人ナボテに語りて言へり「汝の葡萄園を銀に易へて我に與へよ、若しまた汝、欲するならば我れ之に易へて他の葡萄園を汝に與へん」と、然るに彼は言へり「我は我葡萄園を汝に與へざるべし」と、我れ是れが故に憂ふ、と。

其妻イエゼベル彼に言ひけるは、

汝は今イスラエル國を治むるに非ずや、起て食せよ、汝、心に樂しかれ、我れエズ

レル人ナボテの葡萄園を汝に與へん、と。

妖婦の奸計(同五—十一節)

茲に於てイエゼベル アハブの名を以て書を作り、彼の印を捺し、此書をナボテの住する邑の長老並に貴人に贈れり、彼等は彼と同邑の人なり、イエゼベル其書に記して言ひけるは、

斷食を布告し、ナボテを民の上座に据えよ、而して惡漢二人を彼の前に据え、彼に對して證を爲して言はしめよ、「汝は神と王とを誣ひたり」と、斯くて彼を曳出し、石にて彼を撃ち、彼をして死なしめよ、と。

無辜の虐殺(同十一—十四節)

ナボテの邑の人、即ち其邑の住人なる長老と貴人等、イエゼベルが彼等に言遣はせしが如くに爲せり、即ち彼女が彼等に贈りし書に記しありしが如くに爲せり、彼等は斷食を布告し、ナボテを民の上座に据えたり、時に惡漢二人入り來りてナボテの前に座せり、斯くて惡漢、彼に對し、即ちナボテに對し、民の前にて證を爲して言へり、



ナボテは神と王とを誼ひたり、と。

茲に於て人々彼を村の外に曳出し、石にて彼を撃ちたれば、彼れは死せり、斯くて彼等人をイエゼベルに遣して言へり、

ナボテ石にて撃たれて死せり、と。

果園の略奪(同十五、十六節)

斯くてイエゼベル ナボテ石にて撃たれて死したりと聞きしかば、イエゼベルアハブに言ひけるは、

起てエズレル人ナボテが銀に易へて汝に與ふるを拒みし葡萄園を占領すべし、ナボテは生きて居らず、死にたれば也、と。

斯くてアハブ ナボテの死にたるを聞きしかばエズレル人ナボテの葡萄園を占領せんとて、其處に下らんとて起てり。

義人の憤怒(同十七—廿六節)

時にエホバの言テシベ人エリヤに臨みて言へり、

起てサマリヤに在るイスラエルの王アハブに會はんために下るべし、視よ、彼れ今ナボテの葡萄園に在り、彼れ之を占領せんとて其處に下れり、汝、彼に語りて言ふべし、

エホバ斯く言ひ給ふ、汝は殺し且占領せし乎、と。

汝又彼に語りて言ふべし、

エホバ斯く言ひ給ふ、犬がナボテの血を舐めし其處に於て、犬は汝の血を舐むべし、と。

アハブ エリヤに會ふて之に言ひけるは、

嗚呼我が敵よ、汝、我を見出せし乎、と。

エリヤ答へて言ひけるは、

我れ汝を見出せり、汝、エホバの目の前に悪事を爲すがために自己を賣りしが故に、視よ 我れ汝の上に悪事を降さん、汝の後裔を除き、汝に屬する者は、繋かれたる者と繋かれざる者とを論せず、悉く之を絶ち、汝の家をしてネバテの子マラベ



アムの家の如く、又アヒヤの子バアシヤの家の如くに爲さん、汝、我を怒らせ、イ  
スラエルをして罪を犯さしめたるに因てなり、又イエゼベルに就てもエホバ斯く語  
て言ひ給ふ、「夫エズレルの城壁の側にイエゼベルを食はん」と、アハブに屬する者  
にして邑にて死する者は犬之を食はん、野にて死する者は空の鳥之を食んと。  
(實にアハブの如くエホバの目の前に惡事を爲さんために自己を賣りし者はあらざり  
き、其妻イエゼベル彼を煽動せしなり、彼は偶像に従ひて甚だ惡むべきとを爲せり、  
彼はすべての事に於てエホバがイスラエル人の前より追攘ひ給ひしアモリ人が爲せし  
が如くに爲せり)。

暗主の懺悔(同二十七—二十九節)

アハブ是等の言を聞きしかば、彼れ其衣を裂き、粗麻布あさぢふを身に纏ひ、食を斷ち、粗麻  
布の上に臥し、素足すあしにて歩めり、時にエホバの言テシベ人エリヤに臨みて言へり、

汝、アハブの我前に自己を卑下ひげするを見るや、彼れ我が前に自己を卑下するに因て  
我れ惡事を彼の日に於て降さるべし、彼の子の日に我れ惡事を彼の家に降すべし、

と。

字 解

列王紀略上第廿一章一—十六節

1「エズレル」第十八章四十五節本文并に字解を見るべし○2「葡萄園」カルメル山  
并にキシヨン河沿岸一帯の地は好良なる葡萄の産出を以て名あり○3「エホバの禁じ  
給ふ所なり」民數紀略三十六章七、八節を見るべし、父祖傳來の所有地を他人に賣渡  
すは摩西律の嚴禁せし所なり○4「アハブ」其の家に歸り「サマリヤなる其家に歸  
り○7「汝」國を治むるに非ずや」汝は國王ならずや、臣下の所有はすべて汝の所  
有ならずや云云○「我れ」汝に與へん」ナボテは何と言ふとも我れ計策を以て汝の  
欲する田園を汝に與ふべし○8「ナボテの住する邑」勿論エズレルなり○「長老并に  
貴人」家富み位高く、民の指導者を以て自から任ずる者○9「斷食を布告せよ」大不敬  
漢のエズレルに現はれしあり、市民は自から其罪を負ひて斷食を行ふべし、と、撒母耳



前書七章六節の例に倣ふ○「民の上座に据えよ」民衆の注目する所に据えよ○10「惡漢」直譯すれば「ベリアルの子」なり、哥林多後書六章十五節を見るべし、無神の徒なり、利益のためとならば何事を爲すにも躊躇せざる者なり○「二人」證人は必ず二人以上ならざるべからず、申命記十七章六節○「神と王とを誣ひたり」讒誣の言也、不敬不忠を行ひたりとなり○「石にて撃ち云々」利未記二十四章十六節に曰く「エホバの名を瀆す者は必ず誅されん、全會衆必ず石をもて之を撃つべし」と○16「下らんとて起り」アハブは今やサマリヤに在りたり、サマリヤは高地に在り、エズレルは河岸の低地にありたり、故に爾か云ふ。

## 同十七—二十九節

18「下るべし」エリヤ今またカルメル山上に在りしが如し○19「殺し且占領せし乎」殺し且つ竊みし乎、十誠の二ヶ條を同時に破りし乎○「犬、汝の血を舐むべし」二十章三十八節を見るべし、アハブはエズレルに於てにあらざり、サマリヤに於て死せしと雖も、預言の要點は事實となりて現はれたり○20「自己を賣りしが故に」自己を惡

人（此場合に於ては特に妖婦イエゼベル）の手に委ねしが故に。アハブは自づから手下さゞりしならん、然れども彼の配下を制する能はずして彼等をして大罪を犯さしめたり○21「繋がれたるものと繋がれざる者」申命記三十二章三十六節参考、奴隸と自主との意なるべし、加拉太書三章二十八節を見るべし○22「ネバテの子ヤラベアムの家の如く」十五章二十九節を見るべし○「アヒヤの子バアシヤの家の如く」十六章十節を見るべし○23「犬イエゼベルを食はん」列王紀略下九章三十五—三十七節を見るべし○25 26 兩節は列王紀略編者の回想なり、故に挿入文として讀むべし○「アモリ人」カナン民族中最も勢力ありし者なり、アハブはカナン土着の民の習慣に倣ひてすべての惡事を行ひたりとなり○27「粗麻布を身に纏ひ……粗麻布の上に臥し」晝は之を身に纏ひ、夜は其上に臥したり○29「彼の日に於て」彼の世に在る間は。

## 意解

○十誠第十條に曰く、汝、その隣人の家を貪る勿れと、然るにサマリヤ王アハブはそ



の隣人の田圃を貪り、之を己が有となさんとせり、彼は想ひしならん、我は國王なり、故に法律以上なり、我に爲さんと欲して爲す能はざることあるべからず、又我が臣民にして我が命を拒む者あるべからずと、故に彼はエズレル人ナボテに臨むに權威と利慾とを以てし、其葡萄園を獲んとせり。

○然るにナボテは王の權威に優りて法律を貴びたり、摩西の律法に曰く、

地を賣るには限りなく賣るべからず、地は我(神)の有なればなり。利未記二十五章

二十三節。

イスラエルの産業、この支派わかれよりかの支派に移ることあらじ、イスラエルの子孫は皆な各自その父祖の産業に止まるべきなり。民數紀略三十六七節。

ナボテは法律に由て王の要求を拒めり、爲めに災害を己が身に招けり。

○王は怒れり、彼は食を廢したり、彼は彼の臣下に彼の命令を拒む者あるを見て之に堪ゆる能はざりき、故に小兒の如くに悶もたえ、單ひとへに其小なる慾望の達せられんことを欲ほひたり。

○茲に於てか妖婦イエゼベル現はれたり、彼女は曰へり「汝は國王ならずや、而して國王として國內に於て爲す能はざることあらんや、起てよ、憂ふる勿れ、ナボテは拒むとも、法律は禁ずるとも、我れ我が計略を以て汝の欲するものを汝に與へん」と、彼女は實に彼の身に添ふ惡靈なりき。

○イエゼベルの計策は大膽にして單純なりき、官書を私造するにあり、ナボテに罪を被かぶむらするにあり、而して彼を殺して其田圃を奪ふにあり、而して彼女は躊躇するこ  
となく、彼女の欲するが儘を實行せり。

○憐むべしナボテは罪なきに惡漢二人の偽證に由て、國賊、不敬漢の名を被せられ、民衆の石撃する所となりて死せり、「ナボテは神と王とを誣いつはりひたり」と、イエゼベル如何で神を知らんや、而かも彼女は神の名を藉りて無辜を殺したり、嗚呼、敬神よ、愛國よ、如何に多くの罪惡は汝の名に由て行はれしよ。

○惡漢の憎むべきは言を待たず、然れども恕すべからざるはエズレルの長老と貴人となり、彼等はナボテと同邑の者なり、然るに彼の讒誣ざんごさるゝを見るも敢て一言、彼の



ために辯護の聲を揚げず、見す／＼彼をして悲惨の死を遂げしめたり、人情輕薄、薄きこと紙の如し、然れども何ぞ惟りエズレル市民に限らんや、權威を懼れ、自己の安全を氣遣ふて、長者も貴人も怯懦なることすべて如此し。

○國に大罪は行はれたり、然れども一人の起て王と民とを責むる者なかりき、イエゼベルは心に言ひしならん、我れ我が智慧と權力とを以て何事をか爲し得ざらんやと、國民は聲を潜めて互に相語りて言ひしならん、今や不義に抗するも益なし、唯各自身を慎みて王者の憤怒に觸れざらんのみと、然れども茲に一人の人の面を懼れざる者ありき、彼れホレブの山より歸りて以來カルメル山に隠れて長く沈黙を守りたり、然りと雖も、エズレルに無辜の血の冷酷に流されしを聞いて、終に再び起たざるを得ざるに至れり、アハブがサマリヤを出てエズレルに至りしと同時にエリヤはカルメル山を出て同じくナボテの邑に下れり、恰かも大軍の山を降りて王を邀撃せんとするが如し。

○二者はナボテの葡萄園に於て出會せり、アハブは始めより此事あらんを懼れたり、故に彼はエリヤに曰へり「嗚呼我が敵よ、汝、我を見出せし乎」と、恰も盜賊の警官

に出會せしが如し、エリヤは憚からずして王を責めたり、彼は神の刑罰を彼れに申渡したり、彼は彼の家の全滅を預言せり、エホバの律法は總ての人に對して公平なり、殺せし者は殺さるべし、王と女王とは殺し且つ奪ひたり、故に殺され且つ奪はるべしと、神の公義を齎らして身に寸鐵を帯びざる預言者は強きこと銅の城の如し。

○エリヤの詰責と呪詛とに會ふて、アハブは甚く罪を悔ひたり、神は碎けたる悔いし心を藐め給はず、積惡アハブの如き者の場合に於ても然らざるはなし、彼の罪は懺悔の故を以て輕減せられたり、彼の家は彼の存命中に亡びざるべし、然れども彼とイエゼベルとはナボテの慘死に類する死を免かるゝ能はずと、神は人を視て審判き給はず、神の前には國王も臣下と等しく罰せらるべし、イスラエルを治むる者は其國王にあらずしてエホバなり、而してエホバは預言者を以てイスラエルと其の王とを治め給ふ。



## 士 師 ギ デ オ ン

著者曰、本文は邦譯聖書に基き、改正英譯聖書、アイサツク・レーゼル(猶太人)英譯舊約聖書、ダグラス氏著『士師記解釋』、G・F・ムーア氏著『士師記批評的註解』等により之に改正を施せしものなり、余輩は讀者が註解を讀む前に本文を熟讀、精讀せられんことを望む。

## (一) 士師記第六章

## 要 略

- 一、イスラエルの子等惡を行してミデアン人の手に附さる(一—五節)。
- 一、イスラエルの子等其罪を悔ひてエホバに呼はる(六節)。
- 一、エホバ預言者を遣りて彼等を責め給ふ(七—十節)。
- 一、エホバの自顯、ヨアシの子ギデオンの聖召(十一—廿四節)。

一、ギデオン、バアルの像を毀ち其父の家と郷とを革む(二十五—三十二節)。

一、ミデアン人の侵入、羊毛を以ての試験(三十三—四十節)。

1 イスラエルの子等復たエホバの目の前に惡を行へり、エホバ七年の間彼等をミデアン人の手に附し給へり。2 ミデアンの手イスラエルを壓せり、ミデアン人の故を以てイスラエルの子等は山にある窟と洞穴と堡砦とを自己のために造れり。3 斯くてイスラエルが種を蒔くやミデアン人アマレキ人及び東方の民、相共に上り來り。4 イスラエル人に對して陣を張り、地の産物を荒してガザにまで至り、イスラエルの中に生命を維くべき物を遺さず、羊も牛も驢馬も遺さざりき。5 彼等は家畜と天幕とを携へて來れり、蝗蟲の如くに數多く來れり、彼等と彼等の駱駝は數ふるに勝へず、彼等は國を荒さんとて入來れり。6 斯かりしかばイスラエルはミデアン人のために大に衰へたり、茲に於てかイスラエルの人々エホバに呼はれり。

7 斯くてイスラエルの子等ミデアン人の故を以てエホバに呼はりしかば、エホバ一人の預言者をイスラエルの子等に遣り給へり、彼れ彼等に告げて曰ひけるは、



イスラエルの神エホバ斯く曰ひ給ふ、

我、曾て汝等をエジプトより上らせ、

汝等を奴隸の家より出し、

9 汝等をエジプト人の手より救ひ、汝等を虐る者の手より脱し、

汝等の前より彼等を追攘ひ、其邦土を汝等に與へたり、

10 我れ又汝等に言へり、我は汝等の神エホバなり、

汝等が住居るアモリ人の國の神を懼るべからず、と

然るに汝等は我が聲に従はずりき。

11 茲にエホバの使者來り、アビエゼル人ヨアシの所有なるオフラの橡の樹の下に坐し給へり、時にヨアシの子ギデオン、ミデアン人の目より隠さんために酒搾の中に麥を打ち居たりしが<sup>12</sup> エホバの使者彼に顯はれて曰ひ給ひけるは「猛き勇者よ、エホバ汝と偕に在す」と、<sup>13</sup> ギデオン彼に曰ひけるは

あゝ我が主よ、エホバ若し我等と偕に在さば何とて是等のこと我等の上に及びたるや、又我等の父祖が我等に告げて「エホバは我等をエジプトより導き出し給ひしにあらずや」と言ひしそのすべての不思議なる行爲は何處にあるや、今はエホバ我等を棄てミデアン人の手に附し給へり。

<sup>14</sup> エホバ彼を顧て曰ひ給ひけるは「汝、此汝の力をもて行きミデアン人の手よりイスラエルを救ひ出すべし、我れ汝を遣すにあらずや」と<sup>15</sup> ギデオン彼に曰ひけるは「ああエホバよ、我れ何を以てかイスラエルを救ふべき、視よ、我家はマナセ族の中の最も弱き者、我は又我が父の家の中の最も微さき者なり」と<sup>16</sup> エホバ彼に曰ひ給ひけるは「我れ必ず汝と偕に在るべし、汝は一人を撃つが如くにミデアン人を撃つを得べし」と<sup>17</sup> ギデオン彼に曰ひけるは「我れ若し汝の前に恩恵を得しならば、請ふ我と語る者の汝なる休徴を我に示し給へ<sup>18</sup> 願くば我れ復たひ汝に來り、我が祭物を携へて之を汝の前に供ふるまで此處を去り給ふ勿れ」と、彼れ曰ひ給ひけるは「我れ汝の還るまで止まるべし」と<sup>19</sup> ギデオン即ち往きて小山羊と粉一エバをもて造りし無酔パンを備へ、



肉は之を筐に入れ、羹は之を壺に盛り、而して橡樹の下なる彼の所に持來りて之を獻げたり<sup>20</sup> 神の使者彼に曰ひ給ひけるは「肉と無酵パンとを取りて此巖の上に置くべし、而して羹を之に注ぐべし」と、彼れ即ち其如く爲せり<sup>21</sup> エホバの使者その手に持てる杖の末端を伸して肉と無酵パンとに觸れたりしかば巖より火燃え上り、肉と無酵パンとを焼き盡くせり、而してエホバの使者は去りて彼の目に見えずなり給ひぬ<sup>22</sup> ギデオン茲に於て彼がエホバの使者なりしを覺れり、ギデオン曰ひけるは「干嗟我れ死なん神エホバよ、そは我れ實に面を合せてエホバの使者を見たれば也」と<sup>23</sup> エホバ彼に曰ひ給ひけるは「平安汝にあれ、怖るゝ勿れ、汝死ぬることあらし」と<sup>24</sup> 茲に於てギデオン彼所にエホバのために祭壇を築き、之をエホバシャロと名けたり、是は今日に至るも尚ほアビエゼル人のオフラに在り。

<sup>25</sup> 斯くてエホバ其夜ギデオンに曰ひ給ひけるは「汝の父の牡犢即ち七歳なる第二の牡犢を取り、汝の父の有てるバアルの祭壇を毀ち、其傍なるアシラを斫すべし<sup>26</sup> 而して汝の神エホバのために此堡砦の頂に次序を正しくして祭壇を築き、第二の牡犢を取

り、汝が斫すせるアシラの木を以て燔祭を獻ぐべし<sup>27</sup> ギデオン即ちその僕十人を携へてエホバの曰ひ給ひしが如くに行へり、然れど父の家のもども及び邑の人を怖れたれば晝之を爲すことを得ず、夜に入りて之を爲せり<sup>28</sup> 邑の人々朝早く起き出て來りしに、視よ、バアルの祭壇は毀たれ、其傍なるアシラは斫すされてあり、新たに築かれたる祭壇の上に第二の牡犢は獻げられたり<sup>29</sup> 彼等互に曰ひけるは「誰が此事を爲せしや」と、彼等且つ問ひ且つ探り、終に曰ひけるは「ヨアシの子ギデオン此事を爲せり」と<sup>30</sup> 茲に於て邑の人々ヨアシに對ひ曰ひけるは「汝の子を曳き出せ、彼は死ぬべし、そは彼はバアルの祭壇を毀ちたればなり、又其傍にありしアシラを斫すしたれば也」と<sup>31</sup> 然るにヨアシ己れの周圍に立てるすべての人々に曰ひけるは「汝等はバアルの爲めに論争ふや、汝等は之を援けんとするや、之がために論争ふ者は朝の中に死ぬべし、バアル若し神ならば自から論争ふべし、そは人其祭壇を毀ちたれば也」と<sup>32</sup> 是をもて人々彼れその祭壇を毀ちたれば「バアル自から論争ふべし」と曰ひて其日ギデオンをエムバアルと稱べり。



33 茲にミデアン人、アマレク人、及び東方の民等相集りて河を濟りエズレルの谷に陣を張れり<sup>34</sup> 然るにエホバの靈ギデオンの臨めり、彼れ籟を吹さしかばアビエゼル人彼の下に集れり<sup>35</sup> 彼れ使者を偏くマナセに遣りしかば、マナセ人も亦彼の下に集れり、彼れ又使者をアセル、ゼブルン及びナフタリに遣りしかば、その人々も之を迎へたり<sup>36</sup> 時にギデオン神に曰ひけるは

汝、曾て言ひ給ひしが如く、果して我が手を以てイスラエルを救はんとし給はば<sup>37</sup> 視よ我れ羊毛の一束を禾場に置くべし、而して露若し羊毛にのみあきて地はすべて<sup>38</sup> 燥き居らば、我れ之に由りて汝が曾て言ひ給ひし如く、汝、我が手を以てイスラエルを救ひ給ふを知るべし

と<sup>38</sup> 即ち斯くなりぬ、彼れ翌朝早く起出で、羊毛を播寄せてその毛より露を搾りしに鉢は水を以て満たされたり<sup>39</sup> ギデオン又神に曰ひけるは「我に向つて怒を發し給ふ勿れ、我をして尙ほ一回言はしめ給へ、願くば尙ほ一回羊毛を以て試さしめ給へ、願く

ば羊毛のみは燥きありて地には悉く露あらしめ給へ」と<sup>40</sup> 其夜神その如くに爲し給へり、即ち羊毛のみは燥きありて地にはすべて露ありき。

註 解

時 代

紀元前凡そ千年頃、イスラエルの子等がカナンの地に定住してより二百年乃至三百年の後也、士師ギデオンの前にオテニエル(三章九節)、エホデ(同十五節)、シャムガル(同卅一節)、女預言者デボラ(四章四節)並にバラク(同六節)ありたり、皆な救者としてエホバに召されイスラエルを其敵の手より救へり、ギデオンは士師の第六代目なり、或ひは曰ふ、彼れ以前の士師に同時代の者ありたりと 若し然りとすれば彼の年代を精密に知るは更らに難し、後の預言者に所謂大預言者と小預言者とありしが如く、士師に又大士師と小士師とありたり、而してギデオンはデボラ、サムソン、エフタと共に四大士師と併せ稱せらる。



## 人名、地名

1 「ミデアン人」ミデアンはアブラハムが其妻ケトラに由て生みし子の一人なり（創世記廿五章一—四節）、其子孫はヨルダン河以東の沙漠に住せり、彼等時にはイシマエル人と稱せられたり（八章廿四節）、二者の習俗の能く相似たるに由てなるべし、今日のアラビア人の如き者にして掠奪を以て業とせり○3 「アマレキ人」慄悍の民なり、幾度かイスラエルの民を苦しめし者、ミデアン人と同じくヨルダン河以東に住せり（今往きてアマレクを撃ち云々。撒母耳前書十五章三節参考）○「東方の民」エダヤの地より見て云ふ、ヨルダン河以東に住せし民なり、ミデアン、アマレク、其他の東方の民を云ふ○「ガザ」ピリステの地に在り、エルサレムより西南にあたり、地中海の濱より遠からざる所にあり、東方の民の掠奪ガザにまで至れりとあるを見てその全國に涉れるを知るべし○11 「アビエゼル人」マナセ族の一支派なり（約書亞記十七章二節）○「オフラ」マナセの地に在りたり、然れど明細に其地位を定むる能はず○24 「エホバシヤロム」エホバは平和なりとの意なり、平和はエホバより來るとも、エホバは平和を

賜ふとも解するを得べし、祭壇に名を附する前例は之を出埃及記十七章十五節に於て見るべし（エホバニシ、エホバ我旗の意なり）、紀念のために祭壇を築きし前例は約書亞記二十二章二十六節に記さる○25 「アシラ」バアルの像を祭るために立てられし竿なりしが如し、時には數本林立せしことありたり、故に林と譯せらるる事あり、「アシラを斫仆す」の意は之に由て明かなり○32 「エルバアル」バアルをして自から論争はしめよとの意なり、偶像の無力なるを表彰して最も適切なる稱號なり、此名を負はしめられてギデオンは偶像の破壊者、眞神の忠僕として自ら立てり○33 「エズレルの谷」イサカル領とマナセ領との間に跨がりし廣谷の名なり、其水は東に流れヨルダン河に注げり、東方より攻登りし敵は恒に此谷に由りしが如し、後日に至りサウロ王が其子ヨナタンと共にピリシテ人を邀撃し、其殺す所となりしも此邊に於てなりき、猶太歴史に於ける著名の戰場なり○35 「マナセ」「アセル」「ゼブルン」「ナフタリ」地圖を参照すべし、カナンの地北半部を占領せるイスラエルの支派の名稱なり、中にイサカルを缺けり、蓋しギデオンがミデアン人を取りしはイサカルの領内に於てなりしが故に、



彼等の戦闘に加はりしは勿論のこととして其名を省きしに由るなるべし。

### 教 訓

○エホバに簡たまれ、愛せられ、其驚くべき攝理の下に導かれ來りしイスラエルの子等は復た彼の前に悪を行へり、彼等は前にも同じ悪を行ひ其懲罰と赦免と救済とに與かれり、然れども懲りずまに彼等は復た、然り復た、エホバの前に悪を行へり、人類を代表し、神の選民を代表し、基督信者を代表する彼等イスラエルの民は惡に陥るに易くして善に留まるに難き民なるかな(一節)。

○イスラエルの子等はエホバの前に悪を行へり、如何なる惡をか、姦淫か、奢侈か、醉酒か、狂暴か、彼等はすべて是等の惡を行ひしならん、然れども彼等は是等の惡を行ひし前に更らに大なる惡を行へり、彼等はエホバの神を棄て他の神に従へり、バアル崇拜家となれり、偶像信者となれり、心の純正を要求し給ふエホバの神を去て或ひは理性を満足すると稱し、或ひは美的觀念に訴ふると稱し、放縱を許容し、不淨を看

過するギリシヤ人、フィニシヤ人、カナン人等の崇拜するバアルの神に事へたり、是れイスラエル人が犯せし特別の罪たりしなり、神は特に此罪のために彼等を其敵の手に附し給へり(一節)。

○イスラエルの子等はエホバを棄てバアルに事へたり、而してエホバは七年の間彼等をミデアン人の手に附し給へり、信仰失せて獨立失す、エホバに依るは獨り立つの途なり、個人に於て然り、國家に於て然り、人類の歴史は此事を證明す(二節)。

○「堅固なる避所」なるエホバを離れしイスラエルの民は最も憐れなる者となれり、曾ては五人は百人を逐ひ、百人は萬人を逐ひし彼等は今はミデアン人の追窮する所となり、山に在る窟や洞穴や堡砦を自己のために造りて其中に身を匿くすに至れり、白日に濶歩せし彼等は暗夜に彷徨する者となれり、心にエホバの神を棄て身に異邦人の壓迫を受くるに至れり(二節)。詩篇七十一篇七節。利未記二十六章八節。

○信仰墮落の結果としてイスラエルの民は其自由と獨立とを失ひしに止まらず、其産までをも奪はるゝに至れり、彼等種を誦くや、ミデアン人は其同類アマレキ人及び其



他の東方の民を伴ひ來り、イスラエル人に對して陣を張り、地を荒して北の方ガリラヤ湖畔より南の方ガザの市にまで及べり、彼等は蝗蟲の如くに來れり、其數は算へ難く、其殘害は防ぐに途なかりき、斯くてイスラエルの中に存せし生命を維くべき物は羊、牛、驢馬に至るまで蝗蟲に食み盡されしが如くに異邦人の掠むる所となれり、イスラエルの民はエホバの神を棄てし時に事の茲に至らんとは思はざりしならん、彼等は身の繁榮を期してエホバを去てバアルに事へしなり、然るにバアルは彼等の希望を充たす能はずして、彼等は彼等の生命と恃みし其財産までを奪はるゝに至れり、信仰墮落は恒に信仰墮落に止まらず、延びて資産消失にまで暨ぶ(三一―六節)。

○「茲に於てかイスラエルの人々エホバに呼はれり」彼等は異邦人の掠むる所となり、其産を奪はるゝに至つて、始めて自己の非を曉り、聲を揚げてエホバに呼はれり、憐れむべき彼等は非を非として解する能はず、其悲むべき結果を見て始めて自己に歸るに至る、神を其眞美に於て視ずして、其下し給ふ物質上の恩恵に於てのみ認むる者の爲す所は恒に斯の如し、其産を奪はれて後始めて神に向つて叫ぶ、産を奪はるゝまで

は心より聖靈を取り去らるゝも、口より讚美の聲を絶たるゝも、何の損失をも感ずることなく、神は無きに等しき者と思ひ、或ひは利慾の神バアル即ちエホバなりと思ひて、安逸貪婪を繼續す、彼等の愚や憐むべし、然れども産を奪はれて目を覺ませし彼等に尙ほ救済の希望存す、世には此希望すらも存せざる者あり、即ち産を奪はるゝもエホバに歸ることなく、尙ほもバアルに祈りて復たび産を作らんと欲する者あり、然れどもイスラエルの民は斯くまでに神に誼はれし民にはあらざりき、彼等は彼等の困より羊と牛と驢馬とを奪はれて終に眼を上げてエホバに向つて呼はれり(六節)。

○エホバはイスラエルの子等の叫號の聲を聽き給へり、依て先づ一人の預言者を彼等の中に遣り給へり、預言者は預言者なるよりも寧ろ詰責者なり、彼は救者に非ず、救者は預言者の後に來る、神は先づ預言者を遣りて罪を責めしめ、然る後に救者を遣りて恩恵を施して救ひ給ふ(七、八節)。

○イスラエルの罪とは是れなり、即ち彼等は前に彼等を救ひしエホバを棄て、彼等と何の關係もなき異邦人の神に従へり、忘恩は彼等が犯せし特別の罪惡たりしなり、彼



等若しエホバを識らざりしならば止む、然れども彼等は國民としては既に數百年に涉り「エホバの恩惠深きを嘗あせひ」ながら、今に至て之を棄て他の神に仕へたり、是れエホバが彼等に就て特に怒り給ひし所以なり、故にイスラエルが犯せし罪は異邦人の犯し能ふ罪にあらず、「曾て嘗あせひて主を仁めぐみある者と知しりし者のみ犯し能ふ罪なり、即ち不信者の犯し能ふ罪にあらずして、信者のみ能く犯しあたふ罪なり、イスラエルは今復た此事を覺らざるべからず、然らざれば救済は彼等の上に臨まざるべし（八一十節）。

○預言者は其任務を終りたり、吾人は其何人なりし乎を知らず、聖書は其名をさへ吾人に傳へず、唯纔かに彼の發せし此警醒の一言を録とすのみ、彼は誰なりし乎、アモスの如き牧者なりし乎、エリヤの如き野人なりし乎、吾人は知らず、吾人は唯此時尙ほイスラエルに無名の預言者ありしを知るのみ、既に此預言者ありたり、イスラエルの復興は期して待つべし（七一十節）。

○預言者は其警醒の任務を終りたり、今は救済者の顯はるべき時なり、「茲にエホバの使者來り、アビエゼル人ヨアシの所有なるオフラの橡かしの樹の下に坐し給へり」、エホバ

の使者とは何者なる乎、希伯來語にて之を *Mal'ak Jahweh* と云ふ、彼は人なるが如くにして人にあらず、神なるが如くにして靈にあらず、彼は曾て曠野の泉の旁かたはらにてアブラハムに顯はれし者、又棘しほの中の火燄はのほの中にてモーゼに顯はれ給ひし者なり、人に非ず、神に仕ふる天使にあらず、マラク・ヤーヴェーは、エホバの自顯みまなり、後にイエスキリストとして顯はれ給ひし者也とは神の選民の一般に信ずる所なり、彼れ今其民を救はんとてマナセ族アビエゼル人ヨアシの所有なる橡の樹の下に坐し給へり、是れより奇蹟ふしわざはイスラエルの中に行はるべし（十一節）。創世記十六章十七節以下。出埃及記三章二節以下。

○エホバは其民を救はんとて下り給へり、然れども自己を國民全體に顯はし給はず、其中の唯一人に顯はし給へり、而かも其中の最も小なる者に顯はし給へり、國民の救済は個人の救済を以て始まる、而かも其最も小なる者の救済を以て始まる、衆目が見て以て塵ちりとなし、衆指が指して以て穢あけと做す者の救済を以て始まる、是れエホバの爲し給ふ所、我等の目に奇しあまと見ゆる所なり（十二節）。



○エホバの使者は酒樽さかばねの中に麥を打ち居たるヨアシの子ギデオンに顯はれ給へり、彼れ彼を祝して曰ひ給はく「猛き勇者よ、エホバ汝と偕に在す」と、後に處女マリヤを祝して「慶めでたし、恵めぐまるゝ者よ主汝と偕に在す」と言ひ給ひしが如し、ギデオンは小なりしも神に其勇猛を認めらるゝ所となりたり、彼は自己の弱さを知れり、然るにエホバは「猛き勇者よ」と曰ひて彼に話し掛け給へり、エホバはギデオンの信しんを知り給へり、彼の天上あまよりの力を受くるに足るの器うつわなるを知り給へり、故に微弱なる彼を「猛き勇者よ」と稱ひ給へり、人は其豫定の力量に於て神に識らるゝ、今のギデオンは後のギデオンに非ず、「猛き勇者」とは今のギデオンに非ず、神が豫め定め給ひしギデオンなり、即ち聖靈を受けて後のギデオンなり（十二節）。第三十四節を見よ。

○ギデオン驚いて曰ふ、エホバ我と偕に在すとよ、此事決してあるべからず、エホバは既にイスラエルを棄て之をミデアン人の手に附つし給へり、エホバがイスラエルと偕に在し給ひしは過去の事に屬す、今は末の世なり、預言は止み、奇蹟も亦絶えたり、エホバ我と偕に在すと聞くも我は其聲を信ずる能はずと（十二、十三節）。

○然れどもエホバは更らに彼を強めて曰ひ給はく、「疑ふ勿れ、信ぜよ、汝、此汝の力を以て行きミデアン人の手よりイスラエルを救ひ出すべし、我れ汝を遣すにあらずや」と、神はモーゼの時に於ての如くギデオンの時に於ても人と偕に在し給ふ、彼は永遠の存在者なれば彼の存在が過去に屬するが如き時は永久にあるべからず（十四節）。

○「汝、此汝の力を以て往くべし」と、我、今汝に與へんとする其力を以て往くべし、汝に存するにはあらで我に存する此（彼は自己を指して此言を發し給ひしならん）力を以て往くべし、我れエホバ汝を遣すにあらずやと、エホバはギデオンの注意を自己（エホバ）に惹き給ひて彼を勵すすし給へり、彼れギデオンは自己の力を以て往くにあらず、エホバの賜ふ力を以て往くなり、獨り自から擇らんで往くにあらず、エホバに遣つかられて往くなり、彼の成功の希望と確實とは此に存す（十四節）。

○然れどもギデオンの懷疑はエホバの此獎勵の言を以て晴れず、彼は更らに彼の微弱を訴へて彼に負はされんとする責任より免かれんとせり、「我家はマナセ族の中の最も弱き者、我は我が父の家の中の最も微さき者なり」と、前にモーゼは彼を埃及王バロ



に遣さんとするエホバの命を拒んで曰へり「主よ、我はもと言辭ことばに敏とよき人にあらず、我は口重く舌重き者なり……願くば遣はすべき者を遣はし給へ」と、後にエレミヤは預言の職を辭して曰く「噫主エホバよ、視よ、我は幼せまなきに由り語ることを知らず」と、神に召されし者は恒に自己の微弱を認識して止まず、辭するに能力の不足を以てす、然れども此謙虛ありてこそ能く神よりの力を注がるゝを得るなれ、ギデオンも亦自己を信ぜざりき、彼も亦神の召命に接して甚だ意外に感じたり（十五節）。出埃及記四章十、十三節。耶利米亞記一章六節。

○エホバ復たびギデオンの辭退じたいの言辭ことばを退けて曰ひ給ひけるは「我れ……我れ萬物を造りしエホバ……必ず汝と偕ともに在るべし、汝は一人を撃つが如くミデアン人を撃つを得べし」と、エホバの手に由りて事を爲さんとす、ギデオンの弱さを以てするもミデアンの強さを挫くは容易の業なり、ギデオンはエホバを信ずれば足る、其餘はエホバ、彼に代り彼を通うして爲し給ふべし（十六節）。

○ギデオン茲に於て彼の前に立つ者の普通尋常の人にあらざるを覺りたり、彼は彼と

語る者の彼なるを稍や悟るに至りたり、彼は今彼の彼たるを認めざるべからず、彼にしてエホバたらん乎、然らば彼の召命は動かすべからず、又彼の言は事實となりて顯はるべし、故に彼は茲に祭物を献げて彼を拜し奉れり、而して彼は之を納け給ひて彼のエホバなるを證し給へり、ギデオンは面と面を合せてエホバと語りつゝありしなり（十七—廿一節）。

○聖なるかな聖なるかな聖なるかな萬軍のエホバよ、汝の實在たしかを確たしかむるに唯献祭の一端あるのみ、唯汝のみ能く之を祝し之を納け給ふ、我は我が祭物の汝に納けらるゝを見て汝の我と偕ともに在し給ふを知る也、我は我が利慾の祈願を汝の前に陳べて、汝之に應こたへ給ふや否やを見て、汝の實在を試むる能はず、是を之れ神を試むるとは云ふ也、然れども祭物を献げて汝の聖旨のある所を知らんとするは是れ汝の許し給ふ所なり、ギデオンは此途に由りて汝の汝なるを知り得たり、願くは我も亦我が有する所の最も善き物を汝の前に献げて、我の靈と語る所の者の聖なる萬軍のエホバなるを知らんとを（同）。以賽亞書六章。



○エホバの使者、ギデオンの身を襲ひぬ、彼は目に神を視しを覺りぬ、面を合せて神を見し者は其榮光に耐えずして死すべしとは彼が曾て聞きし所なり、實に人は未だ曾て神を見しことなし、然るにギデオンは今や面前まへに彼の祭物を受納れ給ひしエホバを見奉れり、故に彼は歎聲を發して曰へり「干嗟我れ死なん、神エホバよ、そは我はまことに面を合せてエホバの使者を見たれば也」と、昔時ヤコブも亦エホバと相見えて死せざりしを歡び、其會見の地をベニエル(神の面)と名づけて曰へり「我れ面と面を合はせて神と相見て我が生命尙ほ存るなり」と、後日又シモンベテロ、イエスが其神たる榮光を以て彼に顯はれ給ひしを見て、死を怖れて其足下に俯して曰く「主よ我を離れ給へ、我は罪人なり」と、人は神を見んと欲すれども、彼と相見えて怖れざるを得ず、我等は自己の何たるを知らず、又神の何たるを知らず、故に濫りに神人合體を口にして憚からざるなり、エホバ、モーゼに曰ひ給はく、「汝は我が面を見ること能はず、我を見て生くる人あらざれば也」と、神を怖れざる者は彼を視奉ること能はず、

ギデオンの恐怖は其謙虛の證なり、是れありたればこそ彼は神に召され、其自顯の恩恵に與かりしなれ(廿二節)。創世記三十二章三十節。路加傳五章八節。出埃及記三十三章廿節。

○然れどもギデオンは恐るゝに及ばず、彼は死せざるべし、エホバは彼を殺さんとして彼に顯はれ給ひしにあらざり、彼を救ひ、彼を以て彼の家と國とを救はんために彼に顯はれ給ひしなり、神は又神として彼に顯はれ給はず、エホバとして顯はれ給へり、エホバは神なり、然れども宇宙の主權者としての神にあらず、人類の救主としての神なり、彼は萬有を主宰し給ふ、彼の手には權勢と能力あり、然れども彼れ人を救はんとして世に臨り給ふや、彼は身に謙遜けんそんを衣き、人の如き形狀ありさまにて現はれ給へり、人は神を見て生さざるべし、然れどもエホバを見て救はるべし、エホバは人の見るを得る神なり、先きにモーゼに顯はれ、エホバなる名を彼に示し給ひ、後にイエスキリストとして世に顯はれ、萬人の罪を贖ひ給ひし者なり、今やギデオンも亦彼を見奉れり、彼は見るに柔和なる人の友なりき、彼れギデオンを祝して曰ひ給はく「平安汝にあれ」と(廿



三節)。歴代志略上廿九章十二節。彼得前書五章五節。腓立比書二章八節。出埃及記三章十四節。

○「茲に於てギデオン彼所にエホバのために祭壇を築き、之をエホバシャロと名けたり、祭壇を紀念のために築くはイスラエル人の習慣なりしが如し（地名欄を見よ）、ギデオン今やエホバの特性に就て新たに示さるゝ所ありたり、彼は神は懼るべき者、捫るべからざる者、燃たる火の如き者、密雲、暗黒、又は暴風の如き者なりと想へり、然るに茲にエホバの柔和なる形状を拜し奉り、其「平安汝にあれ」なる優しき聲に接してエホバに關はる彼の思想は一變せり、彼は心に曰ひしならん、「エホバは猛威にあらず、權勢に非ず、平和なり」と、エホバシャロム、エホバは平和なり、人の近づき得る者、人に近づき給ふ者、救済の神、宥め得べき者、永久に怒り給はざる者、赦し給ふ者、故に我と我家と國とを敵人の手より救出し給ふ者と、是れ此時に於けるギデオンの感なりしならん、彼が彼所に紀念のために祭壇を築きて之をエホバシャロム（エホバは平和なり）と名づけしは宜べなり、神の僕の生涯に於て紀念すべき時は彼が神に就て

新たに學ぶ所ありし時なり、而して權威の神が平和の神として心に顯はれ給ひし時に、我等今日の基督者も亦石ならぬ壇を築きて、其上に新たに自己を献げまつるにあらずや（二十四節）。希伯來書十章十八節。

○エホバは先づ自己をギデオンに顯はし給ひ、彼を聖め且強め給へり、今より彼を以てイスラエルの民を救ひ給はんとす、然れども之に先だちて彼をして彼の家と郷とを救はしめ給ふ、ギデオンは先づ其父の有てるバアルの祭壇を毀ち、其傍なるアシラの竿を斫仆し、其木を以て父の圈より取出せし七歳の牡犢を燔祭としてエホバに献ぐべく命ぜられたり、是れ勇氣を要する行爲なり、父に背き、郷友に背き、其忿怒を買ふの行爲なり、然れどもギデオンは之を敢てせり、但し晝間に於て之を爲さずして夜間に於て之を爲せり、彼の勇氣に尙ほ足らざる所ありたり（廿五―廿七節）。

○郷民は怒れり、彼等はギデオンの死を其父に求めたり、然れども何ぞ計らん、父ヨアシは其子の行爲を怒らずして、却て其ために辯じたり、ギデオンの心を照らせし神の靈は既に其父の心を化せしが如し、敵と思ひし父は今や既に味方と化し居れり、ギ



デオンの此時の感謝は如何ばかりなりしならん、然れども斷じて神の命を行ふ者は恒に此の如し、反對は思ひしよりも強からず（廿八―卅一節）。

○ギデオンの父ヨアシ、其子の行爲を辯じて曰く「バアル若し神ならば自から論争ふべし」と、眞神と僞神、眞理と誤謬との別を識るに唯此一途あるのみ、眞神は懲し給ふ、僞神は罰する能はず、眞理は其れ自身を證明す、後、バツサイの人にて衆人の中に尊ばるゝ、教法師ガマリエル、同じ論法を以てイエスの弟子等の行爲を辯じて曰く「此人々を容して之に係はる勿れ、若しその謀る所、行ふ所、人より出でば必ず亡ぶべし、若し神より出でば汝等彼等を亡すこと能はず、恐らくは汝等神に逆ふ者とならん」と（卅一節）。使徒行傳五章三十四節以下。

○ヨアシの抗する所となりて郷民はギデオンに害を加ふること能はず、唯彼にエルバアルなる純號を附して之を放免せり、エルバアル、之を釋けば「バアル論争ふべし」との意なり、敵の嘲弄の言辭に深き意味の存する事あり、ギデオンは喜んで此名を受けしならん、彼は獨り心に默想して曰ひしならん「エルバアル、バアル論争ふべし、然

れども彼は論争ふ能はず、彼は口ありて語る能はず、耳ありて聽く能はざる偶像なり、彼れ恐るゝに足らず、彼を拜せるカナン、ミデアン、アマレキの民等も亦恐るゝに足らず、我は此名を帯びて進んでバアルと其從者等とを撃たんと」（卅二節）。

○彼の家と郷とは今や彼に服せり、彼は今より進んで彼の國を救はざるべからず、ミデアン人、アマレク人及び東方の民等は相集りて既にヨルダン河を渡りてエズレルの谷に陣を張れり、然れども恐るゝ勿れ、此時エホバの靈ギデオンに臨めり、敵は其大軍を悉して來れり、然るに之に對してエホバの靈ギデオンに臨めり、敵の聯合軍とエホバの靈、二者何れが強き乎、今やエズレルの谷に肉の力に對する靈の力は試めされんとす（卅三、卅四節）。

○エホバの靈ギデオンに臨めり、彼れ其靈に勵まされて箴を吹きしかばアビエセルの全郷は彼の旗下に集れり、彼れ又マナセ族を招きければ全族舉て彼の命に服へり、彼れ又アセル、ゼブルン及びナフタリの諸族を招きしかば彼等も亦彼の招きに應じて來れり、彼は一躍して人望の人となれり、彼は最早マナセ族の中にて最も弱き家の中の



最も微さき者にあらず（十五節）、人望、一時に身に蒐る時に大なる危険あり、ギデオンは今や輒もすれば神を忘れんとするの危険に瀕せり、彼は再び神に近づきて、彼と彼の民と兩つながらを力附くる者の神エホバなることを確かめざるべからず、所謂「羊毛を以てせし試験」とは是れなり（卅四節以下）。

○羊毛の一束は民の先導者たる己れギデオンを代表し、禾場は彼の周圍に在る民を代表し、露は神の靈を代表す、ギデオンは先づ知らんと欲す、神の靈は特に先づ彼一人の上に下りし者なる乎、彼の熱心なる者は彼が民衆の熱心に驅られて得し者にはあらざる乎、彼の受けし力は人よりなる乎、神よりなる乎、熱情の火なる乎、恩恵の露なる乎、是れ彼れが第一に知らんと欲せし所なり、而して神は彼の祈願に應ひて、其、彼が思ひしが如くなることを知らしめ給へり（卅六―卅八節）。露が神の靈を代表することに就ては詩篇第百三十三篇三節。何西阿書十四章五節を見るべし。

○ギデオンは第一に彼の受けし能力の特に神より送られし者なるを知らしめられたり、彼は次に彼の招きに應じて彼の下に集り來りし民も亦單に彼れギデオンの聲に應じて

集りし者にあらずして、神の靈に導かれて來りし者なるや否や其事を知らんと欲せり、即ち神はギデオンを離れて直に民を招き給ひしなる乎否やを知らんと欲せり、是れ第二の「試験」の意味にして、神は又ギデオンの祈願に應へて、其、彼が思ひしが如くなるを彼に知らしめ給へり（卅九、四十節）。

○ギデオン茲に於て、彼に臨みし能力の所謂多數の勢力に非ずして特に神より賜はりし靈なるを知れり、又民を強むる者の彼等の先導者なる彼に非ずして神御自身なるを知れり、導く者も神に導かれ、導かるゝ者も神に導かるゝを知れり、茲に於てか彼の懷疑は晴れ、憂慮は散じ、勇氣は百倍して、彼は彼の下に集ひ來りしすべての民を率ゐて進んでハロデの泉の邊にミデアン人に對して陣を張れり（次章一節）。

註 第二十五節并に二十八節に「第二の牡犢」と云へるは何の意味なるや原文不明にして知るに由なし、「其七歳」の者とあるは七年間に涉るイスラエルの束縛を表してなるべし、牡犢を罪祭として獻ぐることに就ては出埃及記二十九章三十六節、利未記十六章六節等を見るべし。



(二) 士師記第七章

要 略

- 一、ギデオンを率ひてミデアン人に對す(一節)。
- 一、ギデオン其兵を選抜す(二―八節)。
- 一、ギデオン密かに敵陣を窺ふ(九―十五節)。
- 一、ギデオン謀計を廻らして敵陣を敗る(十六―廿二節)。
- 一、ミデアン人の追撃(廿三―廿五節)。

1 斯くてエルバアル即ちギデオン及び彼と偕に在りしすべての民は朝夙に起出てハロデの泉の邊に陣を取れり、ミデアン人の陣は彼等の北の方にあたりモレの山に浴ひ谷の中にありき。

2 時にエホバ、ギデオンに曰ひ給ひけるは

汝と偕に在る民は、我れその手にミデアン人を附さんには餘りに多し、恐くはイスラエル我に向ひて自から誇りて曰はん「我れ我が手を以て己を救へり」と。然ればいま民の耳に告げて曰ふべし「誰にても懼れ慄く者はギレアデ山を廻りて歸り去るべし」と、

茲に於て民の歸りし者一萬二千人ありき、而して一萬人は残れり。

4 エホバ又ギデオンに曰ひ給ひけるは

民尙ほ多し、汝、彼等を導きて水際に下るべし、我は彼所にて汝のために彼等を試みん、凡そ我が汝に告げて「此人は汝と偕に往くべし」と言はん者は即ち汝と偕に往くべし、又凡そ我れ汝に告げて「此人は汝と偕に行くべからず」といはんものは即ち往くべからざるなり。

5 斯くてギデオン、民を導きて水際に下れり、エホバ、ギデオンに言ひ給ひけるは、

凡そ犬の舐むるが如くに其舌を以て水を舐むる者は汝之を別けて置くべし、又、凡そ其膝を折り屈みて水を飲む者をも亦然かすべし。



6 而して水を舐めし者の數は三百人なりき、餘の民は盡く膝を折り屈みて水を飲めり、  
 7 エホバ、ギデオンに曰ひ給ひけるは「我れ水を舐めたる三百人を以て汝等を救ひ、  
 ミデアン人を汝の手に附すべし、餘の民は悉くその所に就くべし」と<sup>8</sup>。茲に於て彼等  
 民の兵糧と其糞とを手に受取れり、ギデオンすべてのイスラエルを各自其天幕に送り  
 歸せり、然れどもかの三百人を留置けり、而してミデアン人の陣は彼の眼下に谷の中  
 にありき。

9 其夜エホバ、ギデオンに曰ひ給ひけるは「起てよ、下りて敵陣に攻入るべし、我れ  
 既に之を汝の手に付たせり<sup>10</sup>。然れど汝若し下ることを怖るゝならば汝、汝の僕フラと  
 偕に陣所に下るべし<sup>11</sup>。汝、彼等の言ふ所を聞かん、然かせば汝の手は強められて汝敵  
 陣に攻入ることを得ん」と、ギデオン即ち其僕フラと偕に下りて陣所に在る隊伍の外  
 邊に至れり、<sup>12</sup>ミデアン人、アマレキ人及びすべて東方の民は其數蝗蟲の如く谷の中  
 に偃し居れり、其駱駝も亦數ふるに勝へず、濱の砂の如くなりき<sup>13</sup>。ギデオン其處に至  
 りしに、或人其侶伴に夢を語り居れり、其人は曰へり

視よ、我れ夢を視たり、大麥のバン一つミデアンの陣中に轉び入りて天幕に至り之  
 を折仆し覆しければ天幕は倒れ臥せり

と<sup>14</sup>其侶伴答へて曰へり

是れイスラエルの人ヨアシの子ギデオンの劔に外ならず、神はミデアンと其すべて  
 の軍とを彼の手に附たし給へり

と<sup>15</sup>ギデオン夢の物語と其解釋とを聞きしかば地に伏して拜せり、彼れイスラエルの  
 陣所に還り曰ひけるは「起てよ、エホバは汝等の手にミデアンの軍を付たし給へり」と、  
 16 斯くて彼れ三百人を三隊に分ち、手に手に篋及び空瓶を取らせ、瓶の中に火炬に置  
 かしめたり<sup>17</sup>。彼等に曰ひけるは

我を視て我が爲す如くせよ、我れ陣所の外邊に至らん時我が爲す如く汝等も爲すべ  
 し<sup>18</sup>。我及び我と偕に在る者すべて篋を吹かん時、汝等も亦すべて陣營の四方にて篋  
 を吹きて曰ふべし「エホバのため、ギデオンのため」と。

19 斯くてギデオンと彼と偕に在りし百人、中更の初め番兵の新たに置かれし頃、陣營



の外邊（外）に至れり、彼等箠を吹き、其手に携へたる瓶を打碎きたり、<sup>20</sup>即ち三隊の兵等箠を吹き瓶を碎き、左手に火炬を執り、右手に箠を持ちて之を吹き、「エホバのため、ギデオンのため」と喊（叫）べり、<sup>21</sup>各人その持場（もちば）に立て陣營を圍みたり、全軍は走れり、彼等は叫號せり、遁逃せり<sup>22</sup>三百の人箠を吹きければ、エホバは各人の劍をして其同士と全軍とを撃たしめ給へり、全軍は逃れてゼレラの方ベテシッタまで、又タバタに沿ひシアベルメホラの境にまで至れり。

<sup>23</sup>茲に於てイスラエルの人々、ナフタリの中より、又アセルの中より、又マナセの全族の中より集ひ來りてミデアン人を追撃せり<sup>24</sup>ギデオン又使者を偏（あまね）くエフライムの山地に遣はして曰はせけるは

下りてミデアン人を邀（か）へ、其前に水を擁（よう）してベテバラ及びヨルダンに至るべしと、斯くてエフライムの人々盡く集ひ來りてベテバラ及びヨルダンに至るまでの水を擁したり<sup>25</sup>彼等はミデアンの侯伯オレブとゼエブの二人を俘（とら）へ、オレブは之をオレブの巖に殺し、ゼエブは之をゼエブの酒榨（さか）に殺し、尙ほもミデアンを追撃せり、而してオレ

ブとゼエブの首を携へてヨルダンの彼方（かた）に於てギデオンの許に至れり。

## 註 解

## 地名、人名

「ハロデの泉」「モレの丘」兩軍エズレルの谷を隔て相對す、ハロデの泉は其南にあり、「モレの丘」は其北にあり、「ハロデ」は戰慄の意なり、三節に謂へる懼れ慄くより出し名なる乎、若し然りとすれば名は此事ありしにより後に附せられし者なるべし、撒母耳前書廿九章一節に謂へるエズレル（エズレル）に在る泉水とは此の泉のことなるべし○<sup>3</sup>「ギレアデ山」ヨルダン河の東に在り、此名の山、其の西に見當らず、故に日本譯聖書の「ギレアデ山より歸るべし」は地理學上意味を爲さず、余輩は博士ダグラスの説に従ひ「ギレアデ山を廻りて」と改譯せり、即ちバレスチナ本土を避けて、ヨルダン河を渡りギレアデの麓（か）に添ひ迂廻して家に還るべしとの意なるが如し、註解者を多く苦めし一節なり○<sup>22</sup>ミデアン軍は其一部は北の方ベテシッタに向ひ、其他の一部は南の方



ベルメホラに向ひ、南北兩方に向て遁れしが如し、アベルメホラは預言者エリシヤの生地なり（列王紀略上十九章十六節）、ゼレラはゼレダ（同十一章廿六節）又はザルタナ（同四章十二節）ならんとの説の外、是等の地名に就て知る所なし○25「オレブ」鳥「ゼエブ」狼、人に禽獸の名を附けしは我國にも其例あり、頭八咫鳥、土蜘蛛、熊襲の名を参照すべし○「オレブの巖」「ゼエブの酒搾」後世にて附せし名なり、士師記の書かれし時代には著名の所なりしならむ。

### 教 訓

○イスラエルの戦争はエホバの戦争なり、是れ數を以て勝つべき者にあらず、信を以て勝つべき者なり、人は數に頼むも神は信を求め給ふ、二萬の人は多きに過ぐ、神によりて敵を敗らんとす、三百人にて足る、然り、一人にて足る、神は其愛子をして「我れ我が手を以て己を救へり」と云はしめ給はず（二節）。

○モーセの遺書に曰く

汝その敵と戦はんとて出るに當り馬と車を見、又汝より數多き民を見るも之を懼る勿れ、そは汝をエジプトの國より導き上りし神エホバ汝と偕に在せばなり……誰か懼れて心に臆する者あるか、其の人は家に歸り行くべし、恐くはその兄弟等の心、之が心の如く挫けん（申命記二十章一節、八節）

と、敵の多きは懼るゝに足らず、味方に怯者あるは恐るべし、怯者は之れを淘汰すべし、怯者は之を其家に還すべし、怯者は獨り怯者たるに止まらず、其怯を他人に傳染す、怯者を陣中に留めて全軍怯者と化するの虞れあり（二節）。

○怯者は其家に還るべし、然れども東の方ヨルダン河を渡り、ギレアデ山を廻りて還るべし、怯者は其怯を全軍に傳ふるのみならず、之を國民に傳へて其銳氣を挫くの虞れあり、故に家に還るに方ても國民の中を通過すべからず、國外を廻りて行くべしと、而して此命に従ひ陣を去りし者一萬二千人なりしと云ふ、即ち陣に臨みし者の過半數なりしと云ふ、憐むべきかな怯者！（二節）。

○蝗蟲の如きミデアンの軍に對して二萬の軍は多きに過ず、然るに既に其半を失ひた



り、イスラエル人の心中察するに餘りあり、然るにエホバは更らに言を續けて曰ひ給ふ「民尙ほ多し」と、軍は更らに精選せられざるべからず、民の自己に恃む心は更らに除かれざるべからず、一萬人は尙ほ多し、神の奇蹟を表はすに足るの少數にまで減ぜられざるべからず(四節)。

○ギデオン軍を率ゐてハロデの泉より流れ出る小川の水際に至れり、此所に其三百人は直に地に伏し、其面を水に當て犬の舐むるが如くに其舌を以て水を舐めたり、其餘の民は盡く膝を折り、屈みて水を飲み、前者は敏捷を表し、後者は猶豫を示せり、敵を面前に控へながら猶豫する者の如きは取るに足らず、ギデオンは勇あり且つ警戒怠らざる三百人を以て敵の大軍を敗るべしとなり(五、六、七節)。

○水邊に警戒の缺乏を表せし一萬餘の民は軍を去りて家に還るに及ばず、其携へし所の兵糧と箠とを戦士に渡し、各自其天幕に留りて、少數の攻撃隊の後援たるべしとなり、怯者は家に還り、勇者は陣に留り、敏者は進んで敵に當る、軍の區分、斯の如くに成りて、小軍も能く大軍を敗るを得べし、軍を弱からしむることにして其尤難なる

に如く者はなし、勇怯を區別して勇氣は十倍し、利鈍を區分して銳利は百倍す、區分なるかな、區分なるかな、事を成すの秘訣は茲に在り(八節)。

○軍の淘汰成り、ギデオンは今や直に進で敵を撃て之に勝つを得べし、然れども必勝の確信、未だ彼に起らず、彼に尙ほ躊躇逡巡の色あり、故にエホバは彼を密かに敵の陣に遣り、其状況を察せしめ給ふ、而してギデオン其所に至れば、敵の陣中、既にエホバとギデオンの名を聞て震ふを見たり、「大麥のパン一つミデアンの陣中に轉入て天幕に至り之を打仆し覆しければ天幕は倒れ臥せり」と、是れ懦夫の夢語に過ぎず、然れども能く陣中の輿論を表する者なり、大麥のパン一個は酒搾の中に麥を打ち居たりしヨアシの子ギデオンなり(前章十一節)、彼れミデアンの陣中に轉び入りて其王の天幕を打仆し、之をして立つ能はざるに至らしめんと、敵軍既に此の恐怖を懷けり、一撃の下に之を挫くを得べし、我等に力を添へ給ふ神は同時に敵の膽を挫ぎ給ふ、即ち恐怖の靈を彼等に下して彼等の心を弱くし、我等をして彼等を挫くに更に容易ならしめ給ふ(九—十四節)。



○ギデオンの敵兵の夢物語を聞いて歡びて地に伏してエホバを拜せり、必勝の確信今や彼に起れり、故に彼は急ぎイスラエルの陣に還りて曰ふ「起てよ、エホバは汝等の手にミデアン軍を付たし給へり」と、戦は既に勝ちしものとしてギデオン之をイスラエルの陣に報じたり(十五節)。

○エホバに頼りてミデアンの大軍を敗るに方りてはギデオンは劍を抜て血を流すの要を見ざりき、**矢と火炬**、鳴る物と光る物、是れにて足れり、敵は之を敗れば足る、殺すを要せず、其膽を奪へば足る、其生命を奪ふを要せず、ギデオンの戦争は神の戦争なりき、故に自から進んで血を流す戦争にあらざりき(十六―廿節)。

○ギデオンと彼の三百人は各自その持場に立ちて敵の陣營を圍み、叫び且つ光を放てり、而して敵軍は互に相殺せり、我等叫べば彼等互に相殺し、我等輝けば彼等先を争ふて走る、神の戦争は斯くあらざるべからず、自から手を下して敵を殺すべからず、敵、若し殺さざるべからずば敵をして之を殺さしむべし、我等は唯勝利の聲を放ち、真理の光を放てば足る、殺戮は我等の爲すべき事にあらず(廿一、廿二節)。

○敵軍遁逃の報傳はるや、全國今や怯懦の民あるなく、ナフタリ人も、アセル人も、マナセ人も招かざるに集ひ來りて北ぐる敵を逐へり、世に敗軍を追撃し得ざるが如き怯者あるなし、他人をして敵を敗らしめ、而して己れ其追撃の任に當る、人情は古今東西變ることなし、勇者は獨り立て敵を敗り、怯者は隠れて批評眼を以て勝敗を目撃し、敵の敗走を認めて然る後に集ひ來りて戦勝の榮譽を竊む(廿三節)。

○然れどもエフライム人は少しく恥を知れり、彼等は招かれずして追撃の軍に加はらざりき、ギデオン又彼等の頼むべきを知りたれば使者を遣はして彼等の参加を促がせり、而してギデオンの召に應じて下り來りしエフライム人は其爲す所又群を抜けり、彼等はベテラ及びヨルダンの渡口に敵を邀へ、其處に敵將二人を殺し、其首を携へてヨルダン河の彼方にギデオンに會せり、唯憾む、敵を敗りて後に、信仰の戦争は殺戮の戦争と化せしことを、ギデオンの墮落は實にミデアン軍潰走の時を以て、始まれり、成功の時、是れ墮落の危機なり、ギデオンは敵に勝つゝの秘訣を知て之を逐ふの術を知らざりき、敵將の生首を見て喜びしギデオンは自己が家の中に大敵を起すの備を



作れり(廿三―廿五節、第九章參照)。

### (三) 士師記第八章

#### 要 略

- 一、ギデオンの領智を以てエフライム人の怒を解く(一―三節)。
- 一、ギデオン、スコテとベヌエルの民に食を乞ひて斥けらる(四―九節)。
- 一、ギデオン、ミデアンの軍を殲く(十―十二節)。
- 一、ギデオン、スコテとベヌエルを懲す(十三―十七節)。
- 一、ギデオン其兄弟の仇を報ゆ(十八―廿一節)。
- 一、ギデオン、イスラエルの王位を辭す(廿二―廿三節)。
- 一、ギデオン掠奪の金を得てエホデを造る(廿四―廿七節)。
- 一、ギデオン平康をイスラエルに供す(廿八節)。
- 一、ギデオンの晩年と死(廿九―卅二節)。
- 一、ギデオンの死とイスラエルの墮落(卅三―卅五節)。

一 エフライムの人々ギデオンに曰ひけるは「汝ミデアン人と戦はんとて往ける時、我等を招かざりし此詭譎は何事ぞや」と、斯くて彼等烈しく彼と争ひたり。彼、彼等に曰ひけるは「我、汝等に比べて何を爲せしぞ、エフライムの拾ひ得し葡萄はアビエールの收穫りし葡萄に勝るにありずや。神はミデアンの侯伯オレブとゼエブを汝等の手に付し給へり、我れ汝等に比べて何を爲し得しぞ」と、ギデオン斯く曰ひしかば彼等の憤怒解けたり。

二 ギデオン彼と偕にありし三百人と共にヨルダンに至りて之を濟り、疲れながらも尙ほ追撃せり。彼、スコテの人々に曰ひけるは「願くは我れに従へる人々にパンを與へよ、彼等は疲れたれば也、而して我はミデアンの王ゼバとザルムナを追撃しつゝあり」と。スコテの侯伯等曰ひけるは「ゼバとザルムナ今既に汝の手の中に在るや、我等何ぞ汝の軍にパンを與へんや」と。ギデオン曰ひけるは「然らばエホバ我が手にゼバとザルムナとを付し給はん時、我れ野の荊と棘とをもて汝の肉を打つべし」と。斯くて其所よりベヌエルに上り同事を彼等に述べたるに、ベヌエルの人もスコテの



人の答へしが如くに答へしかば、彼れ又ベヌエルの人に告げて曰ひけるは「我れ安らかに歸る時は此の城樓を毀つべし」と。

10 倍ゼバとザルムンナは其軍凡そ一萬五千人を率ゐてカルコルに在りたり、是れ東方の民の全軍中、生残れる者のすべてなり、戦に斃れし者は劍を抜く所の者十二萬人なりき<sup>11</sup>。ギデオンの即ちノバとヨグベバの東にて天幕に住める者の路より上りて敵の陣營を撃ちたり、陣營は安心して備へざりき<sup>12</sup>。ゼバとザルムンナとは走れり、ギデオン其跡を逐ひてミデアンの二人の王ゼバとザルムンナを擒にし悉く其軍を敗りたり。

13 斯くてヨアシの子ギデオン、ヘレシの坂より軍を旋し<sup>14</sup>スコテの人の中、一人の少壯者を執へて之に尋ねたれば、則ちギデオンのためにスコテの侯伯及び其長老七十七人を記録したり<sup>15</sup>。ギデオン、スコテの人に到り曰ひけるは「茲にゼバとザルムンナを視よ、此者に關して汝等は我を嘲けりて『ゼバとザルムンナ今既に汝の手の中に在るや、我等何ぞ疲れたる汝の軍にバンを與へんや』と曰へり」と<sup>16</sup>。茲に於て彼れ邑の長老等を執へ、野の荊と棘とをとり、之を以てスコテの人を懲したり<sup>17</sup>。彼れ又ベヌエルの

城樓を毀ち、その邑の人を殺したり。

18 斯くて後ギデオン、ゼバとザルムンナに曰ひけるは「汝等がダボルにて殺せし者は如何なる者なりしや」と、彼等答へけるは「彼等は能く汝に似たり、其一人は王の子の如くに見えたり」と<sup>19</sup>。彼れ曰ひけるは「彼等は我が兄弟、我が母の子なり、エホバは活く、汝等若し彼等を生し置きたらんには我れ汝等を殺すまじきものを」と<sup>20</sup>。即ち其長子エテルに曰ひけるは「起て彼等を殺すべし」と、然れども少者は其劍を抜かざりき、彼れ年若きが故に懼れたれば也<sup>21</sup>。茲に於てゼバとザルムンナ曰ひけるは「汝自ら起て我等を撃てよ、そは大人に大人の力あれば也」と、ギデオン則ち起てゼバとザルムンナとを殺し、その駱駝の頸に懸けたる半月形の飾を取りたり。

22 茲に於てイスラエルの衆ギデオンに曰ひけるは「汝、我等を治めよ、汝と汝の子及び汝の孫も亦爾かせよ、それ汝、ミデアンの手より我等を救ひたればなり」と<sup>23</sup>。ギデオン彼等に曰ひけるは「我れ汝等を治めざるべし、亦我子も汝等を治めざるべし、エホバ汝等を治め給ふべし」と。



24 ギデオン又彼等に曰ひけるは「我れ汝等に一つの希願あり、汝等が各自掠取せる環を我に與へんこと是なり」と（是れ彼等イシマエル人なるが故に金の環を着けたるに由る）<sup>25</sup>衆答へて曰く「我等悦んで之を與へん」と、即ち外衣を敷き各自其掠取せる環を其中に投げ入れたり<sup>26</sup>ギデオンが求めて得たる金の環の重量は一千七百シケルなり、外に半月形の飾、耳環、ミデアンの王等の着たる紫の衣及び駱駝の頸に懸けたる鏈<sup>くわん</sup>などもありき<sup>27</sup>ギデオン之をもて一箇のエホデを造り之を己の邑なるオフラに藏む、イスラエル舉て其處に行いて之と淫を行ふ、此物ギデオンと其家とを陥るの罟となりたり。

28 斯くてミデアンはイスラエルの子等の前に征服せられて復たび其頭を擡ぐることを得ざりき、斯くて國はギデオンの世にある間、四十年間休息を得たり。

29 斯くてヨアシの子エルバアル往きて己の家に住めり<sup>30</sup>ギデオン其身より出たる子七十七人を生めり、彼れ多くの妻を有ちたれば也<sup>31</sup>シケムに居りし其妻も亦彼に一人の子を産みしかば彼は之をアビメレクと名けたり<sup>32</sup>ヨアシの子ギデオン高齡に達して死

し、アビエゼル人のオフラに在るその父ヨアシの墓に葬られたり。

33 ギデオン死するや否やイスラエルの子等翻りて復たバアルを慕ひ、バアルペリテを其神となせり<sup>34</sup>イスラエルの子等、其四圍の諸の敵の手より己を救ひ出し給ひし神エホバを記憶へず<sup>35</sup>又エルバアル即ちギデオンがイスラエルに爲せしすべての善行に循ひて其家を厚く待らふことをせざりき。

### 註 解

#### 地名、人名等

5 「スコテ」盧の意なり、其名の起原に就ては創世記三十三章十八節を見るべし、今に至り其位置を確定する難し、ヨルダンの低地に於てスコテとサルタンの間云々（列王紀略上七章四十六節）とあればヨルダン河沿岸の低地に在りしは明かなり、又スコテの谷とあれば（詩篇六十篇六節）高地の間に介して特に一郷を作りし邑なりしが如し、ヨルダン河の東岸、ヤボクの支流が之に注ぐ邊にありしならんとは一般の説なり ○8



「ベヌエル」神の面の意、創世記三十二章三十節前後を見るべし、「ヤボクの渡」より程遠からぬ所でありたり、其所(スコテ)より上りてとあればヨルダンの低地より東方高原に上りし所でありしは明かなり、然れどもスコテと同じく其位置を判定する能はず○7「ゼバとザルムンナ」生贄と隠場無し、其の侯伯は烏と狼(前章廿五節註解参考)、其王は生贄と隠場無し、「生贄」は神に獻ぐる動物、「隠場なし」は無頼漢なり、共に甚だ忌ましき名なり、蓋し少しく原名の音を存してイスラエル人が附せし緯名なるべし、ミデアン人と雖も自から選んで斯かる名を其王に附せざりしならん○10「カルコル」位置判然せず○11「ノバとヨグベバ」ノバは判然せず、然れどもヨグベバは今尚ほユベイハの名を以て存す、ヨルダン河以東の高原がアラビヤ砂漠に接近する邊にあり、ガの子孫は…ヨグベバ…などの堅固なる邑を建て羊のために圈を建たり(民數紀略三十二章三十五節)とあれば有名なる城邑なりしが如し○13「ヘレンの坂」原文不明なり、隨て其位置は固より知るを得ず○26「シケル」金一シケルは二百五十二<sup>シリン</sup>六二なり、故に我國今日の金貨に換算すれば凡そ二十圓に當るべし、故に

千七百シケルは代價金三萬四千圓餘の金塊なり○27「エホデ」或ひは祭司が其職を執る時に着せし聖衣なりと云ひ(出埃及記二十八章四―七節)或ひは偶像の一種なりと云ふ、ギデオンの僧衣を着て民の畏敬を惹かんとせしか、或ひは或る種の偶像を作りて其迷信を促さんとせし乎、二者孰れなりしとするも靈的崇拜を棄て、物質的崇拜の弊を作りしは明かなり○31「アビメレク」我父は王なりとの意、ギデオン、王位を辭せしも此名を其妾腹の子に附せしを見れば、彼の心中既に王者を以て自から任せしにあらざるか、何れにするも彼に取りては甚だ不穩當の名なり○33「バアルベリテ」契約のバアル、契約を司るバアル、或ひは契約を守るバアル、即ち能く契約を守りて歸依者の祈願を聽くバアル、九章四十六節に「ベリテ神」とあるに同じ。

## 教 訓

○一たび敵の強堅を挫きし後のギデオンは信仰の人にあらずして普通の軍人なりき、彼は北ぐる敵の跡を逐ひ殺戮を行ひ、仇を報ひ、忿恚を發し、掠奪を擅にし、淫縱に



耽けり、宗教的安逸をさへ求めて榮華の中に一生を終れり、國に敵國なければ亡ぶと、人に艱難なければ其の信仰衰ふ、ミデアン人の侵入に由りてギデオンの信仰は喚起せられたり、ミデアン人の敗亡に由てギデオンの信仰は衰へたり、或る意味より云へばイスラエルを救ひし者はギデオンにして、ギデオンを救ひし者はミデアン人なりき、謹むべきは強敵を前に控へし時にあらずして、之を敗りし後にあり(全章)。

○ミデアンの與みし易きを知りしエフライム人は軍功の更らに多からざらんことを憾みたり、故にギデオンを責むるに初めより彼等を招かざりしを以てせり、北ぐる敵を逐ひて功を顯はせしエフライム人は陣營に據りて相對せし敵をも敗り得しならんと想へり、然らば彼等何ぞ自から進んで敵に當らざりしぞ、他人をして敵の強堅を挫かしめ、而して己れ追迹の任を受けて少しく功を立てたればとて、冒險の功に與からざりしを怒る、エフライム人は今の教會獨立論者なり、外人の跋扈せし時には身を匿して一臂の勞を貸さず、而して其の傲慢の角の挫かれし今日、瀕りに聲を高くして獨立を唱ふ、然れども視よ、ミデアン人は今は遁れて既に河の彼方に在り、彼等は追はざる

も自から亡ぶべし、今や勇者の己を抑ふべき時なり(一節)。

○功成りし後のギデオンは政治を捨て宗教を取れり、彼はまことに善き選擇を爲せり、そは政治は低き此世の事にして宗教は高き神のことなればなり、然れどもギデオンの選びし宗教はモーセ、エリヤ、エレミヤのその如き聖き精神的宗教にはあらずき、彼はミデアン人より奪取りし金を蒐めて金襴の僧衣を作り、之を己が身に着けて民の敬崇を己に惹かんとせり、茲に於てかイスラエルは擧て之と淫を行へりと云ふ、即ち彼等はエホバを棄て燦然たる金色の法衣を拜するに至れりと云ふ、而已ならず、法衣は又ギデオンと其家とを陥るの罟となれりと云ふ、即ち、法衣は民を惑はし、ギデオンと其全家とを墮落に導きたりと云ふ、諱むべきは金襴のエホデに止まらず、すべての教職的衣○服○なり、之に由て他を欺き己を滅せし實例は、古今東西枚擧するに違あらず(二十二—二十七節)。

○多妻は惡事なり、而して舊約聖書は之を誡むるに禁制的律法を以てせずして事實的證明を以てせり、アブラハムの場合に於て、ギデオンの場合に於て、ダビデ王の場合



に於て、多妻は多くの紛雜、多くの悲痛の基因なるを示せり、特別に神に選ばれし者の行爲なればとて、多妻は惡事たるを失はず、神は其愛子たりと雖も罪の正當なる結果より彼を免除し給はず、罪の價は死なりと云ふ、士師ギデオンたりと雖も殺人、褻瀆、多妻の刑罰より免かるゝこと能はざりき、彼れ死するや否や、イスラエルの民は再び以前の偶像崇拜に戻り、彼の子等は互に相争ひて彼の家は終に全滅に歸せり（廿九節以下、第九章末節まで）。

### エレミヤの聖召

#### 耶利米亞記第一章

余の特愛の預言者はエレミヤである、余はイザヤを尊崇し、エゼキエルを敬畏し、ダニエルを歎賞する、然かしエレミヤに至ては余は彼を親愛する、預言者と云へば如何

にも嚴格にして近づくべからざる者のやうに思はれるが、併しエレミヤに至ては彼に就て少しもさういふ感覺が起らない、余は余の親しき友人として彼に近づくことが出来る、彼は余に取りては預言者といはんよりは寧ろ詩人である、神の僕といはんよりは寧ろ人類の友である、舊約聖書人物中で余が最も親んだ者は此「涙の預言者」である。彼は祭司の子であつた（一章一節）、然かし彼は自身、祭司とならなかつた、彼は死に至るまで純然たる平信者であつた、爾うして幾回となく祭司（今の所謂宗教家）を敵に有つた、彼は何處までも民の預言者であつた、即ち神と民との間に立つて祭司を經ずして直に神の聖意を民に傳ふる者であつた、預言者中彼の如くに慣れ／＼しく神に近いた者はなかつた、彼は神に怨恨を述べた、幾回か強いて其恩恵を求めた、彼は神の愛を信じて幾回か神の尊嚴を冒した。

民の預言者であつた彼は自から田舎の預言者であつた、彼はエルサレムを距る三哩、ベニヤミンの地アテトテに生れた（一章一節）、爾うして彼は終生、居を此地にトせんとした（卅三章七節以下）、イザヤが都會の預言者なると、ダニエルが朝廷の預言者な



るとに對して、エレミヤは何處までも田舎の預言者であつた、彼は特に地方の邑々のために辯護した、彼れは閑靜と孤獨とを愛した、都會の紛雜は彼の最も忌み嫌ふ所であつた。

彼は玄情の人であつた、彼の理性は屢々情の支配する所となつた、彼は怒つた、泣いた、彼はイザヤのやうな圓滿なる思想家ではなかつた、ダニエルのやうな政治家ではなかつた、又エゼキエルのやうな意志の人ではなかつた、彼に婦人の情性があつた。彼の如くに強い人はなかつたが、又それと同時に彼の如くに弱い人はなかつた、彼に細美なる所があつた、彼の愛は婦人のそれに似て居つた、深くして濃であつた。

耶利米亞記第一章は預言者の預言職就任に關する記事である、聖職就任と云へば如何にも莊嚴なる儀式でも執行されたやうに思ふ人もあらうが、然かしそれは決して爾うではなかつた、平民的預言者の就任式なるものは如何にも平民的で如何にも單純であつた、彼の首に膏を注ぐ祭司の長もなかつた、彼のために祝福を祈るレビの族もなかつた。

つた、又彼のために證人にたつ同志友人の如き者もなかつた、彼は獨り神の前に立ち、神より直に預言の職を授かつた、エホバの言はヨシヤ王の治世十三年に始めて彼に臨んだとのことであれば、彼が始めて此大任を自覺したのは彼が十九歳の時であつたらうとのことである、神を識るに最も良き時は青年時代である、宗教は老年のことであるなどは余が余の國人の口より屢々耳にした所であるが、然かし余は茲に一青年の獨り自から進んで神の預言者たるを肯ぜし者あるを知て大に余の青年時代の確信を強うした。

エホバの言我に臨みて云ふ、我れ汝を腹に造らざりし先に汝を識り、汝が胎を出でざりし先に汝を聖別し、汝を立て、萬國の預言者となせり(四、五節)

エホバの言は如何にして彼に臨んだであらうか、祭司の口を以てあらうか、否な、或ひは天より響き渉る聲を以てあらうか、多分さうではあるまい、是れは多分青年のエレミヤが彼の成育の地なるアナトテ附近の郊外を獨り歩みし時に於て、或ひは古きオレブ樹の下に獨り黙禱に耽けりし頃、彼の心琴に幾度となく觸れし細き微かなる聲



であつたらう、彼は幾度となく之を打熄うちけさんとしたであらう、然かし其聲は彼を去らなかつたであらう、彼は終に彼が預言者として神に豫定されし者であることを信ぜざるを得ざるに至つたのであらう、「我れ汝を腹に造らざりし先に汝を識り、汝が胎を出ざりし先に汝を聖別し、汝を立て、萬國の預言者となせり」と、人よりにあらず又人に由らず宇宙萬物の造主なるエホバの神に由りて萬國の預言者として立てられたりと、若し爾うであるならば彼は此職を否いなさんと欲して否いなむことが出来ない、又彼の父も彼の母も、彼の兄弟も姉妹も友人も彼の預言者たるを拒むことが出来ない、憐むべき人は神に其職を定められし者である、彼は先天的に神の捕虜である、事業の選擇の如きは彼の爲し得ることではない、彼は否いなでも應こたでも彼のために定められし職に就かなければならない、豫定の天職を示されし時の神の子供の心の状態は決して感謝ばかりではない、エレミヤに取ても多分爾うであつたらう、彼も彼の懐いだきし多くの小なる希欲アムビションを放棄するの苦痛を感じたであらう、彼も亦彼が父の職を嗣いで祭司とならんことを欲ほふ父の意志に乖そむくことの苦痛を感じたであらう、然かし止むを得ない、彼は母の胎内に造

られざりし前より神に定められし預言者である、預言者たらざらん乎、彼は無きに等しき者である、預言者たるは辛い、然かし止むを得ない、其職に就くと就かざるとは彼に取ては死活問題である。

エホバの聖召めしの聲に接して青年のエレミヤはエホバに答へて云ふた、

噫主エホバよ、視よ我は幼少わかきが故に語るを知らず(六節)

と、彼は彼の年齢不足の故を以て預言の大任を辭退せんとした、彼は一には未だ自己を信じ得なかつたであらう、二には社會が彼の若年を侮り、耳を彼の言に傾けざるを恐れたであらう、或ひは彼の親戚友人にして、彼に起立の尙ほ早さを説き、尙ほ數年の修養を勧めた者もあつたであらう、何れにしる彼は内氣うちきの青年であつた、彼は性來うまれつの格闘家でなかつた、彼は寧ろ憶病者であつた、彼は公的生涯を忌んだ、若し彼の意志其儘を云はしめしならば、彼はユダの山地に橄欖を植え、其谷間に麥を蒔き、前の雨と後の雨とを待つて、穗にエホバの恵めぐみの實みるを視て、彼々讚めまつらんことを望んだであらう、彼の理想は多くの詩人のそれと等しく「藁葺わらぶきの屋根の下に少ちささ妻と北